

WIFE

特集 ● 私の育児ノイローゼ

特集レポート ● 「子供」が「子供」を産んで ● 落第ママに徹する

座談会 ● なぜ子育てがつらいのか 安達倭雅子ほか

レポート ● 保育園初体験 赤井久美子

職場は多面体 ● 私は常務取締役 三上初美



逐次刊行物

認 59.6 5 和

立婦人教育会館
情報図書室



株式会社 ミネルヴァ書房
〒607 京都市山科区日ノ岡堤台町1
☎(075)581-5191 振替京都 2-8076

富士谷あつ子 (京のおんな大学主宰、評論家)

あたりまえの 女たちの出発

兼業主婦時代

シリーズ
(女・いま生きる)

⑥

ただ一たびの、かけがえない人生——それをどう
生きるのか。これまでとく家事と育児だけに終わ
りがちの女性も、いまようやく自分自身の世界をも
ち、精神的、経済的に自立し、心豊かな生き方をし
はじめた。著者自身、ごくふつうの主婦として子育
てをしながら働いてきた女性の一人である。この本
は、仕事と家庭のあいだを揺れながら、イキイキし
た子育て後の人生を送りたいと考えるあなたにおく
る体験的兼業主婦論。

一五〇〇円千250

新・現代家族

村松基之亮著 (読売新聞記者)

学歴がないと今の社会では人の価値はなくなるので
しょうか。現代社会の病理は、家族、その中でもとり
わけ子どもにあらわれやすい。なにげないあなたの一
言が、子どもを蝕んでいます。

一三〇〇円千250

女性学研究会編

講座 女性学全4巻

46判上製/平均二八〇頁/内容見本呈/予約募集中

- 1 女のイメージ
- 2 女たちのいま
- 3 女は世界をかえる
- 4 女の目で見える

*既刊

女たちはいま、大きな変動の渦の中にいる。女をとり
まく問題状況を明らかにし、女性学の全体像を示す。

《執筆》中富邦・天野正子・神田道子・井上輝子・原ひろ
子・目黒依子・田中和子・金城清子・袖井孝子ほか

*第一回配本/二〇〇〇円千300

女性学研究会編 女性学をつくる 一八〇〇円

井上輝子 女性学とその周辺 二〇〇〇円

神田道子 女たちのゆくえ 一九〇〇円

上野千鶴子編 主婦論争を読むⅡ 各一九〇〇円

秋山洋子 女たちのモスクワ 一八〇〇円

加藤春恵子 女たちのロンドン 一八〇〇円

横村久子 女たちのヨーロッパ 一七〇〇円

東京都文京区
後楽 2-23-15

勁草書房

振替/東京5-175253
電話 (03)814-6861

いいたい放題 したい放題

書きたい放題 よみたい放題の

投稿誌が わいふです

人間 ほんとにやりたいことは やれるもの

ウジウジ・イライラふり捨てて

思いつきりやれば 気がはれる

いろんな人のいろんな時の

いろんな心を材料にして

二か月に一回 わいふが出来あがるのです

仕上げに適量の“ユーモア”と

“思いやり”のスパイスを！

ピリツとくるか まろやかになるか

それはあなたの“うで”次第！

WIFE 188

わいふ目次

表紙イラスト 松本圭以子
レイアウト (株)アウラ

森は生きている

4

文・監修 富山和子

職場は多面体

9★

Y O・北川洋子・三上初美

うちの悪ガキ

15★

鈴木たづ子・松尾真理子・T M

オットどっこい

19★

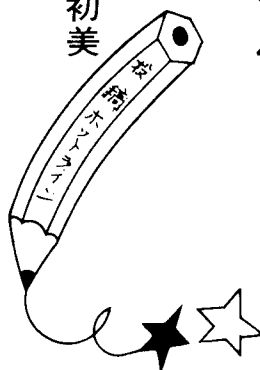
原真智子・大川原みち子

特集・私の育児ノイローゼ

「子供」が「子供」を産んで

22

I T



隣人が私を救った

29

日暮明子

落第ママに徹する

36

瀬戸 環

うつ病の記

松本弘子

51

座談会

なぜ子育てがつらいのか

56

安達倭雅子・属 静・中川慎子・
和田好子

生きてます活字人間

68★

西尾克子・山本彩子・田中恵子・
辻浦知津代

マンガ笑止・笑止

栗田笑 72

私立高校あらかると

真の人間教育をめざす

73

橘女子高等学校

文 早川裕子 写真 長野早紀子

ファミリリー・イン・ブルー 82★

森本弘子・茅野雨路子・細野清美

マジの発言 88★

野崎美智子・庄田博子・街 京子

WIFE・カイトフノク

子連れ遊びのガイド こどもの国 96

宮前 和

WIFE・連載3

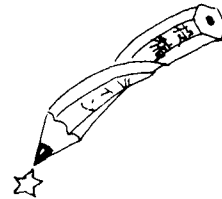
きのえね

甲子ハイツ一〇二号室 100

柳原和子

わいふパーティー・私のレポート 110

若竹キミイ・西内泰子・柏木輝子



わいわいがヤガヤ 112★

望月 緑・紺清由美子・西脇セツ
酒井智恵子・清水博子・石川 桂
三吉野優子

対話のページ 田中喜美子 120★

WIFE・レポート

保育園初体験 赤井久美子 124

WIFE・連載3

とも

智よ、自然に学べ 129

こくぶんひろこ

サークルだより 81

情報コーナー 122

テーマ原稿募集 141

投稿規定 142 編集だより 144

★印は
投稿ホットライン
のページです！

森は生きている

(2) 水と土のおくりものの

富山和子

六七

五八

見事に成育した人工のスギ林（秋田スギ林）



昭和57年の長崎の水害で 治山事業を施したところは崩れなかった

川の水はなぜいつも流れているのだろうか。日本のような急斜面の国土では、雨は一日で海へ流れてしまってもよいはずだ。それなのに、晴れた日でも水が流れているのはなぜだろう。

その秘密こそ、森林にある。森林は、そのふところ深く雨を受け入れると、少しずつ地下へ送りこみ、やがて地表に吐き出す。

地下水の流れは緩やかだ。降った雨が地下にしみこみ、再び地表にわき出るには、三百年も五百年もかかっている。私たちは、江戸時代の水さえ飲んでい

(2) 水と土のおくりもの





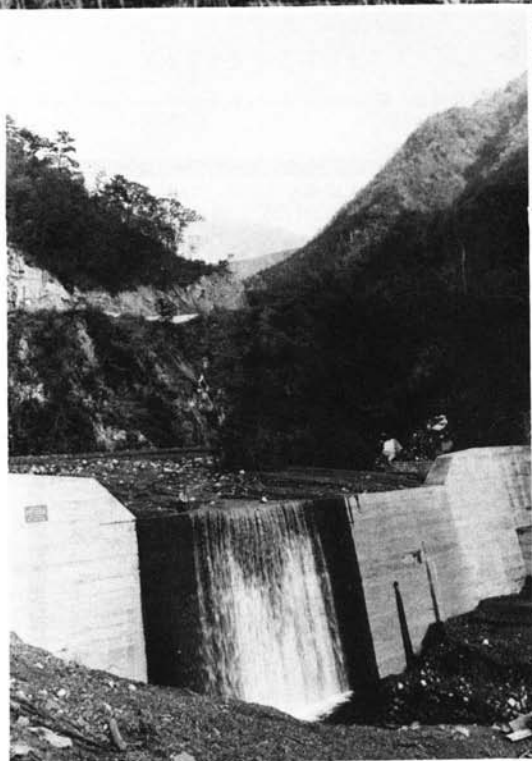
ゆっくりと地下をくぐってきたわき水は、集まって谷川となり、小さな川になり、やがて大きな流れとなる。日本で、少しぐらい日照りが続いても水が絶えなかったのは国土の七割を占める大森林のおかげであった。

もし山に森林がなかったら、台風や集中豪雨のたびに、土ははがれ、山は崩れ、日本列島は石だらけになっていただろう。雨のたびに、土砂と洪水が下流をおそい、人々は平野にすむことができなかったらう。

こうして森林に守られながら、平野では、水田が開かれていった。日本の平野は沖積平野で、川が山から運んできた土が、積もり積もってきたものだ。平野の土は、だからこそ肥えていた。ゆたかな水と、ゆたかな土に恵まれて、日本人は米を育ててきた。その暮しは、森林の恵みの上に成立っていた。



噴火で破壊された山を復旧する



小さなダムを作って、崩れたす土砂を止める

米は船にのせられ、川の水で町へとは
こばれていった。米を町に運んだ船は、
町の人たちの屎尿しにようをかえりに積んで、村
へ帰っていった。屎尿しにようは土に返されて、
再び土を養った。木材を燃した灰も、お
がくずも、土に返された。

森林の恵みの循環は、尽きなかった。
(写真提供・林野庁)

TAコースを
推薦する方々

一橋大学教授 南博
東京大学助教授 石川中
九州大学教授 池見西次郎
早稲田大学教授 田中由多加
日本女子大学教授 杉溪一言

3か月の短期間で学べる新・通信指導セミナー

TAコース 交流分析

学校法人
川口学園
早稲田教育出版

〒171 東京都豊島区高田3-10-12
(電話) 03(209)6201

問題分析と解決のための新しい手法

「心を開いて素直に話しあえば、きっとわかりあえる」とはよく聞く言葉ですが、それは本当でしょうか。教育の場面でもコミュニケーションの場でも、これとは逆の無残な結果がたくさん報じられています。交流分析(略してTA)コースでは、(1)人間心理の分析手法(性格診断テスト・エゴグラム法)に基づいて(2)人間の言動の背景に潜む多様な深層

心理を理解し(3)その人間像を明らかにします(4)そして、どのように対応し、アドバイスすれば①子供に対して効果的なコミュニケーションがはかれるか②地域やPTAなどの会合で効果的な発言ができるか、を学んでいくものです。教育への相談件数が激増している今日、専門職カウンセラクトレスとしても将来大いに力を発揮できます。

★詳しい説明資料とTAニュース無料進呈、電話かハガキで上記まで

教育史料出版会 東京都千代田区三崎町1-2-2 電話291-3571 振替/東京2-79022

ハイスクール レポート'85

君たちがえらぶ
新・私立高校ガイド

いわいふ編集部編
■定価1600円 千300

▽▽▽
内容詳細
校容・校
大に増
加、資
料、掲
載。A
5判七
八四
頁。

生のお
活内お
指容も
導/進
行路次
事指選
導/導
ク/教
ラ制員
ブ服等
活のの
動有人
/無数
募とと
集指構
要定成
項範/選
等困教
々/科。値

自然な関係

吉田 真由美
山本コウタロー

同世代に贈る、ハイク
オリテイメッセージノ
6月発売 定価1300円

投稿ホットライン——能ある鷹は爪をかくす

職場は多面体

愛すべき職場——死角の部分に何があるか？

借金を申しこまれて

埼玉県行田市 Y・O

上司のAさんから家に電話があった時、何かの問合せだろうと思った。私は週四日勤務で、休みの日だった。彼が言いにくそうに切り出した用件は意外にも借金の申込みであった。お金がありそうにみられたことも心外だったが、あまりの不意打ちで、私はつい「いくらぐらいでしょうか」と言ってしまった。「四十万円です。どうしても明日の午前中に振込ま

なければいけなくて——一カ月後に必ずお返ししますから」と切羽詰まった声。

日頃、決して仕事の無理をいわず働きやすいことや、電車の時間に合わせて早目に帰してくれているAさんである。私は、一カ月間だけなら、なんとか用意してみますと答えざるを得なかった。

やがてじわじわと腹が立ってきた。なんで私に借金など申込むのよ。そん



なこたあ恋人に言いなさいよ、いないこと知ってるけど。四十万もの大金を年上のパートのおばさんに貸せなんて、みっともないと思わないの。奥さんに手をつけて出してもらおうほうがマシだと思うけど。断われれば居辛くなるパートの立場を分かっていて借金するなんてずるいわよ。――電話をかけ直して、断わろうか。

しかし、私はできなかった。今のパートは自分の夢を実現するための資金源である。何の取柄もない中年主婦においそれと別の楽な働き口があるとは思えない。夜、夫に「断われなかったの、ごめん」と話し、貸すには貸すが絶対返してもらいうからと約束した。当然、夫は仏頂面。

一カ月間、私もAさんも一切、借金の件には触れなかった。

返済期日、ちょうど私は東京へ出る用があつて前から休みをとつてあつた。しかし、約束の日であるから、前日の帰り際「明日、きますが何時がいいでしょう」とAさんにこつそり聞いた。彼は一瞬、



あんた、きびしいねという表情をしたが、すぐ「では、これこれの時間に」と自分の時間を切った。

翌日、指定の時間に会社に行った。するとAさんは、いない。バイトのB君が「三十分ほど前にちょっと出てくると言つて出られました」というではないか。

おのれ、逃げられたか。しかし、やっぱりという気もした。待っていたがAさんは帰ってこない。約束の時間ワクにはあと五分あつたが私は電車の時間が迫っていた。

「Aさんに伝えて下さい。約束の時間にきましたのに、と言っていたと」B君は、

はい、と言った。多分、私の表情はムカッとした心情を隠しきれていなかったに違いない。

東京までの電車の中、私はどうするか思いを巡らせた。四十万は大金である。あと一カ月なら待ってみてもいい。それでダメなら、私はいくら惜しい収入源でもパートをやめよう。そんな上司などこちらで見限ってやる。お金は分割でいいから集金に行く。それでもダメなら——今や私はサラ金側の気持もわかる気さえたのであった。

夕方、帰ると夫が「さっきB君という男の子がAさんに頼まれたと言って金持ってきたぞ」と言うではないか。「金額？」「うん」

あっけなく決着をみたのであった。貸す際、私は借用証を夫あてに書いてもらっていた。そして、利子をつけるというAさんに「お世話になってるから用立てたのです。いりません」と断わった。夫に内緒の金ではないということを知ら

せたつもりであり、利子を払えば長く借りていられる、という危険を防いだつもりであった。結果的にはこれが効いたように思う。

簡単に貸してはもらったが、見かけに
よらず取立てがきびしそうで、Aさんは

十年前からの私

十年前の今日は四十歳になろうとする年の春だった。末の娘は小学校二年を修了して、子供は二人とも丈夫で手がからなかったし、夫は仕事にはり切って夕食は大体外ですませていたので、ジワジワと私の身体を包む空気が、あせりと空しさの密度を増して、締めつけて来るのを感じていた。暇を埋めるために、子供達を習いに行かせていた絵の塾に、私もわりこんでキャンバスをみつめることも多かったが、そのキャンバスの向こう側を、時間が逃げるように流れ去って行

私がこわくなったのかもしれぬ。

そうですよ、Aさん、パートにお金借りるのなんかやめましょうね。

その後、Aさんは相変わずやさしい上司であり、二人共、何事もなかったの如く机に向かっている。

神奈川県横浜市 北川 洋子

く姿がはっきり見えるのには参った。仕事をしたい、仕事をしたいと思った。

毎日、新聞の求人欄をみて、目ぼしい所には履歴書を送った。娘が朝の新聞にはさまれてくるキャバレーの求人広告チラシを、素知らぬふりで抜き取って、屑籠に捨ててから学校に出かけたりするのに苦笑した。娘も息子も、私から離れて生活するのをまださびしがる年齢だった。そしてそれ以上に、子供を空家におくことの悲しさに耐えられない母親だった。

末の子が中学に入る時迄を準備期間と

しよう。その間に何か資格をとろう。そして時々チャイイ仕事をしようときめた。最初に狙ったのは不動産鑑定士。通信教育に入会金の何万円かをふりこんだ。送られた内容をみて自分には向かないと判断して、初めの約束通りすぐことわりを出したが、毎月毎月ことわってもことわっても教材が送られてきて、押入れは不動産鑑定士の教科書で埋まった。

次に公認会計士を狙った。今度は独学にすることにして毎日コツコツ勉強した。お嬢さん芸の英文科卒の私には、齒のたない難しさで、進んだと思えば後戻りで一冊読むのも苦しかった。伯父が経済学博士なのでどんなものと相談した。

「こりゃ大変だ。経済の秀才学生でも中々パスするのは難しいのだよ。まあ頑張るなさい」途端に放り出した。

その間もNHKの世論調査係として年に二、三回仕事と名のつくものを味わった。収入もさることながら働くことの楽しさを知った。アンケートなどには居留

守を使ったり、戸も開けてくれない家もあった。ねばって通っている内にわかってもらえて、しまいにジュース迄出してくれた時には、私は一人でも生きていくんだなと自信をもった。夕方暗く自転車で家へと急ぐ横を並んで走る新聞青年に「私も働く仲間なのよ」と語りかけたくてそのまま涙ぐんだりした。

年齢制限を越えていても若い人以上に働けますと書き添えても、送った履歴書のほとんどは没になったが、インチキ臭い所からだけは案内をもらった。不動産鑑定士でこりていたので収入を得る先のために金は出さないのでと心となえていくつかは切り抜けた。

それでも一件、無差別電話でひっかけて英会話教育カセットを売る仕事を、おかしいなと思いつながらやったこともあった。売れたら歩合制で、収入を得る迄は交通費自分もちということだったが、その支出が馬鹿にならないので焦った。しかしそこでも働くことがいかにすばらし

いかを味わっていた。よくよく職のない人達の集まるその事務所で、やっと働んだカモをより困っている仲間にゆずってやる人。商談がまとまるように自分の仕事を放り出して助けてやる人。美しかった。私も言葉巧みに学生を呼びこむ迄はあったが、終局で金を出せとどうしても言えないこたわりがあったやめた。

その頃友人のコネの小さな事務所、半年後に経理を求めるという話を小耳にはさんですつとんで行き、簿記の免許を必ずとってくるから雇ってほしいと頼みこんだ。なんとなくオーケーらしかったので、それから明けても暮れても簿記の自習書ととくんで、期限ギリギリで免許試験をすりぬけて、晴れて正社員の座を獲得。その時、計画通り娘が中学に入った。嬉しい四十三歳の春だった。

仕事を覚えたり、家事をやりくりしたり、一年は夢中だったが、すぐに慣れて、慣れに従ってその単調さに退屈して来た。三年前と同じような焦りがまた襲って来



た。「生き甲斐などというコッパズカシイ理由からでない、金のために働いているのだ、自分の生活を自分の責任で負うのだ」と心について聞かせた。しかし「たとえ一円も稼げなくても、自分のための豊かな文化的な時間を金で売ることとはできない」と言い張る友人に「そうしてあなたは夫の時間を食っているのね」と毒づいてみても、その後で目まぐるしい自分の毎日の時間を省みて、足元がふらつくのを感じた。

少ない余暇を大切にとの思いで、油絵には結構のめりこんでいたが、「わいふ」の仲間に「何か一緒に仕事をしませんか」と声をかけたのもこの頃だ（それっきりでスママセン）。資本がないから何かアイディアで仕事をしようと思えば一人では色々なことを考えては調査に走り回った。身近にこんなサービスがあったらいいなという女の思いを商売に変えてみたかった。今度はNHKのためになく自分のために、団地中をちらしを配って歩

いたり、アンケートをとったり、心は餓えていたが、今ふり返るとあんなに楽しかった日々はなかったと思う。

今一歩でふみ出せなかったのは、どうしても夫のふところをあてにして危険負担を負う勇氣、家庭を放り出す勇氣が私になかったからだ。持っているものを一つも失わずに、自分も含めて愛する人達の誰をも傷つけずに何かを得るなんて、できっこないのに。

昨年、転居を機に職場を変えた。今まで新しい場所ではりきっている。ふんわりとびやかな娘時代にはなく、焦り苦しんだこの過去十年の中に私の青春がある。「次の十年はもっと悩み多い、はり合いのある十年である」その予感で今私は、はちきれそうな青春の不安を胸に、毎日往復四時間かけて通勤にはげんでいる。希望にみちた五十女の誕生日がこの夏にはやってくるのだ。それを私は両手でがっちり受けとめるつもりである。

私は常務取締役

東京都品川区 三上 初美

会社で求人広告を出して二日目の昼近く、やっと応募の電話あり。これから面接に來たい、と言う。おいで下さい、と答えて、すぐに夫のポケットベルを呼び出す。応募者があれば、面接のため夫は現場より戻ることになっている。三分おいてまた呼び出す。十分たっても連絡がない。三度、四度と呼び出したが、応答なし。時間が過ぎていく。

「あの、さきほど電話した者ですが……」と、人影が現われた。十三坪あまりの事務所に、机は九つも並びながら、私ひとり少々面食らったような応募者に、「はい、こちらへどうぞ。おかけ下さい」日頃はあってもないような、時にはわずらわしい「常務取締役」の肩書が、にわかにかんやんと生きる。

定石にしたがって、経歴書に目を通し

てから、質問に移る。まず、応募の動機をたずね、職歴について聞く。応募者の目をじっと見ながら、笑みを絶やさず、答によっては、頷いたり感心したり。合間に、こちらの仕事の内容、待遇などにも触れて、説明する。メモを取り、就業規則を広げ、頭の中では、今いる人達との月収面での比較検討。せわしない。ふと気づいて、逆に「お聞きになりたいことは」と言ってみた。

どうも一方的過ぎたのではないかと、応募者が帰ったあとで、反省した。夫の意向ははっきりしているので、私で面接できたのだが、経験者の応募なら無理だろう。業種柄、経験の程度を見抜けないし、細かい業務内容については、答えられないに違いない。現場に出ない私の弱味でもある。

夫が自立して六年目。夫に引っ張られるように、あるいは夫を励まし、時には大ゲンカをし、ともに支え合って、ここまできた。この先も、似たような道かもしれない。しかし、お互いに成長したものだと思う。夫が、曲りなりにも「社長」と呼ばれて、どぎまぎしなくなったと同じで、私も場合によってはいっぱしの「役員」の顔にさっと化けられる。



(え・松本をきえ)

うちの悪ガキ

うちの子に限って！の大集合。汝の敵を愛すべからず……

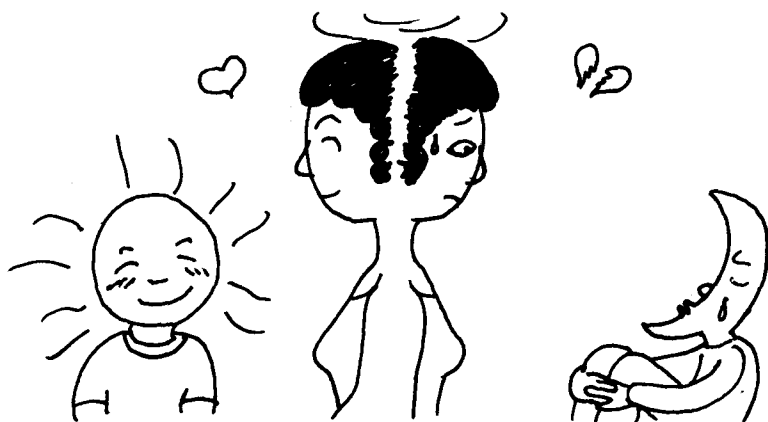
母親の不公平

神奈川県小田原市 鈴木たづ子（43歳）

「お母さんはボクより弟の方が可愛いんだ」何十回となく、くり返し言った長男の言葉です。「そんなことはないわ、二人共同じ私の子供よ、差別などしたことは一度もない」けれど私がどんなに説明しても彼の心はひらいてはくれないのです。長男は、私が心の余裕もなくただ夢中で育てたため、神経過敏で融通のまったくきかない内気な子です。

下は生まれた時から人並以上に体も心

も大きく、ほっぼって育てても医者知らずの健康優良児。性格も大らかで気持がやさしく、ぜんぜん勉強しなくても、クラスでトップに入るくらいの私の自慢の宝物なのです。小柄な私に似て、長男は高校二年なのに背はまったく伸びず（一六三cm）、下は中二にして、すでに一七六cmと、まるで体格、性格がちがうのです。でも、それだからといって私は決して差別をして育てたつもりはないのですが、



何となく私の心が次男のほうにかたむいてきたのも事実なのです。親しい人にもはつきりわかるらしく、忠告を受けたこともあったし、主人にも「なぜ公平に扱わないんだ」と怒られたこともありました。

小さい時はかたくなに、「差別はしてない、公平に育てている」と言った私も、高校生になった息子にはつきりと、「もうお母さんなんか、べんとうをつくり、金をくれれば良い」と三下り半をつきつけられ無視されたとき、淋しさより

ハンバーグ弁当

長男が「僕の今度のお弁当、ハンバーグ弁当にして」と言う。ほかほか亭などで売っているのがいいのだそうだ。小学校二年生の彼は、母親が働いているので学童保育に行っており、春、夏、冬の長休みの他、土曜日は弁当持参となる。た

は何かほっとした気持ちになったのです。

本当は彼の言うように、私は次男ばかり可愛がり愛していたのかもしれない。

そして彼にはわかっていたのです。人間には相性があるとすれば、私はやっぱり次男のほうが相性がよいのかもしれない。彼といるときには、何ともいえないやすらぎがあるのですから。

三歳ちがいの兄弟でも、こんなにちがうのはめずらしいと思います。もしかして、私の育て方のちがいでそうなったのかと反省しています。

東京都大田区 松尾真理子

とえおにぎりだけの弁当でも、自分で作ったものを持たせたいと心していた母親に、この申し出は思いがけないことだった。学童の先生から「弁当を持たずにお金を持ってくる子もいる。せめてパンを買って持たせてほしい」と聞かされた

りすると、自分は「手作り」を持たせていると、いささか自負していた感があつたので、ちょっとショックではあった。

どうも、「手作り弁当」を認めていたのは自分だけだったらしい。彼は苦手なおかずが入っていたりする弁当よりも、大好きなハンバーグの弁当が食べたいらしい。朝の忙しい時に、買ったほうがどんなに簡単かと思いつながら、前夜の残り物を詰めているお弁当に、手作りの味、母親の愛情がこもっているのかしら、自己満足のために作っているのじゃないだろうか。

だって、我が家の子供たちは、牛丼を食べたいと言うから作ってやれば、それは、あの吉野家の牛丼でなければならず、時に食べるカップラーメンをこんなにおいしいものはないという声で「おいしいね、おいしいね」を連発するのだから。「お母さんが作ったのよ」と強調しても、何にも感じてくれないのだ。手作りがいいというのは母親の勝手な思いなのかと

ひがみたくもなってくる。(ただし、私の弱みは料理の腕がいまいちというところにあるのだが)

それでも、自分の昼ご飯は平気で弁当を買ってくる母親が、子供の「ハンバーグ弁当」に踏み切れないのには、もう三、四年も前のことだけれど、ひとつのできごとが原因なのだ。勤めている身だから、夕食の仕度は早く、簡単にと焦っている。できあいの品だって食卓に並ぶし、冷凍食品にもおおいにお世話になっていた。

ある日、長男が四つぐらいだったと思うけれど、彼と妹を迎えに行った保育園の帰り、肉屋の店頭で、もう焼いてあるギョーザを買った。できたのを買ったことは何度もあるけれど、彼の目の前で焼いたのを買ったのは初めてだったと思う。その時、言ったのだ。「ママ良かったね、もう焼かなくても食べられるね」彼は単にお腹がすいていて、早く食べたかっただけかもしれないのだけれど、母親には今も忘れられない一言である。それ以来、



できあいのおかずを買う度に、かすかに良心の呵責を感じる（その割に買うけれど）ぐらゐの発言だった。

それなのに当の本人は、もちろんそんなことは夢にも覚えておらず、母親の作った弁当を残してきて言った。「次はハンバーグ弁当」

うちの良い子

栃木県宇都宮市 T・M

我が家の小学六年になる長男を、テレビのCMみたいに健康でありさえすればと、塾、勉強とさほど煩わしく言わずにのびのびと育てた結果、五年の二学期の終りに先生から呼び出しの電話がきてしまいました。学校へ行ってみれば、この女の先生いわく、「このままの成績だと落ちこぼれ予備群間違いなし」と、見せられた通知票は算数1、体育5のまんがみたいな成績でした。（息子の学校はクラス四十三名のマンモス校です）

隣の芝生はなんとやらで、人の持ってきたものや、目新しいものを食べたがる気持もわかるけれど、母親は抵抗を試みており、申し出以来、数カ月を経た今も彼の「ハンバーグ弁当」は実現していない。

性格はやさしくて思いやりがあり、友達も沢山いて、今はやりのギアつき自転車も持たず、どこへ行くにも走ったり歩いたりスポーツ大好き少年、これだけで十分と思っていたのですが（四年まで1はありませんでした）、落ちこぼれなる言葉を聞いてのんきな私でも、このままではと考えてしまいました。（今の世の中甘くないですね）

それからというものは、親も大変身して、やればのびる子という先生の言葉に

励まされ、冬休みの午前中は、外出禁止令を出し、後れた分の取りもどしの毎日。息子もこの成績では恥ずかしいと思ったのか、けっこう親の言うことをすなおに聞いて、少しはやる気を出し、三学期の成績は算数1から2、国語2から3、理科3から4と三つも上がりました。でもまだまだ安心はできません。主人は3（普通という意味）さえ取っていればと言うものの、内心は今の性格に頭がついていけば、なんて思っているようです。

当の本人は三つも上がったことに気を良くしてか、六年生になってからはいいやにはりきって、今までしたことのない学習までしているのです。（もちろん遊びも忘れません）これがいつまで続くのやらわかりませんが、見守って行くしかありません。

頑張れ、我が家の一人息子！
ちなみに二つ下の妹は4と5だけです。

（え・松本をきえ）

投稿ホットライン——珍獣一匹飼ってます

オットどっい

粗大ゴミ予備車の生態記録をとろう！

僕も作る人

愛知県刈谷市 原 真智子



夫、五十二歳。鉄道模型とおいしい食物とおいしいお酒が好き。時々（発作的にと表現するしかない）料理狂になる。冷凍室をのぞいて豚肉とオレンジのキャセロールを作る。洋菓子も得意で、プリンなどは簡単すぎるとのたまう。私が帰宅してみると家中にパイの焼ける匂いが漂っている。買い置きのにんごが焼きりんごに変身している。

嬉々として立ち働く夫の姿を見ながらあれこれ考えるのだが、三度三度（昼食もだ）必ず誰かが、自分の調える食事を待ち構えているという立場と、好き勝手な時に気の向いた品を作るというのでは、根本のところがちがっているというのが結論である。だから全然気にしないでやってもらっている。でもそんなに好きなことなら、週に一度でも、目をきめて食事の仕度をしてほしいと思うことはある。ただそうになったら、彼には「楽しみ」というわけにはいかないだろう。

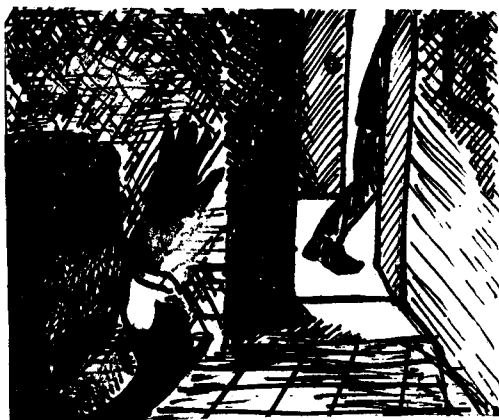
付記 念のためにつけ加えるが、彼の作品の水準は概して良好である。また後片付けについては自分で済ますこともある。

亭主は丈夫で 留守がよい

福島県いわき市 大川原みち子

私の家は二十四時間夫と一緒に生活で、何とも息のつまる毎が続く。おまけにこの頃とみに女性的になってきた夫は、お菜を煮ている鍋の中をのぞいて、やれお汁が少ないの、火が強いのとガミガミいう。こっちにしてみれば、明日の支払日に五万足りないのが金策の心配でもしてくれただらと思っっているのに。

言訳がましいけれど、支払の心配さえなければ落着いて心平静でお料理できるのに、年



中金繰りに頭を悩ましていれば心ここにあらずで、焦がしたり、味つけがおかしかったりで、手につかない。夫は、

「いくら気もめてもお前が集金するわけだし、そんなに気もめるなら自分で集金して見ろ」

とせせら笑う。しかしこの頃は共働きが増えて、相手の帰りは六時をまわってしまふ。田舎は七時半を過ぎれば集金に行くと怒られるから一時間半の勝負だが、七時半に帰宅して

ご飯の支度では、団欒も何も犠牲になってしまふ。

朝は四時起床だから、晩ご飯がおそくなつては睡眠時間が六時間などと短縮され、昼間は数字を見間違ったり、満足な思考ができない。毎月二十五日の集金始めから十日の集金上り迄半月の間、フライパンの上で煎られる豆のような思いでいて、神経性の頻尿になってしまい、一時間おきにトイレに行くようになった。

サラリーマンの妻なら、顔を合わせる時間が少ないから欠点のカバーができるが、商家の妻は離れている時間の方が少ない。お互いにアラが見えて、経営上の意見の対立がある。一般社員なら辞職するところなのだろうが、私の立場はそうはいかない。退職金がもらえるならすぐにでもそうしたいところだが、それもないので、友人もない田舎でただただ子どもの成長を待ち望んで、生ける屍となって流されて行っている。ストレス解消は、この文章が活字になった時。

(え・岩本節子)

特集

私の育児ノイローゼ



「子供」が「子供」を産んで

一・一

愛知県知多郡



春休みも終わり、待ち望んでいた桜のつぼみがようやくほころび始めた頃、長男は私と元氣よく保育園に出かけます。彼の足どりは軽い。小麦色に焼けた足でたんぽぽの咲く道を軽快に歩いて行きます。三年程前には全く予想も出来なかった現在の光景です。

私の結婚生活のスタートは恵まれたほうだったと思います。一人娘である私は五歳年上の夫と見合で結ばれ、私の両親の住む母家と数メートル離れたところに別棟を建ててもらい、同じ敷地内に住むことになりました。父は自営業で自宅の近くで仕事をし、母は専業主婦で暇なき畑を耕しているのんびりした生活です。私ははっきり言って子どもはあまり好きではありませんでした。周囲に小さい子がいなかったのだからなかったといったほうがよいでしょうか。子どもは、うるさいもの、煩わしいもの、ちょっと可愛いだけでうっとうしくてたまらない

ものという意識はありませんでした。それなのに避妊の知識は乏しく、なんとなく自分だけは妊娠しないのではないかという楽観的な姿勢だったため、挙式後一度生理をみただけで身ごもりました。全くあんなことで一個の生命体が完成されるのが、自分でも信じられなかったほどです。

妊娠期間中は何もかも順調でした。つわりがややひどく、二、三カ月の頃点滴を受けたことはありましたが、通院だけでおさまりました。その通院も父や母の車での送り迎え。会社が休みのときは夫が付き添ってくれました。

五十四年一月、三、一五〇グラムの男児が誕生しました。私が二十四歳のときです。夫の両親、兄弟、私の友人が次々にお祝に来てくれ、病室は花や贈り物で埋まりました。いうまでもなく両親も大喜びで私は幸せの絶頂でした。

夫は最初女の子を望んでいたのですが、赤ちゃんの顔が男の子にしては優しそ

な容貌だったせいか、照れくさそうな表情で「苦労様」と言葉をかけてくれました。

一週間で退院し、子どもの世話に明け暮れる生活が始まりました。といっても私の場合は自分の母親つきですから、さほど苦労はありません。母は初孫の誕生を私以上に喜び、可愛がり、面倒をみてくれたのです。朝七時三十分には夫が会社に出勤すると、待ちかねたように早速母が母家からやって来ます。

「おはよう、まだネンネしてる？」

子どもが眠っていれば、私たちの朝食のあとかたづけから洗濯、掃除、そして子どもが目をさませば、顔をふいたり抱っこをしてあやしたりと、それはかいがいしい世話ぶりでした。

私が抱くときは授乳のときだけで、あとはほとんど母が触っていました。

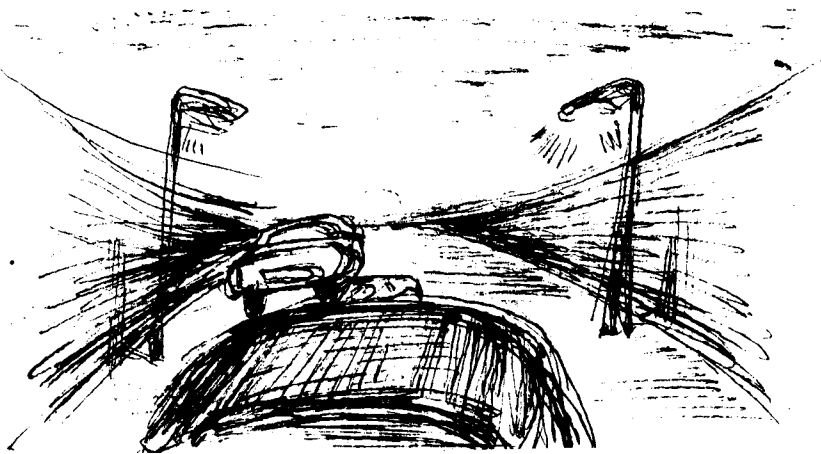
時折あまりの溺愛ぶりに閉口し、「抱き癖がつくと困るから」とか「あまりあやすと興奮して夜眠らないわヨ」という

忠告はしましたが、それもないことではなく、一日中笑いは絶えませんでした。子どもがベッドで眠っていると退屈になってきて、頬をつつついてわざと起こしたこともあったくらいです。

五、六カ月になると寝返りをうったり、大声で笑ったり、不機嫌な表情を浮かべたり、とますます変化は著しくなり、日毎に愛らしくなってきました。母と一緒にやってあやしていると、子どものいることの幸せを感じ、独身時代の「子ども嫌い」というレッテルをはがしてもいいなアと思ったりもしました。

夫が会社から帰宅する時刻になると、母はサッと母家へ引きあげて、決して私たち夫婦の生活には入ってこようとしませんでした。そして、昼間私が出かける時は大喜びです。

美容院に行ったり、学生時代の友人と会って買い物をしたり、まるで子どもの存在など無いかのごとく私はふるまっていました。産後の体操のおかげかどうか、



四カ月後には体型もほぼ以前と同じに戻っていたのは、嬉しいことでした。

姑と同居したり、また核家族のため昼間子どもと二人だけの生活をしなければならぬ友人、あるいは、朝と夕方は戦争のような状態で、会社と保育所を走っているという共働きの友人たちからは、羨望の的となっていました。

子どもが二歳の誕生日を迎えて一週間ほどたったある日、私と夫はデパートに買い物に行きました。一週間後にスキーに行く計画をたてていたので、新しく板やウェアを購入することにし、子どもと三人で出かけたのです。

夫は黒、私はさんざん迷った揚句紺とピンクのウェア、オーリンの板を買ひ帰路、ハンバーガーショップで軽く腹ごしらえをしました。その時、ふと母は家でどうしてるのかしらと思ひ、店から電話をする気になりました。

呼出音が二、三回鳴った後、聞き慣れない声が聞こえるのです。それは伯母の

声でした。

「Tちゃん、どこ行ってたの。お母さんが倒れてさっき救急車で運ばれたの。お父さんも一緒に行ったから、私が留守番してあんたの帰りを待っていたのよ」

頭の中がクラクラしました。すぐそのまま母が運ばれた病院に車をとばしましたが、足が震えて膝頭が合いませんでした。母の無事を祈り、また今日に限って子どもを母に預けてこなくて、不幸中の幸いだと胸をなでおろしたり、と助手席に座りながらも落ち着きませんでした。

母は脳内出血でした。ちょっと肥満気味で糖尿病を患ったことはありましたが、あっさりした食べ物を好み、適度な運動もしていたのに……とわかには信じられませんでした。

手術後、集中治療室に寝かされた母は、規則で一日五分間の面会しか許されません。しかもその部屋は乳幼児入室禁止のため、四十日間のあいだ私はいつも歯がゆい思いがしていました。もっとも母は

左半身不随で、おまけに失語症も併発し、意識も混濁した状態だったため、たとえ面会時間が区切られていなくても、同じことだったのかも知れませんが。

私の育児ノイローゼが始まったのはこの頃からです。頼りにしきっていた存在の母が家にいない状態のため、心の支えを失ってしまったのです。しかも母の病気は治る見込みはなく、医師の話によると、このままの状態で死ぬか、あるいは左半身マヒのまま寝たきりに近い身体で一生をおくるか、どちらかなのです。母はその時まで四十九歳でした。

私の肩に子どもの世話、父の身の回りのこと、一切のしかかってきました。もともと私は一人っ子のわがまま娘、家事も手際が悪く不十分で、母のおかげでなんとかこなしてきたのです。チョコチョコ動く子どもからは目が離せません。病院からいつ電話がかかってくるかも知れないと思うと、子どもを連れての散歩も躊躇してしまいます。いきおい子ども

も室内で遊ぶことが多くなり、玩具は散らかし放題、居間は足の踏み場もないほどです。

父と私たちの二重生活は、家事が大変なので、父を私たちの家と呼んだのですが、頑固なところがある父は、首を縦に振りません。私は二つの家を行ったり来たり、朝は父に味噌汁をつくり、夫と私たちのためにパンを焼き、昼は父に魚を焼き、そしてまた夕方には父のお風呂と二つ沸かさねばなりません。当然あとかたづけも二回分あります。頭の中は、母の病状が気になりボーッとしている状態です。

そんな私の変化に子どもが気づかないはずがありません。あんなに可愛がってくれた母が急に目の前から消え、イライラした私がちょっとしたことでも怒り、かと思うと急に部屋の中にジッとしています。それに影響されたのか、子どもも精気がなくなりました。

折角始めたトイレット・トレーニング

も振り出しに戻ってしまい、カーペットや畳をおしっこで濡らす毎日が続きました。その度に私は子どもを大声で怒鳴り、頭をこづき回しました。オムツをはずすのはあつい夏のほうが良い、と頭ではわかっていても、近所の同年齢の子がおしっこを教えるとなると、矢も楯もたまらず、うちの子も早くなんとか、と焦っていました。

子どもは私の顔を見るとおびえ、パンツを汚したときは、涙を流しながら庭の松の木の根元に立っているのが習慣になりました。昼間は、イライラして子どもにあたりちらしていました。夕方になると、淋しくて急に悲しくなり、母のことを想っては子どもを抱いて、うす暗くなった部屋の中で、立ち尽くしていたりしました。

そうこうするうちに子どもは二歳半になり、日ざしがまぶしい季節がやってきました。結局寒い期間中オムツははずせず、大きなお尻をモコモコさせながら子

どもは歩いていました。私はオムツを干すのが近所に恥ずかしく、誰の目にもふれない裏庭にソツと干していました。

何の気なしに読んでいた育児雑誌から「赤ちゃん一〇番」の存在を知ったのはその頃です。救いの女神が現れたような気持ちでダイヤルを回したのはいうまでもありません。

「二歳半になるのにオムツがとれないんです」

「そんなに遅くはありませんよ」

受話器の向こうの女性カウンセラーは優しく応対してくれました。

「でも本を読むと、一歳前からオマルで習慣つけて成功した例もあるし、近所の同じくらいの子も皆とれているようだし、オムツが早くはずれる子は知能も高いとか……」

私は聞きかじったことを言いきりました。

「お母さん、何だかちよつと焦って見えますね」とカウンセラー。

そうです。私は本当に苛立っていたのです。というのは母が完全看護の集中治療室から普通病棟に移り、付き添いがついてもよいことになったので、父が数日前から仕事をやめて病院に行っていたのです。けれど父は男、何かと気がつかないこともあるだろうし、気苦労から父が倒れやしないかと気が気ではありません。付き添い婦を頼むのはためらいがあり、私は夫と子どもを夫の実家に預けて、自分自身で母の看護につきたいと思っています。

たのです。それには子どものオムツを早くとり、夫の母や兄嫁に迷惑をかけたくないと思いましたが、また「この子はオムツがとれるのが遅い」と思われるのもしゃくにさわるので、一日も早く自分からおしつこと言わせたいと躍起になっていました。

カウンセラーは私の口調から何かを感じ取られたのでしょうか。

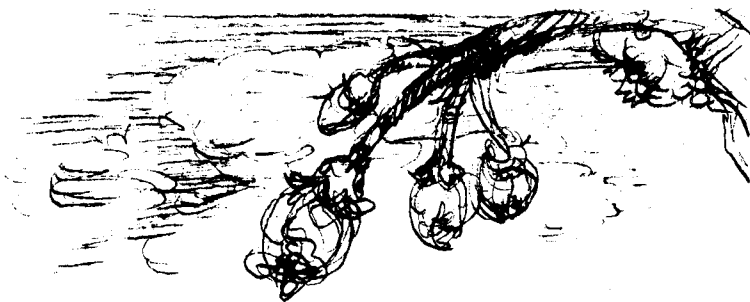
「子どもさん以外のことでは何か不安なことがあるんじゃないかしら」



その柔かい包み込むような口調に、私の心の中の黒い大きな固まりは一気に溶けてゆくようでした。私は誰かにこんな言葉をかけられるのを待っていたのです。仕事で疲れて帰ってくる夫に愚痴をこぼすことも出来ず、姉も妹もない私は、誰かに今の心の内を話したくて、もうウズウズしていたのです。学生時代の友人は、皆私の境遇をうらやましがっていたので、話すことは出来ませんでした。今から思えば愚かだったのですが、その時は、他人に弱味を見せまいと精いっぱい強がっていたのです。

見もしらないカウンセラーの人に、総てを吐露しました。母によりかかって育児をしてきたこと、その母が急に病に倒れ、父が日夜看病していること、子どもをよそに預けて私が母のそばにいたいということ、そのために早くオムツをとりたい云々……。

話しているうちに涙がとめどなくあふれ出て、言葉がとぎれとぎれになりました。



だが、根気よく聞いて下さった彼女は、「そんなご事情でしたか。オムツは遅かれ早かれいつかはとれるものです。お母様の看病に行っておあげなさい。ご主人のお母様には『まだおしっこが言えませんがよろしくお願いします』といってドッサリオムツを渡してたのんだらいかがですか」

と言われました。それから部屋の床にビニールを敷いて、もらしてもいいようにすること、たとえもらしても絶対怒らないこと、またもらす回数を減らしたいがために、水分を十分与えないなんてもつての他、おしっこが出るのは丈夫な証拠、おしっこが出なくなったら大変なんですよ、とも言ひ添えて下さいました。

はっきり言って、相談員のかたがおしえてくださった方法は、育児書にも載っていました。

が、私は今までうつ積していたものを残らず人に話すことが出来、胸のつかえが全部とれたような気がしたのです。

「失敗しても怒らないようにしよう」と心に決めて、子どもと接することにした。オムツはずしの練習用のトレーニングパンツを通してズボンも濡れ、床に敷いたビニールに水たまりが出来ても、私は顔をひきつらせながら、言葉だけはやさしく慰めました。オマルに腰を掛けるのを極端に嫌がったので、無理強いはいないようにしました。

しばらくした頃、もらした後で告げるようになりました。汚した衣服の手間は一緒ですが、かなりの進歩です。

私は「もよおした時点でおしえてよ、お願いだから」という言葉をグッと飲み込み、微笑を浮かべ

「お利口だったねえ、またおしえてね」と、大声でほめました。

子どもは以前と違って活発になりました。鉄棒を買ってやれば、とび上がって前転をし、縄とびも数回跳べるようになりました。また本にも興味を示し、私が見ると、くい入るように絵や字

を眺めています。おびえの表情は消え、屈託のない笑顔がこぼれます。

ある日「お母さん、おしっこ」という言葉に急いでトイレに連れてゆくとパンツが濡れていません。一瞬かつがれたかと思ったのですが、なんと「今から出るの」と言うではありませんか。そうして実際に出たのです。

嬉しくて嬉しくて子どもの頭を何度までなでて頬ずりをし、「偉かったね、偉かったね」とくり返しました。

その日からまるで嘘のように失敗をしませんでした。秋が近づき朝晩はひんやりしてくる頃になると、自分ひとりでトイレに行き、私の手をわずらわせることもなくなりました。夜中でもサッサと一人で起き上がり、電灯のスイッチを入れ、静かに用を済ませてくれるのは、夫と共に顔を見合わせ驚いたものです。

結局、私は母の看病には行きませんでした。その必要がなくなったからです。普通病棟に移って八カ月程経ったある日、

母は亡くなりました。父がちよっと目を離したすきに息をひきとったので、勿論私も死に目には会えませんでした。

あれから二年半がすぎようとしています。子どもは母のことはほとんど記憶になく、ただ写真の中のおばあちゃんという認識しかありません。

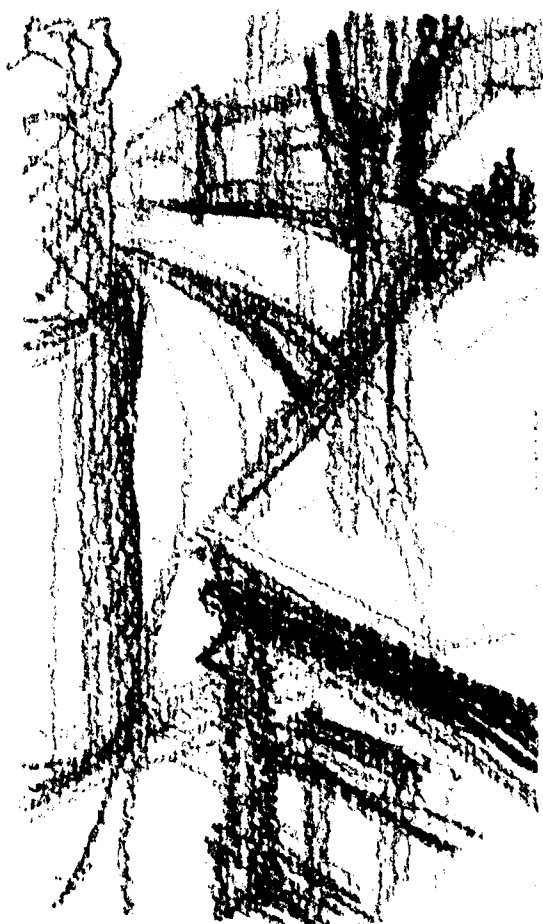
私は毎日毎日子どもと対峙し、不安と淋しさに揺れ動いていたあの頃のことを、今は冷静に振り返る余裕さえ出来ました。そしてあの時のことは無駄ではなかったと思えるのです。

結婚とは名ばかりで、両親に甘え、夫に依存し、独身気分が抜け切れなかったこと、子どもが子どもを産んだような状況だったのにもかかわらず、その自覚さえ乏しく、我が子を愛玩動物のように扱っていたこと、よその子と同じまたそれ以上でなければ安心出来ない、弱い性格の持ち主だったということ、いろんなことがみえてきて、わずかですが成長したのだと思います。

隣人が私を救った

日暮 明子

神奈川県相模原市



毎日読む新聞には母親が我が子を殺すといった記事があとをたたない。育児ノイローゼになって、子供を殺してから自分も自殺をはかるケースや、かっとして子供を殺してしまってから、驚いて他人の仕業に見せかける擬装工作まで様々である。

二、三年前までの私だったら、そういった新聞記事を読むと、我が子を殺した彼女らをひどい母親だと思ったし、殺すくらいなら子供なんか産まなければいいのにとさえ思っただけだ。ところが、一年半ほど前に、自分で子供を産んでから、彼女たちが自分とさほど違っていない母親であることに気がついた。もしかしたら、我が子を自分の手で殺してしまう危険性を、私自身もっていることに気づいたのである。彼女たちだって、そんな悲惨な事件を起こしてしまう前は、そういった新聞記事を読んでも、他人事で自分とは関係ないと思っていたかもしれない。私には今、一歳四カ月になる男の子が

いる。結婚して四年ほど子供ができなかったのだが、三十になる一歩手前になつて、ひょっこり妊娠してこの子を産んだ。妊娠中は大きくなるお腹をみながら、ただひたすら無事に子供が産まれますようにと願いながら過し、産んでから先のことはあまり心配しないでいた。ところが実際は、産んでから後のほうがよっぽど大変だった。

無事に出産を終えて、病院から我が子を抱いて実家に帰る時には、何か宇宙人でも連れて帰るようで、不安で一杯だったのを今でも覚えてゐる。もちろん母もいてくれたが、赤ん坊を産んだのはもう何十年も昔のことだったからよく覚えていないらしかった。

案の定、息子の雄一は実家に着いた途端、待つてましたとばかりに泣き出した。オムツがぬれたのだろうか、オッパイがほしいのだろうかと心配し、オムツをかえても、オッパイをあけても泣きやまない雄一に、私も母もオロオロするばかり

だった。今にして思えば、不安そうな顔をした頼りない母親を見て、雄一は泣き続けていたのかもしれないと思う。

なにしろ、私はその年になるまで、赤ん坊に接した記憶がない。末子だったし、親戚や近所に赤ん坊がいたということもなかった。だから、これが赤ん坊との初めてのご対面なのだ。もっと以前に誰かの赤ん坊の子守りをしたとか、近所にかわいい赤ちゃんがいたという経験があれば、生まれたばかりの自分の子供に對しても少し余裕のある接し方ができたのかもしれない。とにかく、その時は、これれ物のガラスを受け取ったように恐る恐る雄一を抱いていた。

実家では、授乳の時以外はベッドの上でゴロゴロ寝ていればよかった病院での生活と違って、雄一の身の回りのことは一応自分でしなければならぬ。三時間ごとの授乳。一月の寒いころだったので、夜中と明け方の授乳は大変だった。そして、飲むたびにうんちをしたので、毎日、

五回も六回もうんちの始末をしなければならなかった。一日中授乳しているようで、何かひどく疲れてしまった上、お乳がうまく出ないため乳がひどく張って熱をもち、乳腺炎になりそうだった。

そんな状態だったから、一度止まっていた悪露も再び始まった。それでも、授乳やオムツがえは少々疲れていても、すれば済むことだが、何よりも一番困ってしまうのは、雄一がわけもなく泣き続けるということだった。赤ん坊特有のあのギャー、ギャーという泣き声がすると、何かせきたてられていよう居ても立つてもいられなくなる。

雄一は口をきいてくれないから、なんで泣いているのかわからない。私はどこか具合でも悪いのかしらと心配しながらオロオロするばかりであった。夕食をとろうとすると泣き出したり、寝ようとすると泣き出したりで、二時間近くも泣き続け、やっと泣きやんだときには、私はもうぐったりとしてしまった。

それでも実家にいる時はよかった。母がそばにいてくれたから、助けてもらったり相談にものってくれた。でも、いずれば夫の待っている我が家へ帰らなければならぬ。自宅へ戻って、一人で何もかもやらなければならぬのかと思うと、一日でも長く実家にいたかった。

一カ月近くも実家に長居をして、自分の家に戻ったのは二月の初めだった。送ってきてくれた母が帰り、散らかし放題の我が家に、雄一と二人で戻ってきた時には、実に心細いものだった。

こうして、やっと夫と私、そして雄一との三人家族の生活がスタートした。夫は割に子ぼんのうで雄一のめんどろをみてくれるのだが、不規則な仕事のため、帰るのがいつも十二時を回ってしまいうから、休みの日以外は夫の手助けは望めない。

帰ってきた当初は、要領が悪くて仕事が多かなかはかどらなかつた。家事をしていると雄一が泣き出し、仕事を中断と

いうことがしょつ中で、寝ている間を見計らって、買物に出るのもやつとといった調子だった。とくに夕方近くの忙しい頃になると、雄一が泣き出した。夕食のしたくで手がはなせないから、泣いてもほっておくと、いつまでたっても泣きやまない。泣きやまないどころか、ますますひどくなるので、仕方なく台所仕事を中断して、雄一を抱き上げる羽目になる。しばらく抱いてもういいかなと思つて、ベッドにおろした途端にまた泣き始めるといふくり返して、こっちのほう泣きたいくらいだった。

そんな具合だったから、夕食のしたくが全然はかどらず、やつと準備ができて、夕食を食べ始めると、八時を回っており、食欲もなくぐったりということが多かった。どういうわけか雄一は昼間の暇な時は泣かず、夕方や夜になると泣くことが多かった。一旦泣き出すと、放っておくといつまでたっても泣きやまず、だんだんヒステリックになり、ギャーギャーと

サイレンみたいに全身で泣き続ける。

赤ん坊は泣くものだと頭ではわかっていても、あの脳天をつんざくような、ギャーギャーという声を聞くと、居ても立ってもいらなくなる。今まで夫婦二人だけのいたって静かな生活を送っていただけに、雄一の泣き声は一種の脅迫みたいなものだった。それでも唯一の救いは、夜泣きだけはしないということだった。

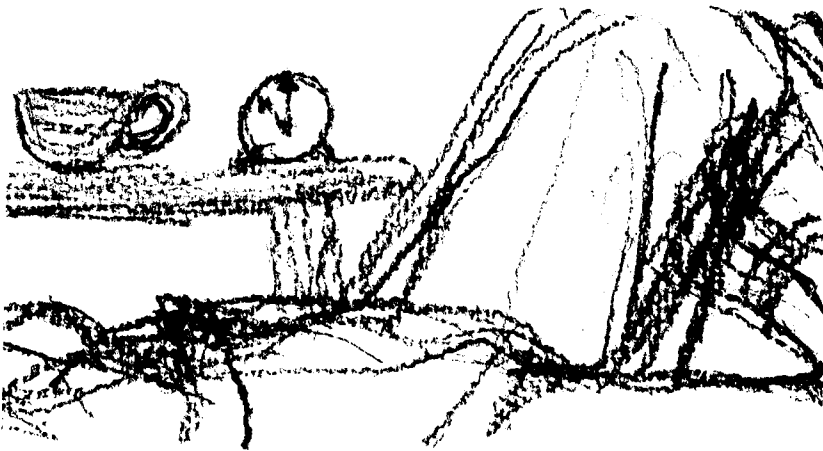
初めの二、三カ月はあつという間に過ぎた。無我夢中、ただそのひと言につきる。その後は次第に要領を覚えて、毎日の生活にも余裕がでてきた。夕食のしたくは雄一が昼寝をしている間に済まし、私の顔が見えるところに雄一を寝かせておくと、あまり泣かないということもわかった。ベッドから出して雄一をあつちこつちに移動させた。こうして、日常生活を少しずつ雄一に合わせていった。気持ちに余裕ができると、子供もかわいくなってくる。自分でも自分の子供がこれほどかわいいとは意外だった。夫は

前から子供がほしいと言っていたが、私は結婚して四年の間子供ができなくても、それほど子供がほしいとは思わずにいた。それまでよその赤ちゃんを見ても、関心がなかったし、特別かわいいとも思わなかった。

そんな私が妊娠を境に変った。外を歩いていて、赤ちゃんを見かけると必ず目がいったし、あやしてみたり、抱いてみたりまでするようになった。自分で子供を産んでからはますますかわいくなった。雄一が、あくびをした、笑った、ミルクをたくさん飲んだ、そんな単純なことがすごくうれしい自分を発見できた。

夫も同じ思いだったと思う。他人から見れば親馬鹿もいいところだろうが、夫と私の間ではその喜びが共有できた。また、赤ん坊に対する私のイメージもだいぶ変った。以前は、赤ん坊とは小さくて弱々しくて、誰かが守ってやらなければ生きられないものと思っていたのだが、それがまちがいであることがわかった。

赤ん坊は予想外に強いものだ。まるでエネルギーのかたまりみたいな存在で、その生命力のまことにたくましいことに私は感動した。生まれたその時から、自分がどこに向かっているのか知っているみたいに力強く歩いていく。私達はその手助けでしかない。あのギャーギャーというものすごい泣き声も、赤ん坊のもつエネルギーから発しているのかもしれない。子育てに少しずつ慣れ、子供もかわいいと思えるようになった頃、毎日の生活の中にもあいた時間がでてきた。一度、要領さえ覚えてしまえば、赤ん坊一人の世話はいしたことがない。忙しい、忙しいと思っていた最初の頃が嘘みたいに思える。たった一人の話し相手である夫は、十二時過ぎにならないと帰って来ないし、雄一も寝てしまえば、夜は私一人になる。そのポカリとあいた時間が、私にはたまらなく苦痛になってきた。よく考えてみれば、毎日、夫と話す以外は誰とも口をきいていない。夫とだって、朝仕事に



出る前にちよこつと話すぐらいが関の山だ。雄一が生まれる前までは私も働いており、緊張した職場の中で、毎日せいっぱい働き、仕事を終えた時には充実感があった。同僚とも仕事の話や雑談をした。ところが、今はどうだろう。まるで生気を失ったカゴの鳥だ。一步も外に出ないで、雄一と二人して家の中にとじこもっている。

今住んでいる貸家は、二年前に引越して来たばかりで、近所の人とも、顔を合わせればあいさつをする程度のつき合いしかなかった。その上、私はあまり人づき合いがいいほうではないので、積極的に友達をつくるということもできなかった。

来る日も、来る日も、狭い部屋にとじこもって、雄一と二人だけで過している。と、さすがに気持ち減入ってきた。雄一はかわいかったが、それだけでは満たされない何かがある。自分だけが、世の中から取り残されているようで、だんだん

私は不安になってきた。手当りしたい、友人に電話をしたり、手紙を書いてみたりしても、話題もそのうちにつきてしまう。かといってまだオムツもとれない雄一を連れて出歩くわけにもいかない。

自分ではけっこう孤独には強いと思っていたが、一日中誰とも話さない日がこう長く続くと、耐えられなくなってきた。そういった精神状態にしていると、ささいなことが気がかりになってくる。

雄一は目の前でおもちゃや手を動かしてみても、ちつとも目で追わない。もしかしたらよく見えないんじゃないだろうか。泣いてばかりいるけれど、どこか具合でも悪いんだろうか。心配しだしたらきりがない。特に病院の開いていない土曜の午後や日曜日は落ち着かなかった。そんな時、雄一が言うことをきかないと、私も突然今までのストレスが爆発して、つかつかとなってしまう。うんちをしたお尻を拭こうとすると、雄一がいやがって、うんちのついたお尻を手でかきむし



って、その手でそこら中にうんちをなすりつけた。私はそれを見て、一瞬かっとなって、大声で怒鳴った。

「なんで、そんなことをするの」

雄一は、私の突然の大声にびっくりして、火がついたようにギャーギャーと泣き出した。その声にますます私はかっかとして、

「うるさい」

とこれまた大声で怒鳴っていた。まだ五カ月にもならない雄一にそんなことを怒ってみても仕方のないことなのに、かっとして自分を押さえられなくなっていた。

泣き疲れていつの間にか眠ってしまった雄一の寝顔を見て、かわいそうなことをしたと後悔したが、もう後の祭りだった。実家の母に子供は大切な気持ちで育てなさいと言われたことが頭をかすめ

た。こんな時に夫が居てくれたら、そんなに怒るなよ、雄一がかわいそうじゃないか、といきめてくれただろう。それが雄一と私、二人きりだと歯止めがきかない。

雄一もそんなイライラした母親と毎日顔を突き合わせてかわいそうだったと思う。

そんなもんもんとした日々が何カ月か続いたある日、電話がかかってきて、急用でどうしても出かねければならないことがあった。私は仕方なく、雄一をベッドに寝かせつけ、戸締りをして家をあとにした。出かけている間中、気がかりで、大急ぎで用事を済ませて、あわてて帰って来ると、近所のTさんが雄一を抱いていた。

Tさんの話によると、雄一の泣き声があまり激しく聞えるので、気になって家の中へ入ろうとしたが、どこも鍵がかかっている入れない。そこで裏へ回ってみたら、小窓が一つあいていたので、その窓を乗り越えて家の中へ入ったということだった。私はすっかり恐縮してしまっ



て、事情を話しお礼を言った。

Tさんは、そんな時はいつでも声をかけてください、時々見に来てあげますからと言ってくれた。Tさんにも雄一と同じくらいの女の子がいた。それがきっかけで、思いがけず、Tさんと話をするようになった。Tさんには、すでに小学校と幼稚園に行っている二人のお兄ちゃんと雄一いたので、いろいろアドバイスもしてくれた。私が雄一は泣いてばかりいて困っちゃうわと言うと、Tさんも上の子がそうだったと話してくれた。雄一だけじゃないのかと思うと、私も安心できた。初めは立ち話、そのうちに一緒に散歩しましょうかとだんだん親しくなり、お互いの家を行き来するまでになった。

雄一も、Tさんの家は、お兄ちゃん達がいってにぎやかなので、遊びに行くのが楽しみらしく、Tさんの家に行くときもツキッと喜んでいて。それにおない年の由香ちゃんもいるのでちょうどよい遊び相手だった。

Tさんと親しくなってから、Tさんと知り合いのSさんとも話をするようになって、しだいに私の世界も広がっていった。話し相手がいるということが、人間の気持ちをこころも変えてしまうのかとびっくりするぐらい、それから私はよくよく心配することがなくなった。

今では、よちよち歩きをするようになった雄一と由香ちゃんを連れて、Tさんと近くの公園に遊びに行ったり、用事のある時には、お互いに預けたり預かったり合っている。あのまま、Tさんと知り合えず、もんもんとした日々を送っていたら、今ごろどうなっていただろうと思うとちよっとこわい気がする。

アパートの密室で赤ん坊と二人きりで、慣れない育児に悪戦苦闘している若い母親、それが現代の母親の姿なのかもしれない。彼女は今まで赤ん坊をあやしたことも抱いたこともない。彼女が一番頼りにしているのは、本棚に並べてある育児雑誌。

でも赤ん坊は思いどおりにはいかない。一生懸命になればなるほど赤ん坊はむずかる。これでは彼女がノイローゼになるのは時間の問題だ。やはり子供というものは、人間の輪の中で育てたほうが自然なのかもしれない。母と子のつながりだけでなく、いろいろな人間のつながりを持つことができれば、その子は幸せだろうと思う。母親である私にしても、雄一だけでなく、由香ちゃんともあるつながりを持てた。

一つの波を乗り越えて、今私はもう一つの波に向かっていく。Tさんと私はいつも話している。

「子育てに追われて、このままでいると人生終っちゃうね」

もちろん子供はかわいい。雄一は私にとって初めての愛おしい存在である。しかし、Tさんも私も、今の生活には決して満足していない。やがてその不満が大きくなってくるだろうと思う。

落第ママに徹する

瀬戸

環

千葉県佐倉市



妊娠は「寄生」だった

生まれる子供の種類には、大別して二つあるんじゃないか、と私は思っている。一つは計画的に生まれた子供。たとえば試験管にすがってでも欲しいノというくらいはいきごみで親は子供を得るわけだからこれはもう、だんぜん大事にされる。ほとんど子供の人格とは別問題で、存在自体に意義がある。

二つめはまちがって生まれてしまう子供。せっかく出来たし、生まないのもかわいそうだから、という親の思いやりで生まれて来るのであれば、たいして期待もされないが、生まれてみれば可愛くて、子供の絶対数の少ない昨今では親も前者と変わらないくらい手をかけてくれたりするから、人間、やっぱり生まれてみるものである。えてして後者の方が五体満足でたくましかったり、などという皮肉な場合も珍しくないようだ。

しかし、世の中、計画外で生まれて来る子供が案外多いのではないだろうか。皆さま、黙っておいでになるが、そういうケースがほとんどなのは、などと私は意地悪な見方をしてしまう。

我が家の二人の子供は、典型的な後者のケースだった。上の男の子は私が二十一歳、大学四年の時の子供、下の女の子は二年後の、二十三歳の時の子供である。結婚して半年、からだに変調が起こった時、私は本能的に初めての妊娠を知った。子供が宿ったと知った瞬間女は母親になると何かの本で読んだ記憶がある。つまり女は男よりも十カ月近く早く親になるのだ、と。

それは私の場合は当たっていなかった。子供がお腹にいた時も、また苦しい出産を経験した時も、私は精神面で母親にならなかった。

子供が立ち上がり、喋り出し、保育園に通うようになって駄目である。逆に父親の方は結構がんばっていて、余り子供

と顔を合わせないけれど、一緒にいるときは、せつせと父親としてのサービスを。私は親として、あっさりと先を越されてしまったのである。

あせれども精神面がついて行かず、「全ての母親は母性本能を持っている／＼とおっしゃられた偉い先生に何とかしていただきたいくらいである。

「妊娠ですね」

病院でそう告げられた瞬間、私にも感動はあった。子供は欲しかったのではないしろ、

「幼い生命が私の中に宿った」

なんていう週刊誌の見出し的なセンチメンタリズムに私は酔ったのだ。ふわっと突き上げて来る感動に、涙さえ浮かべて、私は医師に頭を下げた。

が、現実問題として、そんなセンチメンタリズムなんか吹き飛ばすくらい、つわりは苦しかったのである。

テレビの中では、若い妻が仲良く夫と談笑中、

「うっ」

と口を押さえ、流した吐。夫は優しく妻の肩に手を掛け、

「お前、まさか」

なんていうメロドラマが展開するのが常である。そういうシーンを夢見ていたのにもかかわらず、きれいな事すまなかつたのである。

嘔吐感は一ひっきりなしたが、カッコよく吐くまでには至らず、どうしても不機嫌になる。

あれは船酔いに近いもので、あまりの気分の悪さに当たり散らすものだから、周囲からも放っておかれる。夫も現実には、

「お前、まさか……」

などと臭いことは言ってくれないのである。

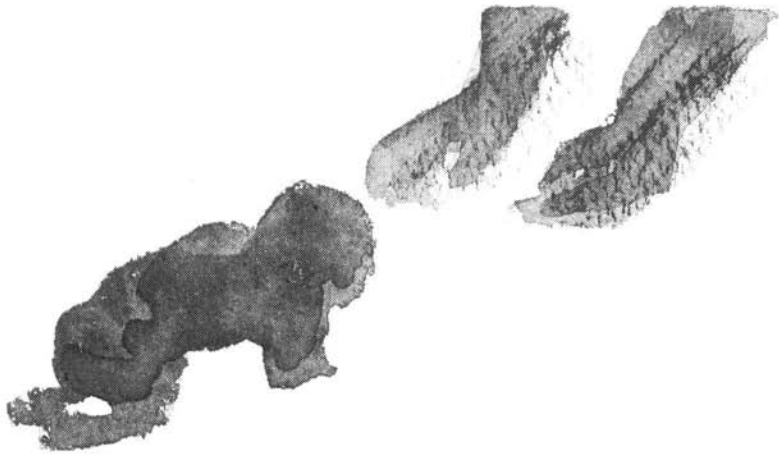
あの感動はどこへやら、私は断言した。「これは寄生だ／＼」

寄生した子供を嫌がった訳ではない。しかしとくにいいおいしいわけでもない。

た。メカニズムから考えて、それは私にとって寄生以上でも寄生以下でもなかったのだ。そんな母親だから、後半、妊娠中毒症になって私自身食べただけ全部太ってしまったのは、お腹の子供が遠慮したのかも知れない。何事にも遠慮勝ちな子供で、予定日の二週間余り前に陣痛が来て、しかも三日も生まれ滞った。出て来た子供は一六八〇g。身二つになるとすぐに日赤の未熟児センターに運ばれて行ったので、対面は三週間後、退院は四十日も後のことだった。

それから、子育てが始まった。当時私は、実家で学習塾を開いていたので、仕事の日にはベビーサークルに子供を詰めこみ、往復した。

夫や姑に応援をたのんで、時々大学にも通った。子供が育って、母親にまわりつくようになると、私は彼の遊び相手が必要だ、と思うようになった。上の子供の誕生からはば一年半後、私は第二子の女の子を生んだ。



子供が二人になってみると、とても手が回らなくなり、大学卒業と前後して塾の仕事は友人の手に委ねてしまったのである。実際忙しかった。周囲の者はみな口を揃えて、

「大学を出ただけでも大したものだ」

「何もかもやろうなんて無茶」

と言った。が、一つのことを止めれば楽になるというのはいささか甘い考えだった。

「――なんていう単純な計算は、人間の生活には通用しない、ということに私はその時気付かなかったのである。」

仕事をやめた間違い

子供を生み、育てる、ということはい、たいいていの女性が経験してきたことなのに、これほどその内容について明らかにされてこなかったことも珍しいのではないだろうか。

出産、育児。

漢字で書けばたったの四文字。だがそれは、これ以上ないというほど困難で壮大な仕事なのだ。

出産自体、あれほど苦しいものだ、というのを、私は実際のところ、経験するまで知らなかった。あるいは、死ぬより苦しいんじゃないか、と思う。あんな苦しみを知りながら、のど元過ぎれば熱さを忘れ、何人も生む人がいるけれど、私は一人の出産に五十時間もかかり、そしてすっかりこりてしまった。長男の相棒は決死の覚悟で生んだけれど、これ以上決して生むまい、と決意を新たにしている。

そして、出産よりさらに苦しいものが母親を待っている。

育児である。

大学を卒業し、仕事もやめると、私は家庭にこもる結果になった。

生まれたばかりの乳児と、よちよち歩き、片言の幼児をかかえていれば、何かする、というのはほとんど不可能に近い。

子供のそばを離れられないから、代わりの人間がいなければ外出は無理である。目が離せないから、本を読むとか、昼寝をするといった集中作業はできない。その上、暇は暇なのだから、私にとっては拷問のような生活になってしまった。子供好きで、一緒に遊ぶのが楽しいような母親になればいいのだが、母性本能の目覚めは待てど暮らせどやって来なかった。

突然訪ねて来た父が、ベビーサークルで泣きじゃくっている子供をあわてて抱き上げ、私にくっついてかかった。

「子供の泣き声を聞けば、母親ってのは自然と手が出るもんだ。それをお前は何だ。のんびりベランダから外なんか見て」「だって、すごい声なんだから――」

私は泣いている子供に対して、ミルクをやり、おしめを替え、何か変調がないかを調べたのち、ベランダに出ていたのだった。泣くことは一種の運動だ、とも思っていた。

「他に仕事がないんだから、もう少し育児をしっかりやったらどうだ」

「だって……」

それが悪かったのだ。私はそう言いかけて黙った。父に言ってもわからないだろうが、仕事をすてたのはまちがいだっただのだ。

仕事と育児なら育児が主で仕事は従。その常識にまどわされてしまった。私はそういうタイプではなかったようだ。

仕事が主で育児が従。そう行動してこそ生かされる母親だっているのではないだろうか。

「育児があるから仕事をやめる」のは、世間ではごく普通に通用するのに、「仕事があるから育児はちょっと」では通らない。それだけに、子育てをしながら仕事を続ければ負担は大きい。それを考えて二の足を踏んだけれど、仕事をする事によってはずらつとして、逆によりよく子供に接することができる場合があることに私は気付くべきだった。

塾をやっていたとき、

「仕事の間、子供を見て下さい」

その言葉をいうのは心苦しかったけれど、

仕事の中で私は自分を取り戻すことが出来ていた。

本当は仕事に関係なく育児から解放さ

れて自分を見つめる時間を持つことは全ての女性にとって大切なことなのに、今の日本ではそれがとても難しいのだ。

「母性本能がないとは言わないが、非常に未熟だ」

そう連発して父は帰って行った。

子供は自分ではない

子供は他者。子供が生まれ落ちた瞬間、私はなぜかそう思ったのだった。

私の母親は、

「子供は自分の分身だからかわいい」と言った。分身とは、何をもって言うのか、私は母親になってみて、あらためて理解に苦しむ。顔がまず違う。多少喋るようになる頃には、性格も違うことがハッキリして来る。

将来のことを考えれば、生きる時代がまるきり違うのは明白だ。いきおい考え方や思想にもギャップが生じるのは時間の問題だろう。

母に言えば

「それは理屈」

で片付けられるが、理屈でも理論でもなく、子供の成長を見る時、一挙一動に私はその感を強くしてしまう。

やることもなく（出来ず）、そのくせ



神経ばかり尖らせて子供の見張りを続けているうちに、私はアパートの狭いことが無性に気になりだした。感情がいらいらだって叱らなくてもいいことで子供を叱ることが多くなっていた。どなりつけて、

後で考えてみると、子供は悪くなかったことに気付き、情けなくなる。自分は母親失格。ひょっとしたら子供と自分とは性格が合わないのではないか、と思ひ詰める。時々涙が出て止まらなくなった。

帰って来た主人をつかまえて、長々と愚痴をこぼした。疲れている夫はよく怒鳴り、時には私を殴った。

「仕方ないだろう、母親なんだから」
彼はいつも、そう言った。

でも、私は何かにすがりたい気持ちだったのだ。トイレにもついて来て、私が入っている間、ひっきりなしにドアを叩き続ける子供がうとうとして、一日三十分でいいから、育児に休けいが欲しい、と思った。

私は決心して、夫が家にいる日待っ

て、神経科を訪れた。秋の午後だった。黄色がかった陽の光が、病院の建物や立木をセピア色に染めていたことを憶えている。

そこは精神科と神経科専門の病院で、ひっきりなしに脈絡のないことを喋り続けるお婆さんや、じっとおし黙ったまま、うつ向く青年など、待合室はさすがに異様な感じだった。受け付けで、

「ここは、精神、神経科だけです」

と念を押され、バツの悪い思いもしたが、待合室のベンチに腰掛けると、何となくほっとした気分。

私を担当して下さったのは、H先生という女性の精神科医だった。いささか感情的になって、非論理的なことを、とうとうと訴え続ける私に時々相づちを打ちながら、彼女はとにかく聞いてくれたのだった。

カウンセリングの原点は、相手の訴えを聞くことである。心理学教室で学んだことの意味がわかる気がした。

H先生はしかし、聞くだけではなく、アドバイスをしてくれた。

彼女にも三歳になる男の子がいて、夫がいて、家庭があり、姑がいた。そんなH先生との出会いを、神に感謝しなければならぬ。

「大学を出た母親は、えてしてあなたのように育児ノイローゼみたいになっちゃう人が多いですよ。育児は理論通りにはいかないから」

学歴のことなど一言も話した憶えはなかったが、よほど私のケースが型にはまった、ありふれたものだったのだろうか、先生はそれを前提にして、話し始めた。

H先生は自分のことを語った。三歳になる男の子は保育園に放りこみっ放し、家でトイレのしつけを、とさんさん注意されるけれど、忙しくてそれどころじゃない。大人になってもおしめが取れない人はいないから、いつかは取れるだろう、と割り切って、全く関知しないため、子供は大きな図体におしめをしてアヒルの

ような格好で飛び回っている。

仕事優先で亭主は二の次だから、姑は自分をひどい嫁と思っていることまちがいないし。

「育児っていうのはねえ、あなた、手抜きですよ、手抜き、ね。こうしなくちゃいけないとか、ああすべきだ、なんて考えないで、どうやって薬をやるかって考えてやりなさいよ。たいていの子供は、無事に育ってるんですから、そうですよ？」

すうっと体が軽くなるような気がした。H先生が目を細めて、静かに微笑しながらこちらを見ているその顔が、今でも忘れられない。

育児とは、手抜きすることと見つけた。

それから、これが私の不文律になった。もう一つ。トラブルが起きたら、それが一過性のものかどうか、検討してから悩むことにした。

「大人になるまでおしめをしている人は

いない」という言葉を応用して考えるのである。

離乳食―大人になっても離乳できない人はいない。―だから悩む必要なし。

指しゃぶり―これも大人になって指をしゃぶっている人は(多分)いない。だから悩まなくても大丈夫。といった調子である。

ひと様には、おおらかに育てることにしています、なあってカッコつけているけれど、実は、ズボラな子育てに徹することに決めたのだった。

今考えるに、H先生だって、医師という仕事によって、つまり育児とは全く別の部分で自分の姿勢を決めたのではないだろう。彼女は、自分は何によって生かされるか、を知っていた。

「私もあなたと同じ、だめな母親ですよ」そう言ってくれたけれど、先生の言葉には自嘲的な響きや、卑下したところは微塵もなく、仕事への自信に裏付けられた輝きがあったように思う。

結局、H先生の所には二度ほど通院。二回目は夫が付き添ってくれた。

「ノイローゼなんでしょう？」

結論を急ぎたがる夫に、先生は

「ノイローゼ、じゃないけど、かなり神経がまいっちゃってますね」

子供を道連れに、なんてことも考えられるから、いざとなったら児童福祉施設に、私の名前を出してあずけなさい、とのアドバイスに、夫は初めて青くなった。夫の態度はその後明らかに変わり、彼は私のために家を建ててくれる気持ちになつていった。

通院するたびに私は山ほど精神安定剤をもらった。

最初にもらった分は、飲むとやたらと眠くなった。

「眠っちゃうのが一番いいんですけどね」

しかし子供が二人もいれば、眠ることもままならない。先生は薬を替えてくれた。



「しばらく通院してみませんか」

親切にすすめてくれたが、私には先生の働く姿が一番の薬になったようで、その後、病院には足を運ばずにすんでゐる。

一年後、私は再び中学生に数学と英語を教え始めた。

親は仲よく

私は一人っ子である。

父は教師をしている。

余り知られていないが、教師には怖い職業病があるのだ。唯我独尊という病気である。

それにかかると、まず耳を冒され、聞く耳を持たなくなる。父もそれにかかった。最近は多少良くなってきたが、昔はひどくて、一番多く被害を受けたのは、私と母だろう。

父は私を、とにかく他人に迷惑をかける人間に育てたい、と思ったらしい。

それが父の子育ての支柱になった。

「甘え」を何より嫌い、私が少しでも「甘え」を見せると顔が変色するほど怒った。

そうなら何と言っても無駄である。

言い争いになれば声量で負ける。先生というものは、それでなくても声量をきたえられるのに、父の場合は若い頃、声楽をやっていたから、始末におえない。

原始的だが、父親の迫力というのは百万語を費やすより子供の反抗には効果的かも知れない。

彼はよく、乃木大將を引き合いに出して、私を戒めた。大將の父と大將本人との厳しい関係をとうとうと喋って聞かせるのである。

私が

「寒い」

と言えば、乃木大將の父は冬の早朝、大將に水をかぶらせた、と言う。

乃木大將がいくら水をかぶろうと、私の知ったことじゃない。それは単に父親

運が（お互いに）悪かっただけのことじゃないか。寒さに変わりがあるわけじゃない、寒いものは寒い、子供心にそう思ったことを憶えている。

父は説得力なんてハナから考えていなかったのだらう。親が正しいと思うことに子供は従うしかない、という考えだった。

効果のほどは、母に言わせれば

「全く可愛気のない娘に育ってしまった」ことであり、主人は

「女らしさというものがない人間だが、

乃木大將が手本じゃ土台無理」

と、やや同情的ではあるものの、はなはだ芳しくないのである。

母は私の幼児時代は

「ひどい問題児だった」

と、振り返る。

母は幼稚園の保母をしていた。その割に私には信念を持って育ててもらった憶えもないのだが。

私は聞き分けがなく、余り彼女を困ら

せたので、母は児童相談所に私を連れて行ったそうである。職員がカウンセリグの後で、

「問題は子供でなく、母親のあなたの方にあります」

と母に言ったらしい。

幼稚園の保母、いわば幼児教育のプロにしてこのありさま、つくづく子供を育てることの難しさを感じる。

母は、その後、アドバイスについて深く考えることはやめ、開き直って、子供が言うことを聞かないのは子供自身の資質のせいだ、と信じて私を育てたから、ある意味では強い。

「あんたはふつうじゃなかった」

が、母の口ぐせである。児童相談所の職員の理論で、この子のすさまじさがわかってたまるか、と思ったのかもしれない。それなら初めから相談所などに行かなければいいようなものだが、それなりに母も子育てに迷い、苦しみ、誰かに訴えたかったのだらう。

私が自分の育って来た時代を振り返って、子育ての参考にするのは、ほとんどが両親の反面教師的な部分だが、中でも一番強く感じるのは、両親は何が何でも仲良くなければならないということである。

私の両親は、自慢じゃないが、実に仲が悪かった。時代背景から離婚も難しかったのだろうが、あんなにケンカばかりしていて、どうしても一緒にいなければならぬのだらう、と思うほどであった。父も母もしょっちゅう子供の前で相手を罵倒する。子供は単純だから、父が母に向かって

「お前は馬鹿だ」

と言えば、お母さんは馬鹿なんだなあ、
と思ひ、母が父のことを

「気違いだ」

とののしれば、お母さんのいうことだから、お父さんは気が狂っているのかもしれない、と思うのである。それが度重なれば、ますます子供は信じ込むのである。

その結果、私は両親を早い時期から尊敬できなくなってしまうように思う。

父親と母親は、子供にとって大きな存在だ。

親が世の中の全て（とくに一人っ子は）である時期は案外長いものだ。お父さんやお母さんの価値を早いうちから醒めた目で見きわめてしまふのは決して幸せなことではない、と思う。

夫婦がケンカをしていて腹ワタが煮えくり返っていても、子供の前では相手を罵倒したくないと私は思っている。たとえ背中にも手を回して、つねり合いをしていても、子供の方を向いた顔はニコニコと笑っていないければいけない。本当に仲がよければ、それに越したことはないが、双方人間だから、怒鳴り合いたいことだってある。だが、それを理解できる年になるまで、仲良しの両親でいることが一番大切な親の役目ではないか、と私は両親から学んだ。最悪の場合、離婚することになっても、相手の悪口を子供に言わ

ない、というのは、これでなかなか難しい。

長男の早起きに泣く

H先生との、好運な出逢いの後で、私は少しずつ自分を取り戻し始めた。母乳は必ず煮沸して使用、散歩は時計とにらめっこで、きっちり一時間、なんて神経質な部分はそう簡単には直らないけれど、それでもかなりゆとりができた。

子供のライフスタイルに母親が何かなんでも合わせる、のではなく、母親のライフスタイルに子供を合わせる。子供はまだ生まれたてで、それほど確固たる生活習慣ができていないわけではないから、苦痛は少ないだらう。

そう考えたりラックスした。

私も主人も、イラストを描いている。

（二人が知り合ったのは、大学の漫画研究会だった）えてして、イラストを描いている人間は夜型が多い。ちょうど電燈

みたいなので、昼間はボーッとしているが、夜になるとにわかに冴えてくる。私達もまさにそうである。子供が生まれた当初はなんとか子供より早く起きて母親っぱく、まな板に包丁の音など響かせようと、目覚し時計をセットして頑張りました。起きるには起きれるのだが、午前中は睡魔との戦いで、イライラモヤモヤ、泣く子をぶつとばしたくなる苦しさである。そのくせ子供が眠りに就いて、やれやれ翌朝に備えて早寝するか、と布団に入っても駄目なのである。うたた寝も、夜の眠りのさまたげになると、首を振り振りがまんして、やっと夜になってみれば、頭は冴え冴え、目はぼちちり、羊の数もなんのその、長年の習慣とは恐ろしいものでシャキッととして、これからジョギングもOK、という体調になってしまっている。そのうち、頭痛が始まり、病院で低血圧のせいと診断され、私は早起きを断念した。

皮肉なもので、長男は異常なほどの早



起きだった。彼は乳児の頃、ニワトリ的な体内時計で日の出とともに目を覚ました。夏なら四時半前後である。彼は妹を叩き起こし、そのくせ母親や父親は起こ

さず、あらゆるいたずらを伸び伸びやってくれた。見よう見真似の便所掃除は、タワシをつかみ、便器をまたいでの大奮闘。そこから中水びたしで、哀れにも便器に浮かんだスリッパと、水を吸って、グレーに変色したブクブクのトイレレットペーパーは、一時間にも及ぶ彼の努力をしのばせるものであった。

またあるときは台所の床がつるつるピカピカ。見れば開けたばかりのサラダオイルの缶が空になって横たわっている。長女は油の池の中にチョコンと座って、米びつから米をすくい出してはサラダオイルと混ぜて指でかき回している。

眠気は一べんで醒め、私は悲鳴をあげる。

眠っているこちらが悪いにはちがいないが、眠りたいのも、いたずらは困るのも、本音なのである。私はこの二つを両立させることにした。理解できるかどうかは怪しいが、二人を説得し続けた。

「あのね、ママの仕事は夜が遅いの。二

人がねんねした後も、ずっと起きてるのよ。だから、朝早くは起きられないことが多いの。でもママはなるべく早く起きるようにするから、二人ともママが起きるまでいたずらしないで子供部屋で遊んでね」

私は何度も繰り返した。けれども子供達が小さ過ぎたためか、結果はさんたんたるものであった。

その頃、私達は、私の両親の家の隣りに家を持つことになった。日先生の助言で主人が奮起して建ててくれたのである。私の説得が子供達に対して効を奏さないまま、私達一家は新生活になだれ込んだ。私の両親は昔から早起きである。祖父の隣りに引越してから、子供たちは朝、祖父母の家で過ごす習慣を持ちかけた。正直なところ私は、朝だけは母に子育てを代わってもらいたい、と思い始めていたのだ。だがやがて、母も、長男の度外れた早起きに音をあげた。今度は母がイライラし始め、何とかしてくれと迫



られる。それでもごまかしごまかし子供達を彼女の手にゆだね、私は朝だけ育児をさぼっていたわけである。

けれども、だんだん、私は子供達が祖

母のもとから我が家に帰って来た直後に妙にわがままになっていることに気付いた。

「これはマズいぞ」

私は考え込んでしまった。

そしてある日、長男が私にこんな言葉を投げつけた。

「なんだよ、ママなんてたいした親でもないくせに！」

私は思わず苦笑いしてしまった。そして、子供達を両親の手にまかせることを断念しようと決心した。

確かに私は「たいした親」じゃないのだ。それは誰よりも自分が一番よく知っている。だが、それが長男の頭だけで考えられた批判とは思えなかった。朝、私の代わりに叩き起される母が、苦しまぎれに子供にもらしたものと思われる。

いくら正論とは言っても、親への不信感を幼いうちから植え付けられるのは、子供にとって幸せなことではない、と私は考えた。

私は再び子供達に朝の協力を繰り返した。四歳の声を聞いて長男は、やっと理解してくれるようになった。未だに子供達は私よりも早く目覚めるけれども、祖母のもとへ行こうとはしない。二人で遊びながら、私の目覚し時計の鳴るのを待っていてくれる。

寝坊ママが一つだけルールとして守っているのは、子供達の朝の食事は絶対抜かない、ということ。あわただしくなるのは自分のせいだから、私は食事ができないが、子供達には必ず食事をさせて保育園に送り出す。

アメリカ式？に 育った子供たち

私の子供達は、授乳時以外は、母親に抱かれたりおぶわれたり、という経験はほとんど持っていない。

長男は、やっとよちよち歩きを始めたころ、私が下の子を妊娠していても体重を支えてやるができなかったた

め、ひたすら歩かされた。

長女は長女で、私が、子供は抱かずとも育つ、と味をしめてしまったせいで、ベビーカーに乗ってもっぱら外出した。

しかも長男は、私の妊娠中、いつも買物に同行させられて、ぞうさんの形の小さなリュックサックに、塩や味噌等、重いものを詰めて背負う役を勤めた。

歩き始めて間もない上に自分とあまり変わらないほど重いリュックサックを背負うものだから、バランスをくずして、

しりもちをつく一幕も。今考えれば不慣れた気もするが、長男のためにはかえってよかったようである。彼は正常に生まれた長女よりも丈夫で、病気の感染に対して強く、同年齢の子供より小振りである。他は全くハンデキャップを持たなくなっていた。年がら年中、泣こうがわめこうが歩かされて育った長男の足は、ドナルドダックのようにば広でがんじょうで、安定がよくなった。あの子はよく歩く、と近所で評判になったほどなので

ある。

さて、我が家の子供達の就寝時間は八時である。親が宵っぱりだと子供も夜ふかしをする、と聞いたことがあるが、我が家に関してそれはない。子供がそばにいると少しも休まらないので、寝室を別にしたせいもあるかと思う。子供達は親と子は別の部屋を使う、と思って育っているらしく、淋しがる様子はない。

添い寝、腕まくら、の習慣は皆無である。

長女は初めて保育園で昼寝をした際、保母さんに添い寝をしてもらって、いたく感動してしまい、帰宅後、報告し始めると止まらなくなった。けれどもついに一言も、ママもやって、とは言わなかった。彼女の、母親に対するイメージがわかるうというものである。

来客があっても子供達の就寝のリズムは狂わない。時間が迫ると、歯みがき、パジャマの着替え、寝る前のオシッコ、と、流れ作業にかかり、八時の時報とと

もに号札がとぶ。

「はい、時間よ、寝なさいい」

二人の子供達は順序よくヤモリのよう
な格好で階段を昇り始める。

「ベッドに入りましたか」

私の質問に、

「はい、お休みなさいい」

の声が返ってくる。これで一日の母親
勤務の終了である。

初めてのお客様は目を丸くして、

「よく仕込みましたねえ」

サル回しのおサルさんを見た目付きで
ある。

主人には

「退社時間を気にするOLみたいに子供
達を追いたてる」

とからかわれ、母には

「そんなアメリカ式の育児をやっていると、
老後が淋しいよ」

といさめられる。

外国暮らしの経験はないから、私のやつ
ているのがアメリカ式かケニア式か、確

かなところはわからないが、自然とこう
なってしまったのである。自分なりに工
夫してライフスタイルを作っていけない

と、我が家のような核家族であれば子育
ての最中に母親として以外の時間を持つ
ことは不可能に近思う。



子供よ羽ばたけ

子供達は三歳と四歳半になった。主人が今年の初めから東京に事務所を構え、帰っても深夜、泊りも多いという状態で、我が家はちょっとした母子家庭の様相を呈している。

暮らし方の急変に動揺してしまっているのは母親の私の方で、子供達は全く平気、したたかにも自分達の生活を守っているから、形勢逆転の感がある。

長男の早起きも変わらない。長女は最近お腹がすくと私を起こしに寝室へやって来る。

「うんちー」

などとおどかされ、寝呆けまなこで戦闘開始、大いそぎで朝食のしたくにとりかかる。

「今度は早く起きるんだよ！」

「はい、はい」

説教されるに至っては、どちらが親だ

かわからない。二人が食事をする間、超特急でお弁当の用意。

口をまだもぐもぐやっている二人を、済まない気持ちでせきたてて車に乗せ、いざスタート。

保育園は静かな田園の中にある。

ハンドル切る手も軽やかに、赤い屋根の園舎の前に到着。解放の瞬間である。

「行っちゃい」

「行っちゃい」

「先生、よろしくお願いします」

笑顔一杯の保母さんが、朝もやの中で天使に見える。保育園の朝の空気があれほどすがすがしいのは、うっそうと繁る樹木のせいばかりではあるまい。

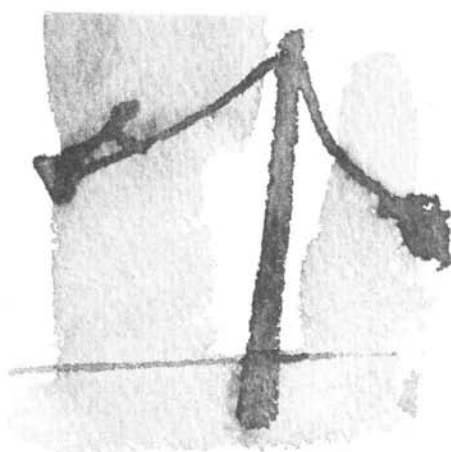
帰りの車の中で私は、母親から本来の自分に戻っていることに気付く。

自分がようやくと生きて行くだけで精一杯。子供達にとっては、どこから見ても立派な落第ママの私である。この先、二人の生き方を左右する力があるとは思えない。基本的な教育をし、あとは見守

るのみである。

ただ一つだけ、約束してやれそうなことがある。子供達が本当に私の手を必要としなくなった時に、私が私の生き方を決めたように、二人も自由に飛び立たせてやりたい。未来だけをまっすぐ見つめて、羽ばたかせてやろう。

少々カッコ良すぎるかもしれないけれど、それが落第ママの秘かな決心なのである。



うつ病の記

松本 弘子 (48歳)

神奈川県横須賀市



話は十一年前の一月上旬に遡るが、そもそも寒い盛りに初めて子を産んだのが失敗の元、いや、私のような自分勝手な人間、しかも大の子供嫌いが子を産んだのが根本から間違っていたのかも知れない。私には当時も今も、人の子の母親たる資格はないとの思いが強い。私が母親になるなんてやはり間違っていたとは思われないのである。

一月上旬に出産、二月半はより体に変調を来し、周囲の者から、子供一人育てられないとはだらしがない、しっかりせよと叱られ、叱責から逃れるように新しい土地に引越したのが三月末、以来死ぬことばかり考え、五月上旬身動き出来ぬほど心身衰弱しきって、ある夜赤ん坊をお風呂に入れながら、いっそお湯に沈めてしまおうかと危く実行に移さんとして、これはただ事ではない、発狂寸前ではないかと神経科医を訪ねる決心をしたのである。

医師は一目私を見るや「うつ病」と断

言、必ず治るから心配せず医師の指示通り薬を飲むように、しばらく赤ん坊を預けて私は手出しせぬよう（あとで、赤ん坊を殺す恐れがあったからと告げられた）、そして、気を付けないとまたこの病気を繰り返すと忠告した。

うつ病はノイローゼと異なるという。従ってこの「うつ病の記」は育児ノイローゼの記録とは異なるであろう。事実、私は子供を産んだばかりにこんな思いがけぬ病気にかったと信じて、医師から二、三質問された際に、きつとなって、子供を産むべきではなかったのだと叫んだりして、「あなたは子供を産まなければ産まないということ、また結婚しなければしいというそのことで、どっちにしても必ずこの病気にかかるんです」と医師から怖い顔で睨まれたのである。

たまたま産後に発病したうつ病は、ひとえに私の弱い性格に因るものである。しかし、育児ノイローゼと重なる部分も

あるかも知れない。

私の主治医となったその医師は、自殺研究の権威者、マスコミにしばしば登場する有名医である。と後で知ったが、いつも苦虫かみつぶしたような怖い顔をしていて、後に私が、副作用がひどいから薬を飲みたいくない、と言ったら烈火の如く怒った。その怖い顔と、「また繰り返す」との一言は、折につけ私に反発心と恐怖心とを抱かしむる。「また繰り返す」と注意された、とその時母に話したら、母は「今度はこの子が大きくなって、学校の成績が悪くてそれを苦にしてかね？」と笑ったのであるが、今六年生になったその子は学校が嫌い、勉強が嫌い、私をてこずらせていて、まさか母の予言通りにはなるまいが、いやな話である。

一体必ずうつ病になる性格とはどういう性格であろうか。父親ゆずりの杓子定規な融通のきかなさは無類。順応性に乏しく、何事にも完璧をねらうゆとりがなく、肝心要を度外視して些事にこだわり

過ぎるなどなど、いやな性格を数え上げたらきりなく、そして、何にも増して気弱の意気地なしなのである。

人間みな長所短所を兼ね具えているが、弱り目にたたり目、病む時は長所がすべて引込み、或いは裏目に出て、短所が極端なくらい一挙に噴出、まるで坂道転がるようにマイナス方向につっ走ってしまう。その結果自分が救いようのないダメ人間に思われ、自己嫌悪の塊となる。

さまざま要因が重なるのであらうが、私の場合、三十六歳に至るまで築き上げて来た生活というか生き方を激変させた、つまり生甲斐としていた仕事を捨てて突然結婚、出産と一大変身を遂げたが、あまりの変身に我ながらついて行けなくなったというのであらうか。出産を機に自分の短所が堰を切ったようにどっと襲いかかって来て、にっちもさっちも行かなくなったのである。

私は少女の頃から、結婚して主婦になるのは真っ平と思い続けてきた。古い言

葉になるが、職業婦人にあこがれていて、独り働いて稼ぎ、生涯好きな映画や芝居をいやというほど見て暮らしたい、と思いついていたのである。恋愛はしても結婚はせず、あのサルトルとボーヴォワールのようなカップルで暮らして行きたい、と生意気な夢を見ていたのである。友達とはみんなとくく結婚して子供を育てている中で、一人好きなことをして粹がっていた。

にも拘らず結婚したのは、つまるところは気の弱さ故、突然のように結婚して、妊娠七カ月まで猛烈に働いていた。仕事はきつく、深夜残業に及ぶことも幾度かあったが、仕事に未練たっぷりなのは、自分の体全くなかばわず、残り時間を惜しみ、全エネルギーを仕事に向け、体を目茶苦茶に痛めていることなど知らずにいた。

もう二十数年前になるが、米軍基地内で働いていた時、そこには女性タイピストが五十人ぐらいいて、常時十人は妊娠

中、大きなお腹を抱えて、半日はレスト・ルームで休養していた。私は彼女らの仕事せうにころころしている姿を思い浮べては、自分が大きなお腹で休みなく働いていることに満足したものである。愚かにも自分の肉体がボロボロになっていると気付かぬままに。

おまけに産む日までものを食べると吐き気を催し、ろくに食べずにいたため栄養不足、体力消耗の烈しさは最たるものであったに違いない。こうして極度の過労が、心身に異常事態を招いたのである。年齢も三十代後半とあれば無理はきかず、まず肉体が悲鳴を上げ、ついで気は病から、心まで病むに至ったのであろう。

退職して仕事を離れたとたんにつく。その空虚さを埋めるため、また、産後は当分不可能だから今のうちに、今度は休む間もなく出産直前まで映画や芝居を見て歩き、本を読み漁り、産まれて来る子供への準備なんぞきれいに忘れていたのであるから、どこか狂っていたの

であらう。

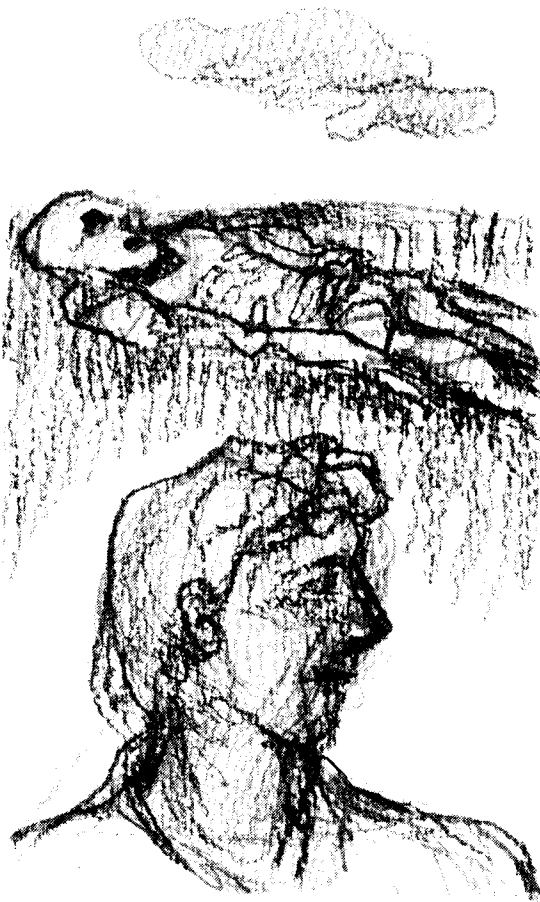
最低おむつと肌着は用意したものの、あとは哺乳ビンさえ買わず、というのは、母乳は必ず出るものと信じて疑わず、ミルクを飲ませるなんて思いも寄らず、誰だって子供を育てているのだから子育ては簡単、何の準備も要らぬと考えていたのである。ところが、赤児とは無縁に過して来た私、いざ産んでみたらどう扱ってよいやら、いちいち途方に暮れてしまった。育児書片手にすれば却ってまならず、周囲からは非難と罵倒が飛んでも来る。混乱につぐ混乱となった。

育児書通り哺乳ビンの消毒せねばと、大きな蒸し器を買って何本もビンを煮沸させる。ところがビンを手で取り扱ってはいけない必ず器具を用いよ、と書いてあれば、その器具の消毒はどうするかと迷い、それやこれ深夜まで消毒していると、寝る暇がなくなる。二十四時間消毒にこだわりの行方に神経ピリピリさせていると、暇が出来ても眠

れなくなった。

眠れぬままに思いめぐらしていると、不安のみふくれ上がつて、居ても立ってもいられなくなる。

そのうち乳腺炎になりかかり、寒いのに氷で乳房を冷やさねばならなくなった。引越しには私は全く手を下さずに済んだ



が、新しいビルの十階のマッチ箱のような住いは、車騒音の真只中、私はいよいよ眠れず、目つり上げ、髪ふり乱し、泣いたり吠えたり、私につられて赤ん坊も昼夜眠らず、かん高い声で泣いてばかりある時は一時間も泣き止まず、うるさいと私は床に叩きつけたりした。可愛い

なんて思う親心あればこそ、ただ疎ましかった。第一私は男児というのがどうしても気に入らなかった。

折あしく夫は仕事が忙しい盛り、朝五時に家を出ると帰宅は十一時過ぎ、私は夫の顔を見る度に、もうダメだ、子供が育てられないと泣きわめいた。夫は自分の面倒は一切みなくてよい。休日になんか買物、掃除、洗濯もするから、ただおむつの交換とミルクだけを忘れずにやってくれと言いつつ実行してくれた。

だが次第におむつもミルクも面倒臭くたまたまず、赤ん坊の顔を見るのもいやになった。死んでくれないかと思ったり、子供好きながら子のない従妹にあげてしまおうかと思った。ようやくおむつを洗い終え、ヴェランダに干さんとガラス戸を開けると、外は灰色一色、まるでこの世の終末の光景、これではもう生きていられぬ、死ぬ他に道はないと思ってしまう。女であれば皆やすやすと子育てしているのに、それが出来ない私は死んで詫

びる他にないと、ビルの屋上から飛び降りることはかり考えた。りした。

どうしても外出して買物をしなくてはならないのであるが、外出が恐ろしくて出来ない。意を決して外に出てみるが、幼児を連れだ女性を見ると恐ろしく、足がすくんで一歩も前に進めず逃げ帰って来てしまふ。買物に行かれぬため食べ物になくなくなると、買置きにジャムなどなめて一日を過ごす。丸一カ月そんな状態にあつて、これ以上どうにもならぬギリギリの時点で病院行きを決心したのであるが、もう少し遅ければ、心中か子殺しを果していたに違いない。その年の秋であつたか、双子の男児を殺してしまつた母親の記事を新聞で読んだ時は、とても他人ごととは思われなかつた。今その女性はどうして居られるであらうか。

通院後もしばらくは死神から逃れ得ず、死ぬこと以外何も考えられずにいた。食欲は絶無、薬を飲むために、止むを得ず一切れの食べ物を無理矢理口に押し込み、

あとは無為にして無気力、そして烈しい自責の念と。

一日四回も薬を飲むと、舌がもつれてしゃべれなくなつたり、腕に赤いブツブツが出来たり、いつも頭がボーッとしていたら、不快感この上なし。薬は一週間後には一日二回としてあとはそつと捨ててしまつた。一進一退よくなつたり悪くなつたり、このまま永久に元の元気な自分に戻れないのではないかと悲観したり、なかなかすつきりしないものである。薬に頼つてはいけない。なんとか自力で立ち上らねばとそうは自覺していても思うようにはならない。

ところが十一月に入つて、突然前の会社から仕事を依頼され、不安ながら週一回上京、仕事をするようになると、病気はケロリと治つて、元の自分に戻つてすつきりしたのである。仕事といつてもただの事務職ではあるが。

よくしたもので赤ん坊は、親がだらしないかと逆に無事無難、病氣一つせずス

クスクと人一倍大きく育つてしまつた。

今は死なずに生きていて良かったと思ひ、二度とあのような病氣にかかるまいと心に誓ひ、細心の注意を払つてゐる積りである。しかし、二度はご免こうむるが、一度は経験して良かったとも思つてゐる。自分がどれほどの人間か、自分の無力さが骨身に沁みて判つたからである。

子供を初め、多くの人々に迷惑かけ放題をしたといつても負い目を感じ、自分では幾分遠慮勝ちに生きてゐるように思う。変えられぬはずの性格もずい分変えられたように思う。他人から見れば果して変つたかどうかは判らないが、自分では変つたと思つてゐる。子供には本当に申し訳なかつたといつても心の中で詫び続けている。せめてこの子を強い精神の持主にしたいと心がけてゐるのであるが、私に似て気が弱く、これも思うようには行かぬものである。

(元・岡田正子)

つらいのか

●出席者

安達 倭雅子 子ども一〇番相談員

属 さつか

静

元NHK「暮らしの経済セミナー」レポーター

中川 慎子

ブックパワー(株) 代表取締役

和田 好子 わいふ編集部

●司会 編集部

司会 きょうの座談会は、「なぜ子育てはつらいのか」というテーマですが、本題に入る前に、自己紹介を兼ねて、お子さんのことをお話し下さい。

中川 五歳の娘が一人。産前産後六週間の産休をとり、最初は無認可のベビーホテル、その後は公立保育園に入れて働き続けています。

属 小学校六年と四年の男の子二人。妊娠六カ月までアメリカにいて、日本に帰って産みました。決心して子供を持ったので、「よし、これにつき合おう」と働くことはさておいて、子育てに専心しました。

安達 母親業が、この中で一番長い。(笑)結婚したら産まれちゃったという感じで

す。「妊娠して、目立つようになったらやめる」という不文律の会社に勤めていたので、あまり不思議とも思わず仕事はやめました。

子供は、上が二十三、下が二十一で、大体、答えが出ている感じ、あまりいい答えではないのですが……。 (笑)

「育児ノイローゼ」は、「うつ」の家族なので、初めから、なるかならないか待つていました。

司会 自分で？ すごい！

安達 それがなかったんです。(笑)

和田 上が、安達さんと同じで、二十三歳の娘で、下が十八歳の息子です。

「育児ノイローゼ」には、なりました。未だに回復していない気もするのね。つ

子育てが 好き

まり、私にとって子供を持ったことが、
一体何であったのか、今に至るもはつき
り結論が出ていない。子供を持ってよか
ったという感じが、ちっともないのです。
司会 一番深刻だ！（笑）

「母性愛」は事実か幻想か？

司会 お読みいただいた投稿から、「現
代の母親」が浮かびあがってきますが、
それをからめながら、みなさんの体験を
まじえて、いくつかの問題を洗っていき
たいと思います。

まず、瀬戸さんの文の中に、「母性愛
がないと認めるわけではないが、きわめ
て稀薄である」と、お父さんに言われる
一節がありますね。このお父さんのよう
に、一般的に、女が子供を産みさえすれ
ば、「母性愛」は自ら備っていて、何の
苦もなく子育てができるという幻想があ
る。でもこれらの投稿からは、そうじゃ
ないことが、はっきり出ています。この
人たちの場合は非常に特殊なものなのか、

和田 「義務感」でやってきただけで、
私自身は、ちっともいいことがなかった
気がします。子育ては、私の一番やりた
くなかったことかもしれません。（笑）

ふつうの女ならある程度うまく育ててい
けるのかどうか、そのへんのことから。
和田 私の年齢の人たちは、育児ノイロ
ーゼの状態にはなっていたかもしれない
が、それを口には出さなかったのね。投
稿を見ると、実に一般化して、平気でそ
れを言っていることに、時代の流れを感
じましたね。

安達 「母性愛」って、一般的じゃないと
思います。パスポートみたいに、政治か
ら日常生活まで、これを使えばすごく便
利がいいので、大切にされているのじゃ
ないかしら。

中川 私も、女には「母性愛」があるも
のだというのは、事実ではない気がしま

す。愛を感じるの、寝顔を見たときなんかですね。

投稿を読んで、私も育児ノイローゼと紙一重だったなと思いましたねえ。

司会 保育園に預けていらしたのに？

中川 いくら預けていても、「おむつがとれない」「泣きすぎるのでは」とか、きっかけが必ずあるんです。おむつは何カ月でとれるとか、いろんな情報があって、周りの子もおむつがとれたりすると、自分の育て方に疑問をもってきて、どんどん深みにはまっていく、という感じでしたね。

もっとも、子供が「尿路感染症」で泣き続けた時期があったんですが、私は、昼間は仕事しなくちゃいけないから、気



属さん

になっても、物理的に離れざるを得ない。どんなに心配しても、仕事に出ちゃえば忘れてしまう時間がある。それが良かったんだなあと、投稿を読んで最初に思いました。

司会 属さんは、そういう苦労は？

属 子供に恵まれたんですね。病気もせず、泣いたり夜通しどうかは、関係なかったな。

和田 それは大きい！ ふつうは、それで子育ての印象悪くしちゃうんだから。

(笑)

属 ただ、十分に遊んでやるとか、いろんなテークケアをしてはやりましたね。ちょっと手をかけると、子供のペースが早くできちゃう気がします。それも大人

がじゃまされるペースではなくて、大人の生活もうまく運び、子供もうまくそれに合せられるペースを作ってやるよう努力したわけです。

私は、「この年齢の子供たちと接するのは今だけじゃないから、とことんつき合おう」という気持ちで、芝生で転げ回ったり、泥んこ遊びや水遊びも一緒になって楽しみました。

ただ「母性愛」という言葉は、まよかしの気がして、好きじゃありません。子育てには、「育てる」部分と「世話をする」部分があって、世話をするとき嫌であるか嫌でないか、嫌なこともあまり嫌と思わずできるか、そのへんが世間で言う「母性愛」なんだと思いますね。

地域で、子育てに関する講座を六年ほどやっていますが、みんな、子供から、一分でも十分でも離れたい一心でやって来ますね。投稿にもあった「自分の時間がほしい」、あれは実感ですね。それでいて子供から離れて何の話ができるかと

いうと、「子育て」に尽きるわけ。(笑)
話し合いの一番の入り口は、子育ての不満、イライラですね。

親のノイローゼが子供にでる

中川 私の場合、離れたいという意識よりも、外で働いているから、家にいるときは、子供と徹底してつきあうことはしましたね。でも子供も敏感で、なかなかおむつがとれない。というのは、そこに「親に心配させることが、気をひくことだ」という気持ちがあったのでしょね。
安達 私のは、不思議な育児ノイローゼで、母親に出ずに、子供にノイローゼが出ちゃったのです。

私の方のノイローゼ症状は、非常にメラニコリックになってきたのと、しゃべるときにどもるようになったこと。一日中黙っていて、突然、電話がかかってきて話そうとすると、「あれ、あれ、あれ」と思うんだけど出てこないのね。いわばノイローゼの前駆症状だけど、子供には

何十年たっても、この入り口は変らないだろうなという気がします。

もっとはっきり出てきて、めたらやったら吐くようになったわけ。それもふつうじゃなく、一間くらいお乳がピューッと飛ぶわけです。吐くときは鼻からも出て「ヒュー」って、けいれんみたいになるの。「てんかん」か何かあるんじゃないかと医者に見せても、まったくちがうって言うし……。

ある時期がきたら治まったんですが、あれは何だろう、何だろうとずっと思っていたんですが、今にして思えば、私に出なかったノイローゼが、そっちで解決したんだなあ……。

和田 小さいときというのは、母と子は心理的に一体なのね。母親が機嫌悪いと、向こうも必ず機嫌悪くなるわけ。だから、意識してなくても、母親がノイローゼ状

態なら、必ず子供に反映すると思う。

安達 赤ん坊がミルク飲むでしょ、「吐くぞ、吐くぞ」と思っているわけ。吐いてももらいたくないのか、吐くのを待っているのかわからない。ベエーッと吐くと、「あっ、やっぱり吐いた」と、どこか安心するみたいない……。

投稿を読んでいて、「私は子供が嫌いだ」と言えるのは、いいなあと思う。「子育てに自分が合っていない」とか「子供から離れたい」とか、そういう情報が流れるのはとてもいいことだと思う。それは、そんなはずはないと思うので、本人も気がつかない場合があるのね。

「うっかりすると、赤ちゃんというのは母親一人の人生を、とりこにしちゃうから、へばりつかれないように気をつけなさい」とか、「人の同情をひくために、上手な泣き声をたてるから、ひっかかるなよ」とか(笑)、「笑ったからといって、ほいほいするんじゃないよ。ああいう風に神様が作っているわけで、特別あ

んたを好きなわけじゃない」とか、そういう情報がいっぱい増えると、間違いがないと思う。女はみんな聖母マリア様になると思われている情報ばかりだから……。

私なんかでも、「子供大嫌い」、「一人になりたい」、「何々がしたい」とか自分の欲望をはっきり自覚していたら、あんな形で、子供に一年近くも吐き続けさせることはなかったと思うんですね。

もう一つ私がバカだったのは、常識にも「迷信」を、まるごとのんじやったわけ。猫だって子を産んで育てるとか、山手線に乗ってる人みんな、誰かに産んで、育ててもらったんだから、「私に限ってできないはずはない」とかね。

実際に自分のお産になると、猫よりヘタ。(笑)「あつ、こんなはずじゃない」と思った。

一つよかったのは、山手線に乗っている人の産まれ方にもいろいろあるってこと、個性があるということに、割合早く

気がついたのが救いですね。

司会 それは、何で気がつかれたの？

安達 お産のときが、むちゃくちゃでした。医者が、「変だなあ、変だなあ」と言うわけ、まるで異人種のお産みたいに。

司会 なかなか産まれなかったんですね。

安達 そうです。医者は3kgぐらいになっていと言ったのに4kgあったし、破水もしないのに羊水がないとか、(笑)とにかくむちゃくちゃだったらしいの。

それで「あんたって変ってるね」ですもの。そういうところまで、私は責任がもてない！(爆笑)

そのあとも、その病院へ行くと、「あつ、変った奥さんが来た」。どこが変わっているのかと思うとみっともなくて……。

和田 いろんなことがあるわけですね。

安達 そう。なのに、いろんなことがあるといことが、どこにも書いてないわけ。お産なんか、「○○期がきて、△△期がきて、こうなって」だし。赤ちゃんにもいろんな赤ちゃんがいて、むしろ隣

の赤ちゃんと自分の赤ちゃんと同じだったら、おかしいですよ！

そういう情報を、女同士話し合えると、「育児ノイローゼ」は、少なくなるのじゃないかしら。

それから、私の家庭にも、大学三年と四年の子供がいるけれど、その下はいませんから、二人とも、一回も赤ちゃんをいじったことがない。赤ちゃんといえば、ひと様から、せいぜい三分ほど借りた経験ぐらい。(笑)泣けばお母さんに返す。

「育児ノイローゼ予備軍」は、量産されてますね。

属 今二十三、四の人は、おっしゃったような、赤ちゃんに触ったこともないような時期を通して、娘から、妻、母になる人が多いですよ。 「育児ノイローゼ予備軍」になるのは、まったくその通り。しかも悪いことに、実家のお母さんが手を出しやすい。自分でかかえて苦しむ前に、「泣いたら、ハイ」と、もう一つ上のお母さんに渡してしまう。ところが、

一人目から大変になる。

安達 お母さんが亡くなったたり……。

和田 死なないまでも、病気になることはあり得るでしょ、その年代の人は。

属 上の子は外へ出たがる、下の子は抱

「母性愛」の正体を洗う

和田 みなさんの話を聞いてても思うけど、母性愛についての問題が混同されていると思う。十年ぐらい、ずっと考えてみて……私はしつこいから……ようやくわかったのは、「母性愛」というのは、子供が可愛いと思う情動です。自分の子供が良く見える、冷静に見られないというのが、「母性愛」です。

だけでも、「子供を育てる能力」は、

えなきやいけない。おむつと遊び着の洗濯で大変だ、みたいな状況になりますよね。じゃあ、人に押しつけられるかという、だめ。そのへんで、どう性根をすえるかが、問題ですね。

「母性愛」とは別物なのに、母性愛があれば子供をうまく育てられるみたいな考え方があ。これが大問題なんです。母性愛があるためにうまく育てられない場合だってあるのに。原初的な意味での母性愛は、女の人みんなが持っている、最初の子供のときは出なくても、二度目、三度目には、大抵出ると私は思う。

私が一番悩んだのは、「社会は子供を

安達さん

欲してないのではないか」ということでした。私は、子供を産んで失職したの。私自身の能力を発揮することができなくなっちゃうわけ。まるで罰を受けてるような感じ。だから、子供を産んだ女に、こんなひどい扱いをするのは、社会が子供を欲してないからだろうと考えたのです。

安達 「母性愛」って讃えられるでしょ？ 世の中は子供は望んでないが、労働力は必要としているから、子供を労働力に変える一番安上がりな方法は、母性愛を讃えて、お母さんに育ててもらって、使えるようになったとき吸い上げることだから、「母は美しい」、「女は弱し、されど母は……」とおだてたり、能力のことも、「テクニク」といわず「愛」だと、意図的な混乱がある気がしますね。

和田 今ほど、女の役割が、子育てだけになってしまった時代はないのね。母親が育児ノイローゼになる原因の一つは、育児だけでは自分の存在理由がつかめな

い、という人が増えているということではないだろうか。

司会 存在理由というと？

和田 子供を育てるということだけでは、女性の人生の存在理由にならないと思うの、今も昔も。

属 それは疑問だな。はっきりと私は仕事をどうしてもやりたいという人は、非常に少ない。「私は、どんな様の稼ぎで子供だけを育てて、小ぎれいにして」という若いお母さんが、すごく多いじゃない。

和田 それは今、女がそうしていられる境遇にあるということなんです。昔だったら、その人自身の意識に関りなく、子育てだけで暮すことはできなかった。今の人は選べるから、子育てだけに自分の生活を限っちゃう。

属 そういう人に限って、ノイローゼに陥っていくんですね。ということは、子供がいる、いないより、「自分が何をしたいか」という点がはっきりしていない

ということなのでしょうね。

和田 そう。要するに子育てでノイローゼになる人は、私も含めて、自分の人生を選ぶことに失敗してる人なんだと思うのよ。

なぜなる育児ノイローゼ

和田 自分のやってきたことが挫折してしまったとか、子育てに対して、属さんのようにはっきり覚悟の決められない人間が、育児ノイローゼになるんだと思う。
司会 覚悟を決められる人というのは？
和田 その人はつまりその人なりに人生に成功してる、ということなの。

司会 子育てということの中に、成功感があるというわけですね。



中川さん

属 失敗していても、ノイローゼにはならない人だっていますよ！ だから、どうそれを克服するかしないかの問題じゃない？

司会 そこらへん、詰めて下さい。

和田 そう。

一同 そうかなあ。

安達 私はそれより、「結婚幻想」「育児幻想」の問題だと思いますね。

例えば私は、大学卒業から結婚まで一年しかないんです。するとおかしなことに、受験時代の癖が子育てにも残ってるんです。参考書を買ってきて、資料を集めてレポートを出すと、成績が返ってき

ますよね。(笑) 子育ては、どうしてもそう
ういかない。これだけちゃんとやって、
レポートなら「秀」ぐらいつくはずなの
に、何だか洗濯物ばかりたまって、とい
う感じ。大学からすぐ結婚生活に入った
人はそうだと思う。

高卒の人も、職場でいい男性見つけて
アンアン・ノンノに載っているような部
屋に住んどか、そっちから結婚生活に
入ると、「どうも私の理想とちがう!」

(笑)

和田 それ、それ、それが私の言う「失
敗感」なの。

中川 逆に言えば、理想がある程度はっ
きりしていて、それに照した今の自分に
対する失敗感、ということですね。

和田 はっきりかどうかは別として、「結
婚したら、何でも幸福になれる」という
幻想かもしれないし、私のように他に何
かやりたいことがあった場合もあります
が、とにかく子供を持ったことによって、
何らかの意味で失敗したという感じがあ

ると、そこからは逃げだしたくなるでし
ょうね。

三十九歳で子供を産んだ朝日新聞の佐
藤洋子さんの話を聞いて、なるほどと思
ったのは、彼女は子供を産む以前に、も
はや職業人として成功してしまっただけ
だから、子供を産んだことは嬉しいだけ
で、これはノイローゼになりようがない。
一同 それはそうだ!

和田 だから、私がノイローゼになっ
ちゃったというのは、結局「失敗感」だと
思う。しまったことをしたと……。

司会 失敗感というのはどんなふうな感
じ?

和田 とにかく、子供に関心が持てない。
その関心が持てないことに罪悪感がある
のね。だから子供をプールや図書館に連
れて行ったり、あらゆるいいことをして
やっても、自分は全然楽しくないの。
属 婦人学級をやってきて、みんなの間
で出た結論は、早く結婚しても、子供を
産むのは三十近くになってやりたいことを

やった後産むのが一番いい、精神的に落
ち着いて子供と向かい合うことができる
し、ちょっとしたことにもうるうるしな
いし、それぐらいになると結婚後の友だ
ちもできるし、ということになったわけ
です。

中川 二十代って、まだまだ自分の可能
性を信じてますよね。なのに子供ができ
ると、その願望が果されない。

和田 例えば、ごく低次元の「遊びに行
きたい」という願望かもしれないが、と
にかく自由がきかないことに腹が立つち
やう。

中川 三十ぐらいになると、自分の限界
がみえてくる。「どうせ私はこんなもの
だ」(笑)

安達 自分の中から出てくるあきらめは、
いいんですよ。人為的に思わされちゃ
うと、思わせた子供は敵になる!

和田 そうだと思う。私なんてつくづく
子供のために浪費した十年は何だったの
かと、今でも思っていますよ。

子供は笑って、「ママ、我々はこの通りぴんぴん育ったのだから、いいではないか」って言うけれど……。

司会 しつこいなあ。(笑)

和田 「損した」ってやつよ。子供を産んで私は絶対損失を受けた、という感じが強いわけ。今さら後悔してもしようがないのに、挫折を子供のせいにするのね、子供は、いい面の皮なわけ。だって、子供がいなかったらちゃんとやったかという、それは分からない。

まあ私の場合でも、社会一般の考えに踊らされて、自分の本当にしたいことを放棄しちゃったわけで、女の人の社会的な仕事は「育児」で、職業は育児の片手間にやれという今の社会的な位置づけが、育児ノイローゼの多発する大きな原因でしょうね。

女に男女平等の教育を与えておいて、社会的に適応できるようにしておきながら、最終的にそういう人に子育てだけ押しつけているのが、そもそも無理がある。

その上、子育ては「能力主義」で、お母さんの能力があれば子供はよく育つし、能力がなければだめだ、という言われ方をして、しかも他に社会的な居場所がない。これでは女の人の気持が、非常にゆ

ものをいう夫の存在

安達 育児ノイローゼのような状態に陥ったとき、夫の存在が救いになったこと、ありましたね。

毎日毎日、何回吐いて何CCおさまったかという、引き算とたし算ばかりしてたわけですね。自分でもゾッとしたんだけど、私より遅れて赤ちゃんを産んだ友だちが、哺乳びんを斜めにしてミルクを飲ましていて、「もう飲まないわ」と言った時に、「あつ、二五CC飲ましたわね」といったのね。(笑) 友人がびんを置いてみて、「あつ、本当に二五CCだ」って驚くんですね。斜めになっていてもわかるわけなのよ。

和田 それぐらい熱心にやるから、子供

れ動いちゃうんじゃないかな？

安達 私も電話相談で、育児ノイローゼをなくすにはと聞かれると、「お母さんが育てないようにすればいいんです」って答えるの。(爆笑)

がノイローゼになる。(笑)

安達 自己表現がそこにしかないってやっていると、毎日毎日夫が帰ってくる、彼がお手洗いへ行ったり、お風呂へ行ったり、着がえたりするのにについて回って、たし算引き算の報告するわけですよ。え。「たぶん一回目は一五〇飲んだと思うけど、吐いたから四五しか残らなかったと思うわ」とかね。

ところがある日突然、「あの子がね、あの子がね」と言っていたのが、亭主に向かって、「あなたのお嬢様がさ」って言っちゃったんですね。そのときに初めて、「そうだ、私の子だけじゃなくてこの人の娘なんだ」って、はっと気がつい

たのね。

もう一つは、体重が増えない、増えないって騒いでいたの。そしたら亭主がね、「俺達の産んだ子は、ゾウの子でもブタの子でもない人間の子供なのに、どうしてあなたは、そう毎日毎日太らせようとばかりするんだ」と言っただけ。それが救いの一つになりました。

和田 お宅のダンナ、うまいこと言う！うちのもいいこと言ったことある。

彼はニワトリ飼うのをアルバイトにしていたんだけど、ニワトリも最初の卵は踏みつぶしたり、食べちゃったりするんですって。だからね、私がキュウキュウ言ってるのは最初だからだよって。まだ母親になりきれないんだって。私、それでずい分気が楽になった覚えがあるんですよ。

安達 でも女ってこんなものだって、期待を持ってのしかかるお父さんも、いっぱいいますよ。

中川 共働きでもね、夫から、両方うま

くやらなきゃダメだって言われている人、ずい分いますよね。それやっていくと、どんどん追いつめられていく。

私の場合は、私がいけないときは父親にすべて任せちゃいました。離乳食なんて夫の方がうまいくらい。やっぱり両方で協力して育てるっていうのがないとねえ。

和田 でも奥さんが専業主婦の場合、できないいわね。ダンナがきつと、「お前はうちにいるんだから……」

安達 私は、「専業主婦っていうのは、父子関係の妨害者だ」って言うんです。専業主婦から撤回を迫られることあるんですけど……。(笑)

属 私は専業主婦だから、言いますとね、確かに、父親と子供の間を遠ざけている

のかなあっていう気持が、ときにはしますね。

子供が少し大きくなったときに、つれあいから、「あの子のここが悪いのはお前のせいだ」とか「病気になるたのもお前のせいだ」、ケガさせても私のせいだという攻撃があったことがあるんです。

そのとき、考えたあげくに、「ケガして痛いのは私じゃないし、熱が出るのも私じゃない。全然別の人がなってるんだ」ということを、どうしてあなたは理解できないの」と、ばつちり彼に言った。

「だって、お前は家の中で子供を一日中見てるじゃないか」。「見てはいるけど、病気になるせよう、ケガをさせようと思ってる親はない。あなたは子供が心配



和田さん

でそう言うのだろうけど、その心配は共通なはずなんだ、それを母親のせいだときめつけるのはおかしい！」と、そこで最大のケンカを徹底的にやりましてね。

司会 自分ばかりの責任じゃないんだっていうのに気づいたきっかけは、ありますか？

属 別にきっかけはないんだけど、子供は共同して作ったわけでしょ。それを片方だけ、いいだの悪いだのって言われるのは、どう考えてもおかしい。

和田 父親の遺伝的責任ってこともあるしね。(笑)

安達 共同で子育てするにも、成熟した男と女がやらないと、未成熟の男を共同作業に誘いこむのは大変ですよ。

和田 それから、父親が育児の細かいことにかかり出したでしょ、今。まったく母親と同じ次元で。

安達 お母さんが二人いるみたい。(笑)
和田 一緒になって騒ぎ出すという……。
属 いろんな意味で、性別の役割分担で

ない、子育ての役割分担ってあると思う。

私なんか、細かいことは父親に言わないですよ。ただ上の子が六年生で、思春期になりかけなので、ちょっとややこしいわけ。人間はどうやって生きていくのがいんだろうとか、ゆれ動いているのが、見ていてわかるんですけど、私がいくらアドバイスしても、女という立場でのアドバイスでしかないんですね。だから父親に「子供がこんなこと言ってたよ」って、ちょっと言っておくんです。

期待される「母親像」

和田 「育児ノイローゼ」になっちゃうのは、「うまくやろう」と思う点が、やっぱあるのね。「何とかして、子供をちゃんと育てなきゃならん」という気が。それと自分の利害関係が複雑に絡みあって出てくるわけで、しかも現代では親が子供を私物化しているように見えながら、子供から受ける直接のメリットはないでしょ。昔みたいに子供を売りとばすこと

そうすると、その週末に時間を作って、「おい、散歩に行こう」とか言って自転車で連れ出して、いろんな話をしてくるらしいですね。子供もさっぱりした顔で帰ってくる。作務的にある時間をつくるのは大切だなと思います。

安達 そのし・か・け・み・たいなものを、夫も妻にしかけてくれるといいですね。

属 そうなんです。

安達 「こう言っていたけど、次は君の出番だよ」みたいだね。

もできないし、子供の労働力から搾取することもない。

今、社会が非常に速く動いてきているから、社会の動きに人間の意識が追いつけない面とか、いいも悪いもまきこまれてる面が混合して、「育児ノイローゼ」に現れてくるのだと思う。

安達 「いい子」というのが、社会全体からすぐ要求されてるんで、それに伴

って「いい母」とは何かというと、女として「いい子」を育てることだ、ということになるんですね。

こんな母親がいたんです。二人子供がいて、姉はすごい不良で、妹は優秀なわけ。このお母さんが面接で言うんですね。「何でお姉ちゃんは、私をいい母親にしてくれないのか、妹はいい母親にしてくれるのに……」と。

母という成績表で、無意識にいい点がとりたいわけですね。そして、いい点をとらしてくれる子供がかわいくなる。

和田 母親が子供によって評価される面が大きいからね。

安達 今の子供って死なないでしょ？だからミスが許されない。うちのおばあちゃんなんか、よくおこたにあたりながら、「あそこの家は、結局八人生れたけど、五人残ったかなあ」なんて言っていた。(笑)今はそんなバカなことではなくて、二人産んだら二人育て上げなくちゃならない。不幸にして亡くなったら、お気の

毒ということはあっても、社会的に落ちこぼれたり、犯罪者になったら、これは死ぬより大変ですね。だから子育てが、すごい「過緊張」になっている。

属 しかし、そんなに脅迫めいたものになるのなら、産まなきゃいいという結論になりませんか。

和田 そうなの、産まなきゃよかったと思う、本当に！

属 それだったら、本当に悲しいと思うんだなあ。私は、結婚五年目に決心して子供を持ったので、子供はやっぱり大事だと思うのね。

和田 決心したので、あなたの場合よかったのね。私は決心しなから。

現在、女は子供を産んでなきゃ一人前じゃないみたいに扱われるでしょ。私もあの時子供を産もうと考えた中に、そういう気持があったと思う。結婚したのも、どうもそうだったと思うの。結婚してないってことが、今よりもっと差別された時代だから。私だって結婚できるんです

よ、というところを見せたかったんだと思う。それで結婚して、今度は子供を産んでないことで差別されるとなれば、産んでやろうかというようなやり方。それがやっぱり間違いのものなですよ。

ともかく子育てというのは、そのときは他の何もできないほど大変なんだってことは、もっと喧伝されなければならぬいし、ちょっと気分的に子供がほしいとか、人の赤ちゃんを見てかわいいたか、女は子供を産むべきだとか、その程度で産むべきではないですね。あまりにも、今は大変ですよ。子供二人育てるということは、経済的にも、女性の年月を無駄にする点でも大事業だから、迷うような人なら、やめた方がいいわね。

司会 属さんのように覚悟を決めた時点で、産むべきなのかなあ。

(まとめ・山本雅美)

投稿ホットライン——三度のメシより本が好き

生きてます 活字人間

——目の鱗、落としてますか？

「担 癌 者」

石井 仁著

奈良県生駒郡 西尾 克子

肺癌に冒された著者が医師であるだけに、この闘病記は恐ろしいほどの 力があって、一度でも癌で入院したことのある人にとって、身につまされる記録である。担当医との接触感のもどかしさ、

意志の疎通の少なさは、患者の誰もが実感することなのだが、著者が医師であり、知識もあるにもかかわらず、やはり担当医との間ではつきりしない態度をとり続けられることに対して、日本人は表現

能力が乏しく、非社交的な国民だからなのであると書いている。医師は何故もっと率直に、知識のある人ならある人なりに、知識のない人になら噛み砕いて、治療方法を説明し分らせてくれないのだろう。投薬についても、何の説明もないままに沢山の薬を飲ませようとする。著者のいうように担癌者とそうでない人との間には、ものすごい隔りがあって、癌に一度でも冒された人は常時、死と対面していなければならないといっ

てよい。五年経過したとしてもだ。一度手術して退院した者は決して治癒とはいわない。寛解という。こわれた硝子をつなぎあわせたというだけで、決して元通りになっただけではない。爆弾を体の中に抱えているのと同じで癌細胞はいつか、どこかで、また転移増殖を始める可能性に満ちている。

張りつめた緊張感のある文、死を前にして全ての虚飾を取り払った、簡潔で直截な文章。レバノンやイラン、イラクで毎日のように人が死に、交通事故でもまた何人かが毎日死んでいる。それも健康な人が。癌で死ななくても、人はいつか他の病気で死ぬのだし、少し早いか遅いかだけの違いである。

テレビ・新聞でみる他人の死は、人々にとって皮膚の外でおこるできことにすぎない。病気になる

みると、健康な日常生活を送ることの重みがやっとわかる。生きることも難しいが、うまく死ぬのも

また大層難しいと思う。

新潮社 九八〇円

「電話の中の思春期」

安達倭雅子 著

東京都新宿区 山本 彩子

現場からの報告——とくに、人間生活の隠された部分のコンサルティングにたずさわっている人たちのルポは、読んでがっかりするときがある。事実の面白さ？ によりかかった、安手な作品にぶつかることが多いからだ。

そんな中で、安達さんのこの一冊は、出色の作品である。

子ども一一〇番の相談員になって五年。

小学校四年の日子の、どうした

らカッコいいC男を独占できるかという相談。「両想い」(相思相愛のこと)になりたい中学生の相談。そろそろやらないといけないんじゃないかと焦っている高三男子の相談。

ふつうの相談員がレポートすれば、子供たちの性はそんなに乱れているのか——とひんしゆくく目で見られるか、好奇の目でみられるに違いない内容が、安達さんの筆にかかると、よくも、あしくも

現代を生きる子供たちの声が、そのまま生き生きと私たちに ってくる。著者が、自分の生と重ね合わせて、深い眼差で子供たちの生を見据えているからだだろう。「ウリ」(売春)をやっている女子高生生の相談を受けたあと、著者は十七年間の専業主婦としての生活を振り返る。売春をめぐる二人の娘たちと交わした会話を辿ってみる。妻たちをドキッとさせるような省察が、そこにある。

電話相談というような形でしか人間が人間と関りあえない現代の人間砂漠。親と子の、きょうだいの、友人の関りはどうなっているのか、としみじみ考えてしまう。生きて、動いている現場にいる人ではなければ書けない面白さと、その背後を見据える視線の鋭さが読者をひきこむ、強烈な個性にみた一冊だ。

ユック舎発行

発売元批評社 一二〇〇円



「母は枯葉剤を浴びた」

中村 梧郎著

神奈川県川崎市 田中 恵子

人がある本に接するそのアプロ
ーチの仕方は当然さまざまである。
私が偶然にも「母は枯葉剤を浴び
た」を手にし、それこそ一気に読
み終えたのは、私自身の青春が、
この枯葉剤を一〇年間の長さに渡
り浴びせられたベトナム戦争と、
深く重なっていたからだ。

中学、高校の長きに渡り、自分
は何故学ばねばならないかとんと
わからず、二〇年も前の今よりの
んびりした受験体制の中でも、私
は苦しんだ。高校のむこうに大学
がある。生きることのすべてに疑
問があり懷疑があるのに、受験な

のだ。マンモスの私立大学生とな
って私はもっと苦しみ、虚無的に
なった。もうどうでも良いと思っ
た時に「ベトナム戦争」に出会っ
た。人生に真実があり、人間の歴
史にも進歩と光明がある。このこ
とがわかるまでに（今でも時々わ
からなくなるのだが）私は何度ベ
トナムの人々の歴史の中から学ば
ねばならなかったであろう。

カンパもした。デモにも行った。
そして長い長い闘いの後の勝利。
そして一〇年以上がたってしまっ
た。米軍による枯葉剤作戦はベトナ
ムの広大なジャングルを砂漠化し、

未だに動植物も死に絶えた死の世界に
してしまった。そしてこの悲
劇は現在進行しつつある事態とし
て、ベトナムの人々を苦しめてい
る。出産異常・ガン・皮膚炎。若
い時もしベトナムを一度でも自分
のこととして考えたことのある人
に是非一読をおすすめしたい。現
在のベトナムを知るために。

そしてもし貴方がベトナム戦争

に関心がない世代の人ならば、こ
のままゆけば私達の未来が出会う
であろう事態、人類が、人類の生
み出してきたモノによっておびや
かされ、現在の日本を含む「先進
諸国」の出産異常率の高さも、原
因不明の難病の多発も「ヒトと環
境の絶滅」の実験場となったベト
ナムの報告から、きつと多くのこ
とを学ばれるであろう。

新潮社 五二〇円

「あたりまえの女たちの出発」

富士谷あつ子著

東京都新宿区 辻浦知津代

「兼業主婦」という言葉は、いわ
ゆる専業主婦に対して用いられた

一種のパロディ風表現であり、こ
れからは仕事も家事もこなせる兼
業主婦こそごく普通のあたりまえ

の女性なのだ、というのがこの本
の主張である。

著者の富士谷あつ子さんも勿論
兼業主婦。

お子さんも二人ある。

仕事からさまざまなケースの女性との出会いも多く、本書ではこうした人達の実例を挙げながら、現在女性をとりまく日本事情や、最近家事が省略化と芸術化に二極分解されつつある危険について、またこれから社会に出ようとする若い女性には職業生活地図と家庭生活地図の二つを眺めることをすすめる、人生なかばから社会参加を望んでいる女性にはまずボランティアな非稼働活動への参加をすすめるなど、非常にキメ細かくユーモラスに話題を巧みに転換させながら最後まで楽しく読ませる筆づかいが、これはとても、あたりまえの女では書けないみごとな才女といえよう。

たしかに最近の情勢をみると、女性の労働人口は増加の一方をたどり、しかも既婚女性の就業率は未婚女性との割合をとくに逆転

させ、今はおよそ七対三になっているという。

私も兼業主婦の一人でありその経歴も古いわりに、いまだ家事と仕事のはざまをウロウロとわり切れない尻尾をひきずっているのだが、この本を読んで、現在社会の第一線で男性と肩を並べ実力を発揮している女性達も、そのすべり出しは決して順調なものではなく、激しい気力と使命感にもえて新しい道をきり拓いてきたということ、共通しているのはその根底

となる生活をおろそかにしなかったこと、それが家族の理解協力にもつながっていることに深い感銘を覚えた。またかつて女性達の社会進出をかたく拒み「仕事こそ男の城」と、固定した性別役割観にとらわれていた中年男性の多くが、今、時代の急激な変化に適

応しきれず、職場や家庭において次第にドロップアウトしつつある現状を見ると、家事と仕事のバランスを保ちながら生きてゆける女性こそこれからの社会の担い手となる、という著者の意見に心から共鳴した。生きて働くことの意義を改めて考えさせられた一冊である。

ミネルヴァ書房

一五〇〇円



『女性学／緑のゼミナール』

映画評論家、林冬子、上野たま子、南俊子の三人が作った『女の目で見える会』主催の講座と映画鑑賞の催しです。

・日時／六月八日（金）午後九日（土）正午まで

・場所／秩父・農園ホテル
Ⅷ〇四九四―二二二〇〇

・講師／中山千夏・矢崎友英の狭間組、加藤康一、藤本敏夫（女性学ことはじめ／他）

映画はアメリカ映画、日本記録映画、他短編。

・費用二、六〇〇円（交通費、宿泊費、二食込み）

・お申込は至急に、東京都港区南青山二一八―二七三〇一、女の目で見える会

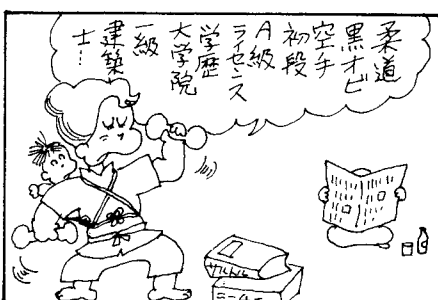
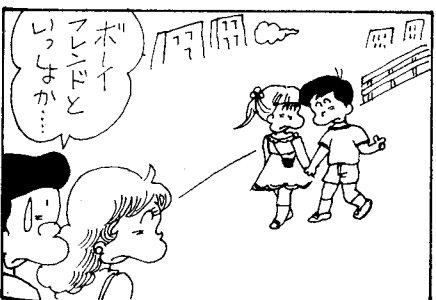
Ⅷ〇三―四七八―七二七六

笑止はど 笑止はど

♥ 親離れ ♥

♥ 免許マニア ♥

東田マニア



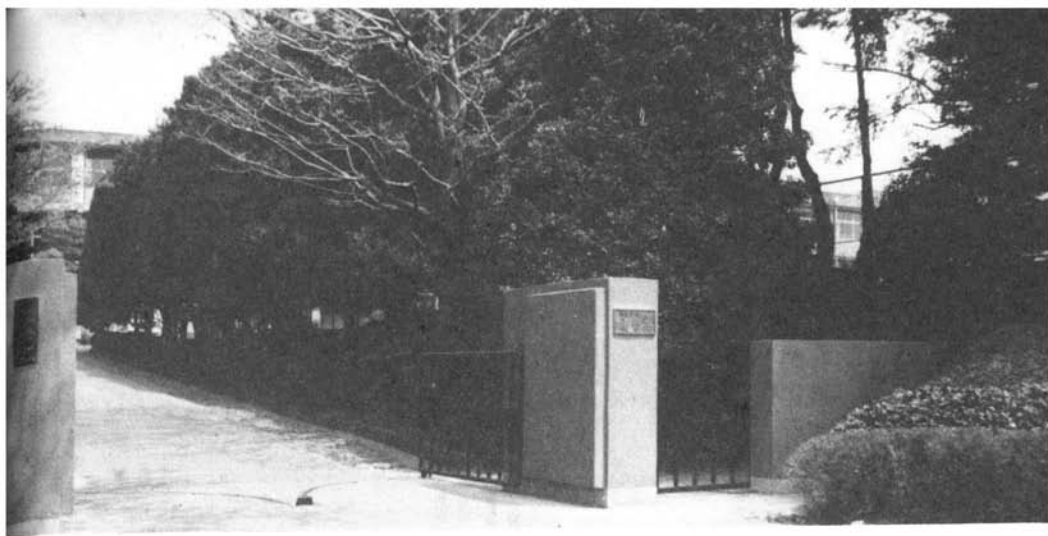
私立高校あらかると

真の

人間教育をめざす

橘女子高等学校（横浜・鶴見）

文・早川 裕子
写真・長野早紀子



橘学苑（幼稚園、中学、高校が併設）

入試は作文と面接だけ

この校長は土光敏夫氏。そう、あの行革の土光さんである。今は忙しくて、行事のときぐらいしか姿を見せず、校長室の机もさみしげなたたずまいである。

その校長室に祭壇がまつてあるのは、この学校の創立者である土光登美さん（敏夫氏の母上）が法華経信者であったからだが、学校では宗教教育は一切行なっていない。

創立後四十二年、この学校が行なってきた勇氣ある実践の一つに、まず入試から教科テストを一掃し、作文と面接だけにしたことがある。

五十一年度までは、この学校でも国・数・英のペーパーテストの合計点と面接の結果の良い者から順に合格者を決めていたのだが、高校入学希望者の自然増につれて、最低合格点が年ごとに上がってきた。普通の学校ならば、それをレベル

アップとして喜ぶのだが、この学校は悲しんだのである。

「教科テストの合計点で足切りをする入試方法は、橘のめざしている教育と矛盾すると考えたからです。教科成績の良しあしと人間の価値とは、ほとんど関係がありません。橘は成績の良い生徒だけを相手に教育しようとしている学校ではなく、さまざまな個性、能力の人達が一緒になって教えあい、学びあうような学校をめざしているからです」

その作文も、面接の資料として使うだけで、うまい、へたは何ら問題にしない。最も重視するのは面接で、一人ひとりにたっぷり時間をかけて、高校へ入ったら何かをやってみようと思っている人間かどうかを確かめる。

高校時代は、人間の成長にとって最も大切な時期だから、生き生きと個性を伸ばすような教育がしたいからという。他人を押しつけても自分だけは勝ち残るといった競争原理の上に立った教育はとて



農作業は土作りから

も考えられないと……。

ところがこの学校が入試方法を変えてからというもの、各中学から「落ちこぼれ」的な子どもばかり送り込まれてくるようになったのである。制服の胸についた橋のマークを、生徒たちは外ではつい隠したがるという。

しかし校内で見た彼女たちは、何と明るく伸び伸びしていることか——。劣等感のかたまりのようになった生徒たちの一人ひとりを、この学校はどうやってよみがえらせていくのだろうか。

橋の名物「生活の時間」

運動場の隣にひらけた高台には、野菜畑や花壇や池などが作っており、全校十五クラスが二・三面ずつの畑を受け持つのに十分の広さだ。

その一画で暖かい日差しを浴び、二年生の生徒たちが体育着に長ぐつばきで、スコップやくわをふるって土を耕してい

る。みんな明るい表情で、大声をはりあげながら……。三人の男女の先生たち（担任と体育と園芸の先生）も、畑仕事に大わらわ。生徒を苗字ではなく名前前で呼びすてにして、汗だくで大声をはりあげ、とびまわっている。

みみずやとかげが出たといっちは騒ぎ、野びるを見つけては今夜のおかずにと取ったりしながら、耕し終ると種をまく。大根、小松菜、とうもろこしなど……。ホースで水をまく時には、キャーキャーと水のかけっこに発展する一幕もあるが、それを見守る副校長の森本先生の眼は、「もう、遊び半分なんですから……。」と笑いながら、温かくやさしい。

これは、この学校が四年前から始めた「生活の時間」の一コマである。各学年週に一度、四時間をぶっ通して取り組んでいる。育てた野菜を収穫して、料理して食べるのも、もちろん生活の時間の活動だ。

「受験体制が強くなればなるほど、学校



ここに枝豆を植えようね

は人間を育てる所からほど遠くなってしまう。自然にふれ、労働して、小さな生命を育てみつめながら、お互いが力を合せて、その中からおのずと生れてくる喜びや苦しみや解放を体験していく時に、私達はもっと身も心も健やかになれるのではないだろうか——こんな願いをこめて、五十五年にこの時間が生まれ、園芸や調理の他にも、行事の準備、弁論大会、焼もの、タマゴモザイク、雑巾作りなどがなされてきた。「もっと他クラスと交流したい」などの生徒の要望もあるが、「もしこの時間がなかったら、私たちは自然に伸びなかったと思う」「グラスのまとまりが強くなる」「より人間らしいことを学ぶということの大切さを知った」など概して好評のようだ。デパートに勤めている卒業生は、こんなことを話していたという。

「売場の中に観葉植物があるけど、誰も水をやらない。私はそのフロア全部に水をやるのだけど、ある人に枯れたらまた

新しいのを入れれば良いのだからと言われた。だけどついに水をやってしまうのね。やはりこれ橘にいたからだと思う」

そして——変っていくのは生徒だけではないことに注目したい。この学校では先生もまた、教科さえ教えていけばいいのではない。「はじめのうちは先生方もおっくうがっているようですけど、そのうちにみんな農作業が好きになるんですよ」と森本先生。ある先生は学苑だよりにこう書いている。

「ともかく園芸での私は解放されていた。それは自然と接するという中で解放感もあるが、もう一つは私と彼女たちとの間に信頼関係が成り立っているということからもきている。それを作ってくれたのが生活の時間だった」

自然キャンプと学習旅行

最近では進学校などで修学旅行を行わない学校も増えているようだが、この



堆肥も作っている

学校では一・二年で行なうキャンプと三年の学習旅行を人間教育の原点としてとらえ、学校生活の中核にすえている。

自分で考え、自分で動くことを徹底するためには、文明の恩恵からはなれてみる必要があると、人の手が一切入っていない場所にテントをはって行なうキャン

プ——それは教師にも生徒にもハードな体験だが、生徒たちは次のような感想を残している。

「みんなが協力しあえば、どんな困難にであっても大丈夫だという勇気ができました。とても楽しくつらい合宿でした」

「班でのめめごとが多かったようです。

便利な生活から、急に慣れない生活に変わったため、ストレスがたまり、けんかや口論がおこりやすくなるのもしかたのないことでしょう。けれど、本当はみんながまんしなればならなかったのではないかと思います」

「私は自分だけの気持を理解するのではなく、人の気持も理解することを覚ええました」

三年生の学習旅行は、「自分で計画し、自分の足でたしかめる旅行」として、奈良・京都に関するテーマを国語、社会、美術、家庭の四教科の中から選ぶ。そして週二時間の「学習旅行選択」の時間を設けて生徒は四月から学び、十一月にグ

ループでコースを決めて旅行をし、二月にレポートを提出するというわけだ。

生徒はそれぞれに自分の目で何かを見てとり、はじめはいやだったが、やってよかった、というような感想を寄せている。

一方先生たちも、「教科間でもっと関連をもつて総合的にやれないかしら」とか、「来年はオリエンテーションの時間を長くして、十分に各教科の内容が理解できたところで選択するようにしたら」とか、「図書やスライド、映画などもっと資料を」「将来ワクを広げて京都や奈良に限らずやりたい」などと、どんどん夢をふくらませているのである。

全員がわかる授業をめざす

この学校がこうした体験学習を重視しているからといって、教科の授業や知的啓発をおろそかにしているわけでは決していない。必修時間数こそ、英語、数学、



先生の説明をきいてから畑へとび出す

理科などは他の高校よりかなり少なくなっているが、すでに勉強がわからなくなってしまう子どもたちを、絶望感

から救い出し、勉強の面白さをわからせていくために、先生たちは大変な努力をしている。

たとえば数学と英語は十年以上前から習熟度別授業で、一学年五クラスを、六・七クラスに分けて行なっている。最近文部省でも、落ちこぼれ対策としてか、習熟度別クラス編成を勧めており、その実践例も増えているが、それにつれて失敗してまたもとに戻した例なども耳にするようになった。それは恐らく、学力の高さと人間の価値を結びつけて考えがちな、その学校の雰囲気による所が大きいのでは、と思われる。その点橘学苑では、「人間を差別してはならない」という教育が徹底しているから、一番下のクラスの生徒も劣等感を持ったりしないそうだ。生徒の無気力、無感動症状に悩む、ある数学の先生は、一つの式を教える毎にテストをしたり、自分で問題をさがしてきてクラスで発表させるなど、「我々が出せるエネルギーの量が勝負のつもり」

と教科指導にも情熱を込める。

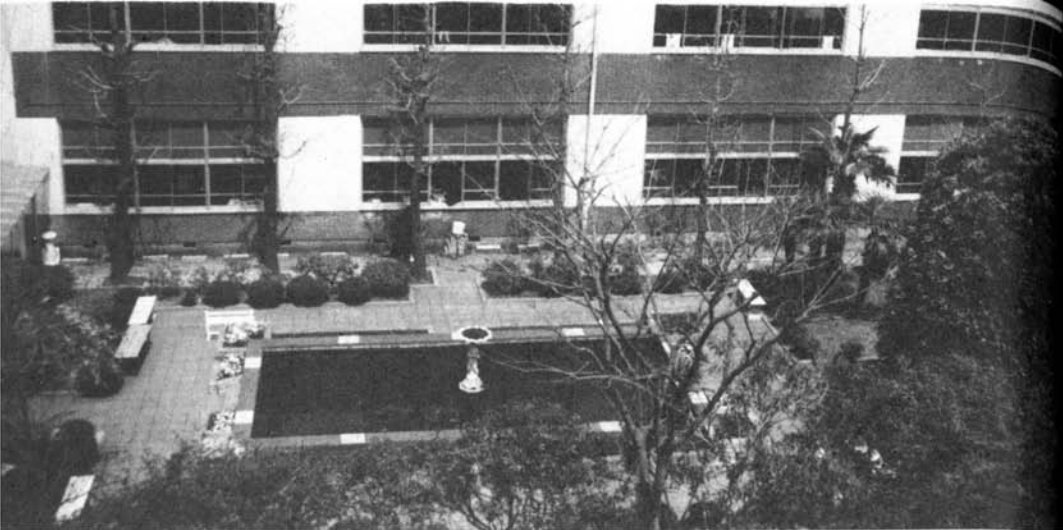
そして生徒たちはこんなふうに変っていく。

「橘では、勉強とは自分のためにするもので、人と競うためにするものではないと、強く感じさせてくれました。」

「橘の授業は一人ひとりを大切に丁寧に教えてくれます。他の学校と比べると進むのは遅いかもしれないけど、途中でわからなくなってしまう行けなくなるよりいいと思うのです」

「中学の頃は、どうせやってもわからない、めんどくさいという気持ちで、授業中も何も頭に入っていないませんでした。でもこの学苑では、数学・英語はわからなくなった所から始めてくれました。それだけでやる気が出て、私自身『わかるまでやる』という目標を立てがばりました」

「現在は、授業がわからなければわかるまで教えてもらえるので、劣等感など持つ必要もなくなりました。そのためか、



中庭

心にも余裕ができてきて、いつのまにか物を知る興味が持てる自分になり、学校が楽しくなってきました。私にとって勉強はわからないものであり、だから無駄だったはずの学校生活が、今は私の成長にかかせないものとなっていることを感じます」

人間の能力の数字化や序列化を嫌うこの学校には、いわゆる通知表はない。かわりに「学習の記録」として、各教科ごとに一〜二枚の紙に、個人の学習ぶりを言葉でこまかく書いて、学期末に渡ししている。

「成績だけでなくその前というか過程が大事でしょう。それがあの成績表には出ていました」とある卒業生。

そして三年になると、生徒たちは「自分史」と卒論の作成に取り組むのである。「卒論をやるようになってから毎日新聞を見るようになり、私もあと二年で選挙権がもらえるでしょう。その時この候補者はどういうことを考えて日本のために

動いているのかとかよく見ないとね。それに今の世の中のこわさを感じて、自分は今こんな所に生きてるんだなあと思うと、しっかりががんばらなくてはと思ったりして」

こうしてついていく力こそ、ほんとうの学力なのではないだろうか。

いい学校ってなんだろう

「でも、三年生の三学期まで旅行のレポートや、自分史や卒論の作成に追われていると、受験する人は忙しいですね」と、一般の高校三年生の生活を思いやりながらたずねると、

「ええ、まあそうです、この学校の子どもたちは、入れる所にいけばいいとわりきって呑気にやっていますから、精神的なあせりはあまりなさそうです」と森本先生。進学（専門学校も含め）と就職の割合は半々ぐらいだそうです。「大学入学のとき、受験勉強をものすごくやってき

た人と比べて心配だったけど、学苑で自分からやらなければということを学んだような気がする。それだけで充分やっていけると思います」とある卒業生は語っている。

生活指導もかなり自由にしていて、髪を染めている子がいても「それじゃまずいよ」という程度。

「風紀上どうかと思う生徒もいますが、卒業してからはキチンとするんですね。あのくらい在学中からやってくれたら」とおおらかに笑う副校長は、最近ではなかなか手ごわい生徒も入ってくるので、去年から生活の時間の一時間をもらって生徒たちとの対話の時間を設けているそうだ。担任は加わらず、子どもたちに言いたいことを一応全部言わせる。

この学校の生徒はガラが悪いと世間ではいわれているそうで、確かに見たところ、上品さのイメージではなく、みんな挨拶もせずに通っていく。

「生徒が挨拶したってびっくりする先生

もいるんですよ」

「今までいじめられてきた人は？」とたずねたら、三分の一くらいの子が手をあげたそうだ。また人前で話したことのない子がほとんどだという。

話したいけど話せなかった子たちが話せるようになったとき、教室の中は手のつけられないような喧噪ぶりを呈したり、自分を出せる場を見つけたうれしさに、集団としてのまとまりに気を使うことができなかったりして、先生方はまた新たな悩みに直面させられることも多い。しかし卒業していく生徒が、

「行事ひとつを大成させるためには、そこに人間の戦いがある。だからクラスによって泣いたり、騒いだりするのだと思う。でもいくらぶつかってもこれれずに地層みたいに積み重なって、次の糧になるのね」

と思ひ出を語り、それがまた先生たちを力づけたりにしているのだ。

この学校では教師と生徒との間の垣根

がない。

「職員室は小・中学校に比べて入りやすく、休み時間の憩いの場みたいで時間をつぶすのが楽しい」

と生徒たちは語り、「先生も自主的でなければ」と副校長は言う。中学部長の伏見先生は、採用の面接の際の「あなたの信じる通りにやって下さい」という言葉に魅せられてこの学苑にとびこみ、二十六年になる。

母親の大切さを考えて設立された学校なので、今もよき母親になることを目指すと副校長は言うが、「かわいいオクサン」志向の少女たち一般の風潮を嘆いて「少女よ、大志を抱け」とよびかける先生もある。教師の自主性を重んじる学校は、時代とともに創立時の理念がふくらんでいくのも宿命かもしれない。

ともあれ、こんな高校があるということとは、今日の日本の学校教育に打ちひしがれかけている子どもや親の胸に、希望の灯をともしてくるにちがいない。

サークル だより

横浜サークル便り

結成してはや五年。次女出産のため一年半ほどお休みした私は、おそるおそる横浜サークルに復帰したのですが、またすんなりと溶け込めることができませんでした。それはマジメが定評のわがサークルも、従来の井戸端会議的疊かさを失っていなかったためと思います。

活動は月一回の例会と、別にやはり月一回の分科会という形で定着したものの、いざ集まると皆それぞれの生活の場で関わっていること——PTA、反核運動講演会、映画会等——の話題と本の貸借で、あっという間に二時間が過ぎてしまいます。

分科会は当初のねらいからやずれてしまった感もありますが、今

は、ユング心理学に傾倒しているFさんを中心に、女の人間関係学の視点で学習会を行なっています。「わいふ」のたて続く変身ぶりにブツブツ文句を言うまえに、わいふは私たちひとりひとりの会員が支えているのだという認識で、まず「書こう」——なんて誰かが言い出したわけでもないのに、一挙にサークルのうち五人も投稿が載って（一八六号）、あらあらびっくり、あなたも（？）なんてそんなこともあります。

再就職にはいま一歩踏み出せぬまま、専業主婦であっても、地域との関り合いたいかなんでは社会的な力になり得るのではないかと自らに問いつつ、おやこ劇場に、PTAに、共同購入にと奔走する日々。しょせんは夫の手のひらのうえの自由でしかないわが身ではないか、と、ともすれば空しさに打

ちくだかれそうになりつつも幼な子の手をひいてサークルに出れば、そんなモヤモヤがまた話のきっかけになるのです。

月二回の集まりでも話し足りずに、回覧しているサークルノートを持ちわびることもあります。サークルノートには会合の時には見えない、思いがけないそれぞれの横顔がチラと見えたりして、うれしくなったりします。

新しい会員の参加をお待ちしています。次の例会は七月三日（火）一〇時から、横浜市婦人会館で行なう予定です。

◆連絡先

武田 三三三―五六二五
橋本 七五四―〇六二八
(橋本由紀子記)

投稿ホットライン——笑う門には福来たる

ファミリィ・イン・ブルー

知に働けば角が立つ。情に棹させば——ああしんど！

花の独身、頑張るゾー！

東京都新宿区 森本 弘子

久々にかけて実家への電話、母が出るなり開口一番、「あら、あんた、丁度よかったワ、連絡しようと思ってたんだけど、今度の日曜日ハイキングに出掛けることになったの。またお父様の面倒みてくれる？ うん、食事作ってくればいいから、ね」

実家と申しまして、私、花の独身、未だWifeになれずにいるわいふ愛読者です。四

半世紀を生きてきてまだ親とひっついてるのはオカシイ！ という主張を繰り返して、親友が二年間アメリカに留学するというチャンスを逃がさず、留守になったアパートにちゃっかり住み込んで長年の憧れであった家出を決めこんでからそろそろ八カ月になります。

一人になって発見したことは数多く、たとえば結婚前の娘が同じ都内に家がありながら



一人暮らしをしているということに対するある一部の人たちの反応、娘に「お母さん」を頼まなければ自分の食べる物ひとつ自分で作れない父親の情ない姿、（それに代表される世の中の身の回りのこともできない男の人たち）、そういうダンナを持ちながら「ほか弁でも買って済ませて下さい。遊ぶときはお互い様なん

だから」とつっぱねてしまえない母親の遠慮っぽい態度、（それに代表される世の中の、ついダンナや子供の世話を焼いてしまう女のたち）、なんといっても一人で生活をするようになってから自分で作った料理が意外においしいという発見をしたのは大きな収穫でした。それだけ暇な時間が増えたのでしょうか。とりわけ両親の生活ぶりを外側から観察して、こういうのが世の中の平均的な粗大ゴミの生態なのかとか、結婚生活、つまり夫婦でいつづけるということこそ慣性の法則が最も強く作用しているに違いないとか、あれこれと批判めいたことを考えるのがとても楽しいのです。

でも何はともあれ、バス一本、乗り換えなしで三十分程の距離とはいえ、独身時代の一人暮らしという貴重な体験をさせてくれた両親には感謝の一言。今のうちに、今しかできないことをあれこれやってみたい、と意欲に燃えております。家賃、食費等の生活費の支出は苦しいけれど頑張るぞ！。

あと二年で退職しますが

滋賀県大津市 茅野雨露子^{メノク。コ}

春四月、新年度のはじまり。公務員となつて三十四年目。あと二年、つまり満三十五年で私は退職するつもり。そこでその時の自分の生活はどう変わるのか——それは私に大きな希望をもたらしてくれている。

まず、家計費は夫に依存する。退職金や年金は私の意志で使途を決める。夫は三年前に、これも公務員を定年退職、現在は第二のつとめ。私たちには二人の娘があつて、長女は大学修士二年、二女は高校二年。長女は法・政・国際関係、二女は美術コースなので、まだまだ学資にくわれるのだが、それはそれ。

独身時代から三十五年間、病弱の姑と十八年つき合つて、二人の子育ての中で、封建的な地方の区役所の、昨年ようやく管理職。ひたぶるに人生の半分以上を宮仕えで終ることになる。もう家計の面倒をみるのが嫌になつ

た。収入をそっくり家計以外のことに費したいと思うし、そうして悪いことなどあるまい。次に、自分（退職した次の日から）台所仕事はするまいと思つてゐる。自分でやりたいという気持が起るまで、食事づくりをサボる。朝ご飯、おべんとう。姑が寝たきりになつた時には、彼女の枕元に置いて出るための分を入れて五つのおべんとうをつくつた。仕事をしているから、時間をかけて食事づくりをすることが面倒になつてしまつて、今では二女のおべんとう一つをつくるのが、ようようである。

長女は東京で下宿生活だから目下三人であるが、「やがて二人だけになったら、当番制で食事づくりをする」と夫に言つと、夫は「自分の時は出前にする」と言つた。行きつくところは見当がついたから、そのためのリハー

サルとして、二年後に私のほうから食事づくりをやめてやろうと考えた。私はおべんと部屋の給食か、レストランか、うどん屋に行くことに決めた。

退職したら、家の中を整理して、三十五年間の埃を叩き出して清潔にしてくれるだろう

忘れ得ぬこと

午後から降り出した雨がだんだんと強くなってきた。今夜半には関東地方に台風が上陸するという。夏休みに入って二週間ほど経ったある日の午後である。電話が鳴ったので出ると何とも珍しい人からであった。小、中学校が一緒に家も近かった、いわば幼な友達男性からであった。しかし高校からは別になり、それ以来全然会ってなく、二年前、十年ぶりで開かれた小学校の同窓会で久しぶりに再会したという友人である。そのS君が何故か電話の主は言った。

「実は今、会社の出張で横浜まで来たんだけ

と夫は思っているかも知れないが、アホらしいわいふ」のおおかたの方は夫に食べさせてもらって、文句言っているんですぞ。三十五年の蓄積を今こそお返しする。しかし、離婚は絶対しない。

神奈川県 横須賀市 細野 清美

ど、仕事が終わってサウナへ入ったらそこで財布をとられてしまったんだ。その中にはキャッシュカードも入っているんでお金をおろすわけにもいかず、困って今実家まで来たんだけど、誰もいないんだ。どうしようかと思ったら、この近くにあなただけ住んでいることを思い出したので、図々しく電話をしてみたんだ。

キャッシュカードの再発行の手続きをしたので、それが出来たらすぐ返すから、いくらか貸してもらえないだろうか」

私は疑うことをしなかった。二年前の同窓

会で会った時、今では彼の実家が、私の住んでいる団地の隣の団地であることを聞いていたし、彼が困って母親の所へまず来たのも普通のことだと思った。それがたまたま留守で、私にまで頼むのはよっぽど困っているのだ、と同情さえしたのだった。

「わかったわ。一万円位で良かったら」

そしてS君はやって来た。びしょびしょになっていたせいもあるが、私はS君を一目見て何となく貧相になったなとびっくりした。私の知っているS君はぼちゃっと少し小太りなぐらい肉づきがよくて、明るい感じだったのだが、ずい分やせていた。

「S君やせたわね」

「うん、苦労しているからね」

「結婚はまだなの？」

「まだ一人ですよ。僕なんかこの頃では異性としてみられないんですよ。会社の女の子達も僕となら安心だと言って……もう保護者みたいなもんですよ」

そんな話などして私は一万円を貸した。さすがにそのままでは渡さなかった。便せんに

「筆書いてもらった。金額と住所、氏名を書いてもらったが、私はふと思いついて、実家の電話番号を書いてもらった。現在の彼のアパートの住所より、何となくこのほうが確実そうだったから。」

「ありがとう。助かったよ。カードが出来たらすぐおろして返しに來ますから」

と彼は言い、すぐ帰って行った。夜、帰ってきた夫にこのことを話すと、「うん、それは

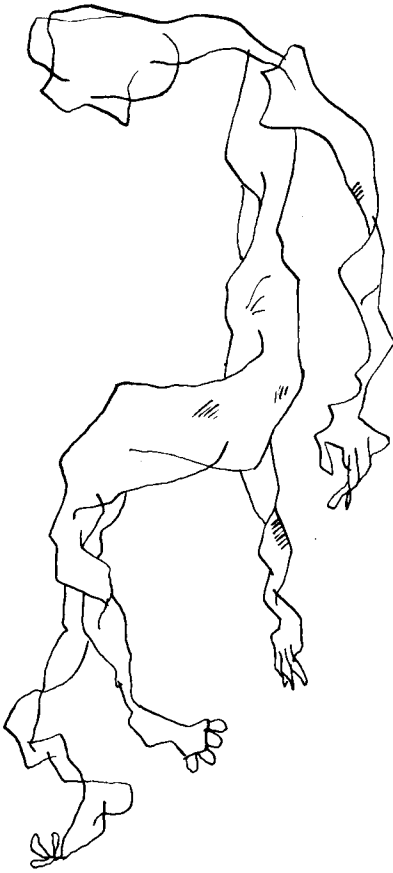
怪しいな」と即座に言った。夫もSのことを知っている。私達三人、中学の同窓生である。

昔のS君のことをよく知っている私は、彼が私をだますなんて信じられなかった。

それから十日ほどして、S君から電話が入った。

「この前はありがとう。カードがおりたので、現金書留で送ります」

私はホッとした。夫にもこういう電話があ



ったことを告げた。ところが、それから何日

しても書留は届かなかった。S君に連絡をとろうとして私は彼の会社の電話番号を聞か

なかったことに気がついた。(やっぱり……) という暗い気持ちで、私は実家に電話をしてSの会社の電話番号を聞こうとダイヤルを回した。すると同居の長男のお嫁さんらしい人が電話口に出た。

「そちらはS君のご実家ですね。S君のお母さんいらっしゃいますか？」すると、

「今、姑は留守ですが、どういふご用件でしょうか。さしつかえなかったらお話しさい」と言う。

私はこれでピンときた。Sのこととここに電話が入るのは初めてではないな。ああ、やっぱり私はだまされたのだ、と。私は事実を告げた。先方の人は、

「わかりました。姑が帰りましたらそちらへまた電話をします。番号を教えて下さい」

それから間もなくして、お母さんから電話が入り、

「Sが大変ご迷惑をかけました。これからそ

ちらへ伺いますから家を教えて下さい」

私は何ともいえない複雑な気持ちになってしまった。私が貸したのは大人のS君にだし、お母さんに返してもらうなんて気が引けることだ。

やって来たお母さんの話を聞いて、私は二度びっくりした。

「Sは高校を出てから就職しましたが、どこも定着しません。あちこち職場を変えて今では無職のようです。そうしてあちこちへ行っではこうしてお金を借り、借りてはそのままで、私はもうあの子のためにいくら尻ぬぐいをしたことか。同居している長男はここで教職についていることだし、あの子にみつとまないことはやめてくれと言うのですが、今では家にも寄りつきません。ええ、勿論、(Sが)ここへ来た日に、私達は家に居ましたよ。どうしてこんな子になってしまったんでしょう」

私は咄然とした。S君は勉強も割合に出来たほうだったし、ひょうきんで明るかった。小学生の時は人気者だった。でも、そう言え

ば中学生になってからのS君はあまりパツとしなかった。

「大学へ行かない、と言ったのはあの子本人なんです。私は大学へ行かせてあげるよと言ったんですが、僕はいい、勉強は好きでないから、と高校も普通高校に行かず、工業高校へ行っただけですよ。でもそれが何となく劣等感になっているんですかねえ」

と母親は言った。このお母さんは昔と変わっていない。よく知っているだけに心が痛んだ。

S君は男三人兄弟の末っ子である。上ふたりのお兄さんはとても優秀だった。二人のお兄さんに比べればS君は出来の悪い息子になるのだろう。そんなコンプレックスがS君にあったのだろうか、そこまではわからないし、母親もわからないと言う。もちろん、他人には言いたくないこともあるだろう。そんな感じも受けた。今日の母親の話を聞いて私はS君が我が家へ来た時の風貌に合点がいった。今日の生活にもきつと困っていたのだろう。母親が一万円を差し出すので、私も借書本を渡した。(これでいいのだろうか)私も悪

いのに、母親に返してもらってしまっただけという気持ちでいっぱいだったが、私も困るのでやっぱり受け取った。

「今度私の家にも遊びに来て下さいよ。ここからすぐですよ。団地の入り口から入ってすぐ左側の角ですから」

母親は明るく私に言って帰って行った。

夫にもことの次第を報告した。

「俺の言った通りだろ。三十過ぎた大の男が、昔の同窓生、しかも女の人の所になんかふつうお金なんか借りに来ないぜ。そういうのは初めから借りたおすつもりなんだよ。これからはそういうことがおきる年代だよ。ちゃんと生活している人とそうでない人との差がますます出てくるんだ。気をつけたほうがいいよ。いい勉強になりましたな」

そうなのだ。昔のS君やA君などではないのだ。二十年という歳月が一人の人間を大きく狂わせてしまうことだってある。この人が、と思う人が立派な社会人になっていることもある。そういうええあの時の同窓会で、中学卒のK君が四年制大学卒の人と結婚して、子供

も二人いて、幸せそうな感じで出席していた
つけ。世間知らずだった私と二十年の歳月の
重みをしみじみと感じた出来ごとだった。

それからS君のことはいつも頭の隅にあっ
たが、数カ月後、街でばったり小学校時代の
恩師に出会った。まさにS君と私の担任であ
った先生である。私は話の最後にS君のこと
を言ってみた。すると、

「えーっ、あなたの所にも行ったの!! 私の
所にも来てね。やっぱり一万円貸してくれと
いうから貸してあげたの。カツ丼をとってあ
げただけで、食べないからさらに二千円足
して渡してあげたのよ。それがそのままでね
ところがSのお兄さん、K小の先生をしてい
るから、たまに会うのよ。私がSに貸したこ
とはもう知っているはずなのに、顔を合わせ
ても何の挨拶もないんですよ。そういう人な
のよ。私はお母さんが気の毒でねえ。Sは一
体どうしてしまったんだろうね、あなたの所
にまで行ったなんて、ほんとに……」

私のほうこそ驚いた。三年間も受け持って
もらった先生であり、当時、Sも可愛いがっ

てもらった先生まで裏切るなんて。Sに何が
あったのかはわからないが、それも誰のせい
でもない、Sが悪いのだ、Sが弱かったのだ、
私はそう思うことに決めて、もうSのことも
だんだんと忘れていった。

ところが一年後、近所の大きなスーパーに
買い物に出た時、S君のお母さんにばったり
会ったのだった。彼女はびっくりした顔で、

「まあ、あの時はどうも……」
と頭を下げた。

「S君はどうしていますか？」

「ええ、今は職にもついて、アパートも変え
ましてね。私もたまには行ってみるんです
が……」

「もう、いい歳して……あれでは結婚も出来
ませんよ……」

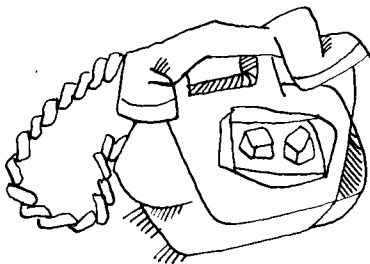
母親の言葉は歯切れが悪かった。果たして
本当に定職につけているのか……。

「何かが気に入らなかつたらしいんですよ、
あの子にしてみれば……」

全く、年老いた母親をいつまでも心配させ
て……。Sにも早く立ち直ってもらいたいも

のだが、もう会うこともないだろうと思う。
「毎日健康のためにここまで歩いて買い物に
来ているんですよ」

母親はそう言って別れていった。
もう一年半も前のことであるが、私にとっ
ては忘れられないできごとである。



(え・万谷陽子)

投稿ホットライン——物いわぬは腹ふくるるわざ

マジの発言

黄色い声、赤い声——五色の声でもの申そう！

やっぱり主婦ってネアカ!?

埼玉県富士見市 野崎美智子

田中喜美子さんが、主婦がネアカになってきたと書いていたけれど、私も今、そんな気がしている。

と思うのも、きのう、市主催の「婦人問題研究集会」なるものに出席してからだ。

「婦人問題」などと聞いて、日頃、主婦論なんかを読んでいる私は、ワクワクして、インソと出かけたのだが……。

午前中は、毎日新聞社の増田れい子さんの講演、午後が三つのテーマに分かれての分科会だった。

増田れい子さんの講演は、「婦人と社会参加」というテーマで、参政権を得るまでの女性の歴史と男女雇用平等法の問題、そして、現代における社会参加の目的について、とてもわかりやすく、心に残る話だった。

その感動もさめやらぬうちに、会場で売っていたホカホカ弁当を食べて、私は午後の分科会「子育てと社会参加」というのに出席したのである。

その分科会の助言者は、武田京子さん。お顔は初めて見たけれど、「わいふ」に本の広告が載っていたし、私も何回か武田さんの本を読んでいるので、なんとなく知った人に出会った感じで、そこまでは、ああ来てよかったと思えたのである。

分科会が始まり、二人のレポーターが自分のしている社会参加（自主保育とコースなど）について話したあと、討論となった。人数が十六名と少なかったせいなのか、なぜか司会者がすべて指名、途切れなく指名するの自由で発言ができない。（自分のテーブルに名前を書いた紙が立ててある）指名された人は、なぜかテーマにあまりこだわらず、どうも自分の自慢話めいた発言が多い。

「私はこんなことをしていて、毎日が充実しています」とか「うちの主人が、主人が」と連発する人もいれば「うちの主人が、先日司

法試験に合格しまして」「うちの子は、テストがクラスで何番以内なんです」などと、テーマとは関係なく、指名された以上何かしゃべらなくては、というのがアダになったような話ばかりが飛び出してくるのである。

主婦は、討論会には慣れてないんだ、と思っただけで、なにしろ「婦人問題研究集会」なのである。もっと問題を出して欲しいのだ。

指名は、なぜか（なぜかが多くなっただけ）私には、回ってこない。子供を前日から実家に預け、たった一日出かけるのにも、夫や母に気がねして、それだけでも大きな婦人問題を抱えていると思う私は、「いつもテニスを休日しているのだけど、たまには勉強会にも行ったほうがいいよと主人に言われたので、来たのですが」なんていうのを聞いていると、婦人問題研究集会なんぞにんなんのためにでるのか不思議に思えてきた。

ことなきを得て終らせたい司会者の、常になんかが話していて、しかも万遍なくという作戦なのか、発言するチャンスがない私は、イライラ。ついに、頭にきて「お話し中、失

礼ですが、婦人問題研究集会というわりには、皆さん特に問題もなく、ハッピーに生きているんですね。しかも、主婦として、地域の活動はしてこられても、働いたことはないようですが、一度も働きたいとは思わなかったのですか？」と言ってしまったのである。

司会者は、私の予定外(?)の発言にギョッ

となり、時間が迫っていたこともあってか「では、助言者の先生に、その辺の所も含めてまとめていただきますよう」と言ったのである。さすが武田さん、「いや、今の質問に皆さんで答えてもらってからにして下さい」とビシヤリと言ったのである。私は、ソレ見ろ！ と言いたい気分。



指名にもれていた私のような人が「私は、以前パートで二年ほど勤めましたが、やっぱり家庭や子供のことが、いいかげんになり、主人にも俺が食べさせてやれるんだから、働くなど言われてやめました。もうあんな思いついてまで、働きたくはないんです」と言った。他の人は「自分の趣味（読書会）のさまたげにならないパートなら、やりたい」と言ったのだ。

十六名中、半分は子供が小学生以上の主婦、あとは幼児がいる主婦だったけれど、小学生以上の子供を持つ主婦は、地域活動（PTAサークルなど）の主力になっている人たちで、好んで働きたいとは考えていないようだった。「なんといっても地域の活動が大切ですよ」と私に言う人がいたので、「子供を預けるところがなくて、地域の活動はもちろん、自分が病院にもいけない若い母親もたくさんいるんです。地域、地域といいますが、近所で困っている若い主婦にも少しは力を貸して下さい」と私は、言ったのである。

なんと可愛げのない、ナマイキな主婦、き

つと私は、そう思われただろう。とにかく、なんだか問題らしい問題も出ず私も充分発言しないうちに時間がきて、分科会は終わってしまったのである。

最後に武田京子さんが、私の発言を取り上げて下さり、「年齢のワクを取り払って女たちが手を結びあうことが、幼児を抱えている時、老人を抱えた時、そして老後を迎えた時、とても大切な関係をつくることができる。その中に、男性も少しずつ巻き込んでいきましょう」とまとめた。

もの足りなさとはがゆさが残り、なんだかつまらない。婦人問題研究会「だった。しかし、よく考えてみると、市主催のお仕着せの集会で、出てくれる人を探すという感じなのである。」子育てと社会参加」というテーマ自体、婦人問題研究会のための婦人問題であって、一般市民、本当に問題を抱えている人たちの中から、わき上ったものではないような気がするのだ。

日曜日の十時から三時半までという時間帯も、夫や子供の理解があって、幸せな人しか

集まらない集会にしているのかもしれない。

それにしても、分科会に集まった主婦たちが、問題を抱えていないというか、問題に気づいていず、ぜいたくさいわなければ、自分のやりたいことを、好きなようにやるのだから幸せだと思いつ込んでいるので、主婦がネアカになったと私も思ったのである。

夫と別居、離婚が成立しないので、なんの公的援助も受けられず、三歳の子供を抱えて働いている友人が、「去年は、私も婦人問題研究会に出ただけで、実際に自分が問題を抱えてみると、あんな幸せな人ばかりの集会に出て、少しも解決されないのよね。話すことより、その時間、働かなければならぬ。これじゃいけないんだらうけれど、今の私には、集会に出る余裕すらないの」と言ったのである。

だれかに食べさせてもらえるうちは、主婦は、ネアカでいられるのかもしれないね。田中さんの言葉が、思い出され、締切り、枚数ふりきって、書かせていただきました。

使い捨ての教育が好きですか

神奈川県川崎市 庄田 博子



ここに一つの幼稚園がある。F幼稚園。

幼稚園といっても、諸々の環境、設備が満たされていないのか、認定を受けられないのか、正式には幼稚園という。

月謝は、他の園に比べて大変安い。

各教室も、他の園より狭い。

遊び場も、とても狭い。走り回りたい時は先生が、近くの公園へ連れて行く。

見た目も設備も、質素。

親をやたらに幼稚園にかり出さない。

どんな子供（知恵遅れや障害のある子）でも受け入れる。

エリートを作り出そうとしない。

園長先生は、五十歳ぐらいの素敵なおばあちゃん。

今幼稚園は、華やかさ、豪華さ、エリート

臭、英才教育のシステム、十分すぎる設備、それらの全てを満たしていなければ、人気が保てないといわれている。

子供の数が年々減少して行く中で、あの手の幼稚園ギンギラメニユをさし出さなければ、人集めが出来ない幼稚園が増えていくというのである。

そんな中で、このF幼稚園は、外観より何より、中味の教育が光り輝いている幼稚園である。

十二月のこと、クリスマス会の準備だ、練習だといって何やらやっているらしく、娘がチラホラと様子を話してくれる。ただし、あまりくわしく話してしまうと面白くないからといって、さわりの部分だけしか教えてくれない。

「ママ、あのね。まゆみちゃんって子がいるんだけど、このごろいろんなことがわかるようになってきたんだよ。」

はじめは何も話せなかったし、先生のいうこともわからなかったみたいなの。でもこのごろお返事もできるし、私たちが話してるこ

とわかるの。私だって、まゆみちゃんのいつてることわかる。クリスマス会の練習もちゃんとやれるの」

障害を持つ子のことであることはわかったけれど、娘の話し方のいっしょうけんめいさも関心深かった。

次の日も、

「あのね、まゆみちゃん、自分のいうところ（セリフのこと）、ちゃんと口をあけられるようになったの。私、うれしい」という。

次の日も、次の日も、園から帰ると、報告が続く。

「声が出せるの。自分の番のところだよ。すごいんだから。うれしい、うれしい」

少しずつ、少しずつ「チビクロサンボ」の劇の練習が進んで、まゆみちゃんも進歩している様子が伝わってくる。

そして、クリスマス会の前の日、娘が、

「あのね、ママ、まゆみちゃんの役はウサギでね、わかると思うんだけど、いつてるのは、『チビクロサンボちゃん、どうしたの?』っ

てことばだよ。絶対わかるから、そう思っ
て聞いてね」

「うん、うん、わかるに決まってる。明日見
に行くわね」

クリスマス会の日がきた。幕があがる。

歌や合奏や、お遊戯の間も、演技の合間合
間にも私はまゆみちゃんのことになんとなく
気になって、ついその方に目がいつてしまっ



「クリスマス」の歌の時も、声は出ていない

ようだけれど、みんなと同じように口をあけ
ている。隣に立っている女の子がしっかりと
手をつないで指示したり、いたわったりして
いる。とても自然に。――六歳児である。

合奏も一緒にやる。先生がピアノ、子供達
は全員打楽器。小さな手にカスタネットをも
ったまゆみちゃんも、まわりの子のバックア
ップで、打つ番になると合わないけれど打つ
胸が熱くなる。目のまわりが熱くなる。

温かい気分がいっぱい聞こえてきて、流れ
てきて、満ちて、音楽になった。拍手の波が
広がった。

いよいよ、「チビクロサンボ」の劇が始ま
った。

決して派手ではないけれど、子供達と先生
達だけの丹精の舞台装置と、子供達の可愛ら
しさで、ストーリーは盛り上がり、まゆみち
やんのセリフの番がやって来た。

「うさぎ」が一步前へ出て、「ア――」と長
く大声でいう。期せずして、一勢にわれんば

かりの拍手が湧きあがる。たしかに「チビクロサンボちゃん、どうしたの？」と聞てえた。

どの親も、もう我が子のことのように、目頭をおさえ、涙がとまらない。気がついてみると私もツメがくいこむほど手を握りしめて汗をかいていた。ストーリーは、よどむことなく完ぺきに流れて、完成した。

きつときつと、どの子もお母さんに小さな口で、まゆみちゃんのセリフを説明しておいたにちがいない。こっそりと。

まゆみちゃんがうまくできますように、子供達も、親たちも、誰もがそれを静かに祈って見ていたのである。

子供達の演技と、いたわりと、観衆の気持ちの一つになった時、この劇は、完ぺきに完成した。これまでに私が見たどの劇よりも素晴らしかった。子供達も、親達もこのクリスマス会とこの気持ちを決して忘れないと思う。先生方の指導方針、方法に頭がさがった。

幼稚園教育が云々されている。
むずかしい漢字が読める。

英語から、果てはフランス語も教える。



私立小学校受験のノウハウをたたき込む。
どこも特色を出して、教育と銘打つ。

それはそれで良い。――求める人がいるのだから。

しかし、本当に本当に心のやわらかいこの時期の子供に教えて欲しいのは、心である。人を思う心である。自分だけが抜きんでれば良いというエゴを持たない心である。人を

いたわってあげられる心である。

幼稚園教育に必要なものを置き忘れたのは幼稚園自身なのか、世の母親達なのか、私にはわからない。半分半分にしても、少なくともその半分に関わることでできる母親としてはしっかりと考えてみなければならぬ問題である。

温かさと思いやりの心をいっばいいたいで、娘はこの春卒園した。

まゆみちゃんも、この春一年生、学校では特殊学級に入ったと聞いた。F幼稚園のように何とか普通の子供達に混ぜてあげることが出来なかったのかと心に残る。出来ないことはないと私は思っている。

教育は、「使い捨て」ではいけないと思う。幼稚園から始まって、大学まで、なんとかF幼稚園に見るような、本当の心の教育を忘れないで欲しいと思うのである。

まゆみちゃんのランドセル姿が遅さきの桜によく映えていた。

ここらがギリギリ正念場

千葉県船橋市 街 京子

三月九日、船橋の公民館でお会いしました。廊下で、学生上りのアルバイト職員にまちがえられて光栄(?)でした。実際は「ここらがギリギリ」といった感じの三十五歳です。田中さんのお話では、四十代から第二の素晴らしい人生を切り開いていかれた方もいらっしゃるとのこと、生きている限り「遅い」ということはないのかもしれませんが。

でも、結婚したとたん「何かがちがう、こんな生き方ではなかったはずだ」とつぶやき続けてきた人間としては、正直「ここらが右へ行くか左へ行くかギリギリの曲り角」の年齢なのです。

「何かがちがう」といっても、夫と私の結婚、家庭生活の問題に限ったことではない。それまで愚かにも「男女平等だ」(たとえ女が家庭に入って専業主婦——当時こういうこと

ばはなかったように思う——になったとしても)と信じていた二十三歳の女が、結婚したとたん「夫のカサの下での自由しかない、夫あつての私としか誰も認めない」と気付いてしまったこと、それから延々十余年もヨタヨタと自分の中の主婦問題とつき合わざるをえなかったこと、しかもそのつき合い方が、自分を専業主婦という安全地帯に置いてのものでしかなかったことです。(途中、教職に復職したり、体をこわして後、塾講師になったり、ということもありましたが、結局は専業主婦という古巣に戻ってしまっています)そしてもういい加減さういうゆるま湯の問題意識の持ち方に決別したいのです。

二歳を過ぎたばかりの二男をひき連れて、大阪市立婦人会館での「主婦の意識と実態調査」に関わって、客観的に主婦問題を調べて

みたり、その後自主グループを作って教科書問題に関わる運動をしてきたりもしました。でもどれもこれも、自分を専業主婦という安全地帯に置いての行動であつてみれば、本当に生身の私自身をぶつけての行動はなかったように思うのです。ちょっとつらくなったりすると、すぐ逃げこめる所があるというのは致命的なことでした。

夫が東京転勤になった時、数倍の採用試験にパスした講師というアルバイトも、結局は捨てて、夫について来たというのも、田中さんがおっしゃったように、自立できるほどの収入を得ていないということ、つまり逃げこめる専業主婦というワラジを脱ぎきっていなかったことによるのだと思います。

(大阪で作ったグループメンバー七名の内、三年経った今、二人がフルタイムの仕事に就き、二人とも何とか自身の収入で食べていかれるというメドがつくと前後して、夫に離婚を申し立てています。私にはそのパターンは、主婦問題を何年も自分の問題としてかかえてんできた人間のとるごくノーマルな行動のよ

うに思えます」)

こんな思いを持ちながらの船橋での二年間、やはり自分の足でとび立とうとはせず、意識のみがグングンふくれ上がってきて、パンク寸前です。そしてそんな私の在り方を決定的に打ちのめしたのが、田中さんが朝日新聞に書かれた記事であり、ついこの間読んだ講座主婦Ⅲ「動き出した主婦たち」の中の田中さんの論文でした。やっぱりそうだったんだと赤面せざるをえませんでした。

我が家は年収五〇〇万にも満たない生活を送っていますが、これでも何とか暮しています。会社丸抱えの生活だからです(サラリーマンの家族は会社と運命共同体です)。郊外の一戸建ての家を借り上げ、社宅として会社が家賃の大半を支払ってくれている上、大阪での持ち家だったマンションを貸しているので、毎月それこそ主婦のパート月収と同程度の収入があります。

夫が転勤になったんだから妻がついてくるのは子どもたちのためにも当然といった良識、そういう安全地帯の中にいる主婦が、総て

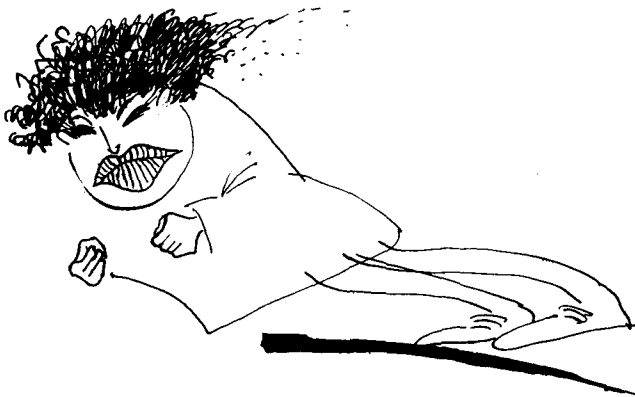
・ネアカ、だとは思えませんが、・ネアカ、のふりしてりや安全だ、という無意識的な保身術が身についてしまうようです。

そして、私をも含めたこういう、意識には目覚めていて、しかも動かない主婦たちの位置というのは、現在の社会構造の産物そのものだとも思います。この社会構造の変動によってもろくも足許をすくわれてしまうのもそういう私達なのだ、ということもまた気付いてしまっているのです。(だから「妻たちの思秋期」は他人事ではないのです)

十年かかってここまでしか到達できなかったのか、という無念さがあります。でも「ここらがギリギリ正念場」と、口の中でつぶやきつつ、ワンステップ踏み出してみます。

「わいふ」も今までは「読み手」オンリーでしたが、「書き手」にもなっていくつもり。以前「わいふ」で行った「セックス・アンケート」、私も出しましたが、その際かなり自身の自分が見えたように思っています。結局「夫のカサの下でしか生きられない」と思っ

ている人間にとっての、性、というのは、支配、被支配関係でしかないように思えるのです。「わいふ」での調査結果を楽しみにしています。



(え・万谷陽子)

びのガイド



ワァーこいのぼりだあ、と子供たちの歓声
 がありました。正面玄関をはいると真っ青
 な空を背に、数珠つなぎになったこいのぼり
 が気持ち良さそうに泳いでいます。
 まずは遊具広場へ突進して、ひと遊び。太
 陽はかなり高く昇ってきて、水を飲みながら
 子供たちは、案内図を手に次の遊び場を相談
 しています。

ローラーすべり台、そしてお目あてのスカ
 イサイクル。午前十一時だというのに、もう
 黒山の人だかりです。開園と同時にとびこん
 だのですが、どこもかしこも長蛇の列。炎天
 下汗だくで並んで三〇分、やっと順番が回っ
 てきました。ペダルを踏みながら私たちに手
 を振る嬉しそうな顔。
 午後は、白鳥湖とちびっこ動物園・牧場へ

こどもの国



宮前 和



子連れ遊

行きました。湖ではイカダに乘ろうと決めたのですが、一時間の順番待ちと聞いて断念。なんせ、この日は「こどもの日」とあって中学生以下無料解放。総入場者数推定七万五千人の混雑だったのです。

山の中腹を利用した牧場では、ホルスタイン種の乳牛がねそべったり干草を食べたり、おだやかな風景がひろがります。牛舎から出てくる子牛の頭を撫でて、子供たちは、かわいいなあ、の連発。気になる牛糞のにおいも私には懐しく、育った田舎を思い出しました。隣のミルクプラントでは、目の前を行く牛たちから搾った新鮮な乳を飲ませてくれます。(五〇〇cc三百円、紙コップ付)

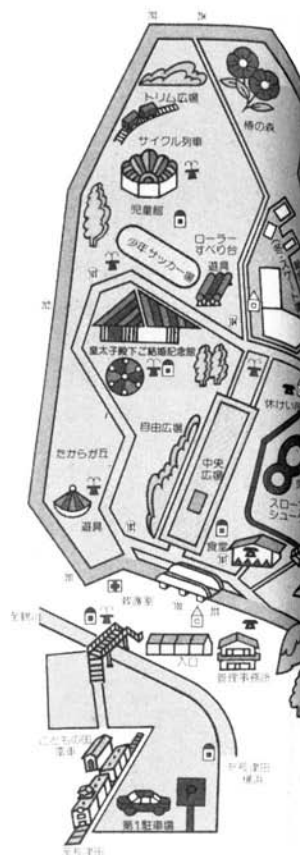
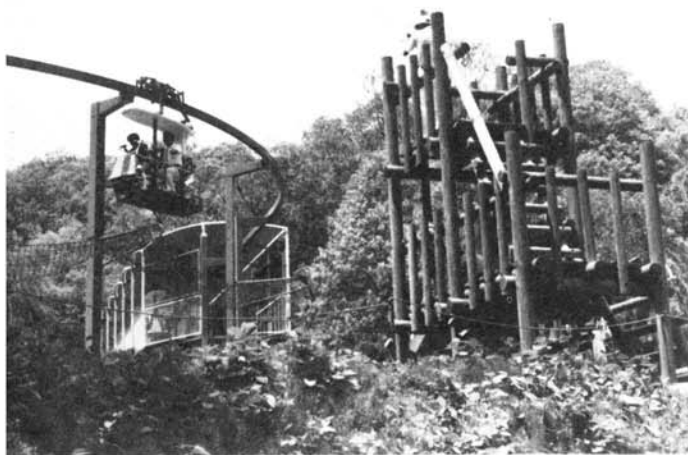
そのほか子供に人気のあるのは、じゃぶじゃぶ池、長いすべり台、つり橋などのある児童遊園や、サイクリング。一日では園内全部はともまわりきれません。重点的に見る所を決めておいた方がスムーズに動けそうです。内周道路の喧噪にまぎれて、点々とちらばる小さな廃墟がありました。戦後世代が大部分を占める入園者の中で、それに目をとめる

人はほとんど皆無ではないでしょうか。そして、旧陸軍田奈弾薬庫だと知る人も。七〇あった弾薬庫は埋められて、現在露出している保存状態の良いものは約二〇。そのうち半分が変電所や倉庫に流用され、白鳥湖々岸、つり橋のハシゲタに使われています。非常に頑丈なため、残る半分も何かの折に役立つのではないかという事務所の話でした。しかし、鉄扉の×印はナチスの卐マークを連想させ、中を覗いても真つ暗闇、無気味です。

さて、大人も楽しめる所としては、樺の森、桜堤、梅林があります。それと、見逃せないのがこどもの国を縁どる外周道路(約四キロ)、都会の雑路をよそに自然の息吹を満喫できます。

午後四時、初夏の陽射しが肌に痛くて、顔やうなじがひりひりしてきました。

駐車場横、トウモロコシとイカを焼く醤油の良いにおい、おなかもすいてきて、今度はゆっくりオリエンテーリングもいいな、と思ったことでした。



季節

他各種設備 貸出備品あり

四季を通して。

春／お花見（梅・桜・椿・すいせんなど） 遠足 野草料理会 散策

夏／プール キャンプ じゃぶじゃぶ池など

秋／運動会 紅葉を楽しんで雑木林を散歩

冬／マラソン アイススケート 風あけ

親の楽しみ
自由をおう歌し童心を取り戻せること。四季の移り変わりを楽しめる。

子の楽しみ

園内すべて遊び場所。目うつりして困るほど。幼児から小・中学生まで幅広く遊べる

食事

食堂一か所 スナック三か所 売店八か所 休けい所あり 弁当持参が無料

トイレ

園内に十三か所 園外に一か所 第一駐車場に一か所 車イス用は一か所（ポニー牧場の前）

困ったこと

混雑する日は迷子に気をつけて砂塵（園内風とおしが良いので）

その他

●ベビーカーの用意があると助かり、小さい子供や荷物を乗せて歩くのに便利。園内貸出しもある。二〇〇円

●着替え必要。動きの激しい子供には二・三組

連載第三回

きのえね

甲子ハイツ一〇二号室

文●柳原 和子



日曜の宵は夫婦でカラオケ

恋は怪しい 夢芝居

たぎる思い おさえられない

化粧衣裳の 花舞台

かい間みる 素顔可愛い

男と女 あやつりつられ

心の鏡 のぞき のぞかれ

こなしきれない 涙と笑い

恋はいつでも 初舞台

男と女 あやつりつられ

対のあけぼの 誘い 誘われ

心はらはら 舞う夢芝居

恋はいつでも 初舞台

この『夢芝居』が、昨年夏から秋にかけ、甲子ハイツでは大流行した。

「おとことお・んなあ。」である。妻と夫が代わる代わる、マイク片手にカラオケ音量目一杯の大合戦なのだ。傍点の「ー」と「あ」に力が入る、独特の節まわし、まぎれ

もない艶歌なのである。

それも奇妙にうまいのです。聞かせます。都はるみから、城卓也、山本譲二、と延々と続くのです。

あるときは、昼間っから、幼い子どもが唸る。客人も唸る。

おとことお・んなあ……

あやつりつられえ……

絶妙としかいいようがない。エコーや機械の性能は抜群。寸分の狂いもない音程。有名な曲ばかりでなく、必ず入る、聞いたこともない自慢の歌。子どもにいたるまでが、恋の歌を聞かせるのだ。

時には客人も訪れ、土曜日、日曜日、連チャンのカラオケ大会。二〇〇〇の超高級車で乗りつけ、泊りこみのカラオケ。どういうわけか、一人の音痴もない。

カラオケよりはテレビがいい、テレビよりはラジオがいい、ラジオよりは生放送がいい、漫画よりは本がいい——そういう類の、どこか修身の教科書みたいなことをいいたいのではない。

他ならぬ私もカラオケ大好き。深夜まで、酒の勢い、声

の枯れるまで唄うことは、かなり多い。騒音公害何のその、上手下手ではなく、もの共聞け！とばかりに強引にマイクを独占、他人様の不快の的となることもある。

しかし、そんな私も、甲子ハイツの三方からのカラオケブームには驚いた。そして流れる歌は、艶かしい恋の歌ばかり。

ある日、謹厳実直を絵に描いたような、と思われていた父が、ふとつぶやいた。

「通信販売でカラオケが大流行なんだってね。わが家も買おうか……」

おもちゃのマイクを片手に、歌手の真似に陶醉の極地にある三歳の孫を前にしての言葉。

なぜか、父娘の礼儀（？）もわきまえず、猛烈に反論、反発しなくなった私であった。

「駄目よ、ダメ！絶対に駄目。騒音なんて問題じゃない。真昼間から、おとことおゝんなあ、なんて唸られてごらんなさい。唄っている方はいいけれど、外で聞く方は佗しくなるんだから……。ダメ」

一言のもとにはねつける勢いに体験がこもっているから力強い。家中が一瞬の沈黙。うつむく父の背中が淋しい。でも、ダメ。

カラオケは、うさばらしの世界である。何も楽しくない、

夢中になれない私たちが、どこか晴れる世界。いつも、ウマクもなんともないカワイコチャン歌手の歌を、これでもか！というほどに聞かされ続ける私たちが、マイク片手に歌手になれる瞬間。今日はスター！そんな恍惚。心の隙間に入りこんだ幻の主人公ゲームである。

しかし、甲子ハイツのカラオケは、どんなときでも深夜に及ぶことがない。

共同生活のマナーですーという向きもあるだろう。しかし、日曜日の夜、『西部警察』のラストシーン、暴力的風カーチェイスの後、石原裕次郎が歌い始める夜九時直前にはピタッと終わる。どんなに、いい気持ちで歌っていても、九時には、ピタッ、シーンである。一年間、九時、ピタッ、シーン、そして東芝日曜劇場、人間のほのかな暖かさ、そして、みんな友だちの『すばらしき仲間』。

夜中まで、騒いで、近所のやり合い、夫婦喧嘩のとはちり、子どもの喧嘩、男と女のせめぎ合い、――そんなことはついぞ起きた試しがない。九時になるとシーン。シャッターの隙から漏れるテレビの青白い光の乱射だけが、人の気配。

甲子ハイツ、みんな、みーんなとっても「平和」なのです……。

電話線の千田

一人暮らし、それも都市で暮らしている私を考えると、どうしてもはずせないものが電話である。

他ならぬ自立派女性のK嬢も聞きしにまさる電話魔。一回の話が一時間を下ることはない。カメラマンのM君も、離婚直後の一時期、一カ月の電話代が三〜四万円平均だったという。そして、一人暮らしの友人のほとんどが、電話線を三〜五メートルと長くしてある。広い部屋でもないのに、どこにいても手元に電話器をという意味なのだ。

他ならぬこの私も、電話魔だった。甲子ハイツに移動する前から、その傾向はあったのだが、それが尋常のもではなくなった。友人たちにしても、私が一人暮らしであることを知ると、深夜から明け方まで平気でかけてくる。私も時間の常識枠が崩壊し、電話器にしがみつく羽目になる。

天井の白い棧ばかり眺め暮らした時期、精神分析に通ったことがあった。

さまざまな問題を話し、カウンセリングを受けている途中で、医師がふと奇妙なことを聞いた。

「一カ月の電話代はいくらぐらい？」

ふと思いかえしてみると、当時の電話代はべらぼうだっ

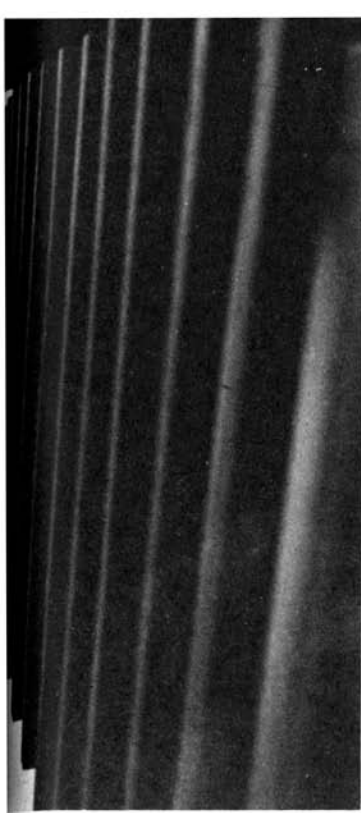
た。いくら職業柄、取材費含みだとはいえ、三万円から四万円、ひどい月には六万円を越えることもあった。その値段を医師に伝えると、やはり、と納得の笑顔である。彼女にいわせれば、今、ニューヨークの精神分析医を訪れる女性たちのほとんどが、電話線にしがみつく日々を送っているのだ、ということ。都市の一つの現象だという。

ちなみに、K嬢が数年前、不倫の恋に悩んでいた次の言葉が象徴的である。

「だいたいネ、真夜中でも昼間でもかまわないけれど、電話がチリッと鳴っただけで、受話器をはずす神経って、淋しいと思わない？ 待ってましたって感じよね。神経のすべてを電話器に集中しているみたいで——」

今、彼女の電話も私の電話も、四六時中、お話中か、または留守という具合である。仕事場を持っているK嬢の場合は、まだまぎれる。始終、家の中で原稿用紙と睨み合っている毎日の私である。どこか情緒不安定な気分と電話代が正比例している。ふっと思い出せば、ダイヤル一本でその人の声が聞える——この事実が心を安定させると思いきや、不安ばかりを肥大させていく。

電話線は、今、限らない人間の生身の言葉を吸収している。たとえば、近頃、ふと感じることは、電話では、実に



多彩な話題と、本質に迫る会話ができるので、会うことは滅多になく、たとえ会ったとしても何か話に詰まるような人間関係が増え始めている、ということだ。電話線に向かつて、話し続けているうちに、対面する関係が成り立たなくなっている、ということ。電話線の向う側で、誰かが聞いてくれればいい、という心境の極みである。誰でもいい、という感覚は、どこか恐ろしい。乱暴に、手当たり次第にダイヤルを回す。今の不安から解放されるならば……とばかりに、である。

だから電話線の中を覗いてみたくなった。そこで、まず甲子ハイツ。考えてみれば、一〇二号室には、いたずら怪電話がやたらに多い。そんな電話の向う側に、やはり、K嬢曰くの、電話器にしがみつく人間像がくっきりと浮んでくる。

呼び出し音。受話器をはずす。耳にあてる。——沈黙——「もしもし？」と私。返事はない。「柳原ですが、もしもし？」——沈黙——カチャ。

呼び出し音。「……」と私。不安。——沈黙——「どちらさまですか？」と再び私。返事もなく、カチャ。

三度目。呼び出し音。——沈黙——私も何もいわない。——沈黙——数秒後、カチャ。

怒りでもない。不気味さだけが残る。鍵を点検、玄関も二重錠にした。

いたずらは徐々に手がこんでくる。昔、ある雑誌社から、履歴書を提出するようにいわれた。忙しい最中だった。神保町の駅で、ある映画会社の封筒に入れたまま、落としたらしい。紛失した。おっちょこちょいの私のこと、これが大切、これが大事といわれると、気が重くなり、どこかに忘れる癖がある。昔、実印を作った。その日に落とした。父に贈られた高級傘も、その日にどこかに忘れた。これを維持しなければ、と覚悟を決めた途端にそのことから逃れなくなる——。だから、というわけではないが、履歴書も失くした。それを拾った男がいる、らしい。

まず次の日の早朝七時十五分。

呼び出し音。——沈黙——「もしもし」「……もしもし、柳原さんですか、履歴書を落とされたでしょう」「あ、



拾ってくれたんですか？　ありがとう」「えっ」「お名前を覚えて下さい。どこかでお礼をしたいから……」「……」

「あの」「……」カチャ。

以来、履歴書に書かれた、ありとあらゆる学校、会社、実家にまで電話が続いた。

「柳原さんの勤務状況はいかがですか？」

「お宅のお嬢さんは○○○大学を本当に卒業したのですか？」
エトセトラ、である。そして揚句の果て、一〇二号室に続く無言電話。

いたずらの極みはサラ金の取り立て屋を装ったものだった。

その日、私は、どういう巡り合わせか、クレジットの回収屋さんの記事を書いていた。夕方であった。呼び出し音で、机を立った。

「もしもし、柳原さんですか？」

「はい」

「こちらレイクの者ですが、柳原和子さんですね。あなた、○○○さんの二十万円の保証人になっています。早く返すように○○○さんに言ってください」

職業、年齢を確かめる。寸分の狂いもない。誰かに、知らぬ間に保証人にされるなんてケースは世間のどこにもある。だから、驚いた。どらいうわけか電話が途中で切れた。

アッ、公衆電話。調査開始。レイクのコンピューターで私の名前を探す。ない。やはり、いたずら電話。履歴書片手の話だから間違いはない。――怒りより、悲しい男の姿が浮んで、その夜は眠れなかった。

卑猥な電話は数限りない。電話セックスの要求は強引だし、「今から行く」と脅してくる男もいる。

「主人がいますから――」

といえば、「対決しようじゃないか！」とすごむ。そんな日は、ひたすら鍵ばかり気にして家の奥に棲み隠れる。

「電話の中でしか、生身になれないのよね。いやな人間になることが、電話線の中でしかできない。いつも、いい人間風でなければならぬことに、きつと疲れているのよね」

K嬢、今日は、えらくシンミリの風情だ。

友人の主婦Aさん。一週間に一度、それもご主人が出勤した直後にたまらなく長い電話をかけてくる。解決はいい。ただ聞いてくればいい、というとめどもない愚痴。

「ヤナはね、独身で、自由で、いいわね。責任もないし、私なんて、やりたいことがあっても、何もできない――」
延々となのである。

あーあ、電話線はどうして破裂しないのだろうか。

デモシカ高級車

三種の神器とは、高度成長の落とし子だという。たしかに、老舗ブラックを引越す頃、わが家には、クーラーはなかった。白黒テレビと、三六〇ccの車が一台。しかし、建て売り住宅大泉学園には、クーラーが各部屋に設備され、全室クリーンヒーターが備えられ、カラーテレビは二台、ビデオもある。車はスカイライン一八〇〇ccと大型化。学園町では珍しい光景ではない。豊かさの象徴として三種の神器が語られることは、今では時代遅れ。別荘や置物、アンティークの価値が云々されるようになった。

では甲子ハイツ。別に覗き趣味は、ない。寺山修司みたいに有名なら、読売新聞の面白がり記者にスクープされるころ、大いに人権論争したいのだが、何しろ、このアパート、陽の当たらない庭を歩けば、つい見えてしまうのだ。ホント、読売さん、

まずは家具。扉を開けて掃除する度に、一人住いの中年女性の部屋はまる見え。巨大なダブルベッドが一LDKの六畳を占領している。学生一人住居の部屋は万年床に歯ブラシ、こびりついたお醤油のビンが移動した試しがない。週末には麻雀の音、それだけが彼の生活の音。私の部屋も

何もない。

引越しのとき、何も置かないを信条にしよう、と、それまでの洋服類をダンボールに入れたまま、玄関先に置いていた。間髪を入れず、訪問客である。

「この古着、売ってくれませんか？」

古着では断じてない。私の日常着なのに、廃品回収屋さんには古着に見えるのだ。愕然、その直後にニンマリ。私。何しろ、お金がない。だから、売って金に換えよう。難民取材に服は必要ない――？　しばし、廃品回収屋さんの眼を見つめ、飢えた心を見透されないように、静かに問いました。声を低く。


「いくら？」

ビニールでくくった箱を天秤測りで側るおじさんの視線は何とも厳しく、鋭い。信頼できそう。

しかし、ナ、ナント彼の口をついて出た数字は、天文学的な数字であった。宇宙遊泳をした宇宙飛行士だって、科学を疑うにちがいない、この数字。いくら古着でも、大型ダンボールにビッシリ二箱。マサカ、

「ニ・ジュ・エン・デハ？」

聞き間違いでは？　だって、だって、まさかまさかの昭和火災、ではないか。二十円なんて、山口百恵に唄わせた



いくらいだ。

「バカにしないでよ！」

でも、どこか見栄晴子の私、心の内も見せず、私はしっかり、と、断わり、扉を閉める。午後、二人目が再び戸を叩く。やはり、二十円。私は、時価二十円の服を取替え、引替え、世間体を気にしながら着ていたのだ。家中が空っぽになる枚数の服なのに、所詮はボロ。

例の質屋さんもあり顔で教訓。

「服はね、質草にもなりやしません。流行が激しすぎて、流れた頃にはすでにボロ——」

しかし、町を歩けば、あれを着れば美しくなれる。風の服が、眼を刺激する。働いて、稼いで、そして服を買って美しくなれる、と広告だっている。でも、ボロ。ダンボール二箱、二十円也。そんなボロに血道をあげなければ、美しくなれない、私。

まあ、いい。つまりは、甲子ハイツの家具調度品の話だったのだ。これが、私と学生、一人暮らしの老女の部屋を除いて、何とも豪華なのである。

朝日新聞が、広告がらみの特集で四ページ「子ども部屋」について特集した。時の知識人、文化人が何人も集まってシンポジウムを開いた、その記録である。見出しは次の語句であった。

親子だんらんたいせつに

個室はしつけ配慮して

元宝塚女優から某県知事、長者番付けでも有名な製薬会社社長らが、独特の子ども部屋論を展開する。『スキんシップ 第一に』、部屋はあっても遊びは居間で、『遊びも眠



りも兄弟二人一緒……」。記事の要旨は、雑居家族の見直しにあった。ご意見、すべてごもっとも。私も雑居に大いに賛成、核家族まっぴら。

だが甲子ハイツ、超豪華な家具調度品は、近頃流行のパツク式豪華結婚式に付いてまわる嫁入り道具だ、と隣家の主婦。そして乾燥機付きの洗濯機は、おしめを乾かすために設置した、とも。二DK、いや一DKも含めれば、このアパートにそぐわない調度はかり。子ども部屋など問題にもならない。家具だらけ、四畳半の半分を占領する豪華家具、原色のカーテン。カラーテレビとカラオケは六畳に、これは夫婦の部屋兼居間。DKは、ほとんど台所にしかすぎない。当然、子どもは四畳半に眠ることになる。

理念も理想ありません。ホント、拝啓、朝日新聞特集係様、という感じである。一日中、太陽の当らない四畳半で、電燈をつけっぱなし、そんな部屋を想像してほしい。東京都の持家率を取材する暇がなかったので、勘にしかすぎないが、アパート生活者はかなりの割合にのぼるはず。だから、というわけではないが、このアパート十八世帯のうち、十四世帯が読売新聞の愛読者。

だけど、子どもは元気、と子ども賛美者風に書いてみたい。しかし、書けない。この甲子ハイツに引越して、もっとも驚いたことが、この子どもたちの表情なのだ。何世

帯か入れ替わり、今では随分と変わったけれど、最初の一年間は、ホント、子どもの歓声が聞えた試しがない。昔は子どもが好きだった私、最初は、会う度に声をかけた。しかし、笑わない。恥ずかしがり屋なのかな、と思っはみた。隣のM君、何度も何度も無表情に私の部屋を覗く。チラリ、と。声をかけ、笑いかけると、黙って消える。こんな所作が一年以上も続いた。

管理人さんの家では、中学生と高校生が四畳半に一緒。彼らと私は、視線は合うものの一度も挨拶したことがない。彼らの家の前を通ると、フツとガラス戸を閉める。私も少々苛立ちまぎれの偏屈顔になっていたのか、と反省ひとしきり。しかし、仲良しになれない子どもの無表情、どこか気になる。

太陽の当たらない庭は、遊び場ではない。だから、子どもたちは、鉄条網で囲われた広大な芝生地を横目に、道路をウロウロするばかり。バック式の児童公園まで遠征はするものの、何とも時間が続かない。ベンチに座りこむ母親たちのお喋りが一段落するまで、ただウロウロ……。

子ども部屋論争は、甲子ハイツは論外である。非行どころか、家庭内暴力だって起こりそうにない。駄々っ子はいない。無表情ばかり。そして一様に静かで、大人しい。立派な家具に囲まれてはいるものの、どこか抵抗力が失われ

ているみたい。

「何いつているのよ。皆、家を買ったときのこと考えて、立派な家具を揃えておくのよ。その場主義の和子には考えられない地道さんだから。問題ないわよ」

とはK嬢一流の分析である。しかし、最後に気になるのが、庭を駐車場にして並ぶ高級車の列である。十八世帯のうち、九世帯が二〇〇〇cc級の高級車を持っている。週に一度女友だちを訪れる中年男の車は、金ピカの外車である。壮観なのだ。日曜日は、甲子ハイツにそぐわぬ黒塗り高級車にワックスがけする夫たち。見事に輝いているのです。駐車スペースには、惜し気もない太陽。ブロック塀にはふとんの列。そして、遊ばない子どもの無表情。

「車しか買えないってことじゃないのかな。家は高すぎて手に負えない。せめて、車でもというか、車しか買えない、ということじゃないかしら」

近頃、生活感の備わってきた私の会話に、K嬢、えらく鋭い論評が続いている。甲子ハイツは今、デモシカ家具、デモシカ高級車でカラオケ生活が支えられている、の、です。クレジットの未払いが多いのが一に車、二に電気製品、そして通信教育の受講料。そのほとんどが、アパート生活者群に多く、クレジット契約を結ぶ際に、危険マークがつけられるのが、このアパート生活者なのだ。

わいふパーティー 私のレポート

東京都小金井市

若竹キミイ

十四日は、ありがとうございました。

何と多彩な多才たちだったことでしょう。四十人のピッカピカのわいふたち。春風にさそわれて今年は少し行き方を変えてみようかしらと考えていた気持ちの端っこで、参加を思いたった

のでした。

「ただ感激」とおっしゃった田中さん。日ごろ、目にみえない担いをだまっけてひきうけて下さっている方のことばとして、ズシンと胸におちました。

私の位置からもっとも強烈に思われたことは、わいふたちの多極化ということでした。子どもの中から、こうした事実に至るまでの「中間に」、教育面での



規格化、画一化が大問題となっているご時世に、いえ、だからこそなのか。

職業、夫、子、親、自分そしてそのまわり……そうした一つ一つへのこだわりの持ちかた、こだわりからの降り方の連鎖が、その間一年といわず、十年といわず、アッという間に百態のわいふたちを分け、固定化してしまふ。

娘が十六歳になりました。娘の友だち、女の子も男の子も、五つ、六つと顔を浮かべてみます。連中と話し込みたいなァという思いにかられます。でも、その前に、私、あの子たちから、鼻をもひっかけられるオバサンかどうかの自問自答はなしです。



東京都江戸川区

西内 泰子

どんな人達がわいふを作り上げているのだろうか？ どんな人達と逢えるだろうか？ と興味半分、期待半分で出席した十七日のわいふパーティー。場所が新宿中村屋ということで、いか本で読んだ先代中村屋の相馬黒光夫人のことや、神近女史の紹介で世話をしたという盲目のロシアの詩人エロシェンコ氏のことなどを思い浮かべていました。

さてようやく着いた会場で会費を払い、せっかく出席したのだから、少しでもつながりが出来れば……と期待してはいたのですが。顔見知りもなく、一人の名前すら覚え、やはり無理

でした。各自己紹介のたびに「かっこいい／＼やるなあ／＼」と心からの羨望と大喝采を送りながら、いざ自分の番になると何一つまともに話せなかったもどかしさ……。

この日はいつも通り会社に出勤ということで、朝家を出て来たのですが、家族には内緒で出かけたそういう日に限って、夫から用事で私の勤務先に電話が入り、「出かけるなら行き先ぐらい言って行け……」と帰宅してから大目玉を食らいました。

わいふのパーティに出席したと言うと「何、ワイフ／＼それはエロパーティか」と真顔で聞く。「わいふ」を「猥婦」と感違いしているとは思えない。

確かに出かける時は家人にこたわって出かけるべきですが、

核家族で自分の思い通り事がはこべる人は楽でしょうが、我が家のように、買物以外一日とて家を空けない、若い元気な過干渉ぎみの姑と同居の場合、どこに行くにもこと細かに説明を乞われ、「仕事以外に主婦がちゃらちゃら外出するものではない」と言われ続けていると、どうしても言わずにあっちこっちへ出かけてしまいます。

会社で九時から六時過ぎ迄働いて帰宅すれば、狭い三DKに夫、娘、姑と四人がひしめき合っただけで暮らしていると、もうそれだけで窒息しそうな毎日です。息抜きのために時に用事にかこつけて、愛用九年目のポロオートバイで遠出をしたり、観劇したり、で気を紛らしています。今私はいつの日か自分で働い

て貯めたお金で、シルクロードに旅する日を夢見ています。もしわいふ主催の旅行なんて企画があったら、絶対参加するつもりで居ります。

埼玉県所沢市

柏木 輝子

いずれもひと癖ありそうないいやもとへ、個性的な面々で、フツーのおばさんの会合とは断然違うのです。自己紹介も、ひとり一分間なんでもったいな

い、何時間でも伺いたい中身の濃いお話ばかり。それぞれの方が納得のいく生き方を模索しつつ歩んでおられて、さすが「わいふ」の読者です。

殺人的スケジュールに追われる田中編集長もどうやら（？）お元気そうですし、和田さんも

相変らずハツラツとして——四年前ウチのトン児の小学校でPTAの委員を務めた折、全P研から講演に来てくださった講師が和田さんで、

「いふ」を愛読するようになったら、ここにも和田さんがいらっしやって、「能力のあるヒトはあちらこちらで活躍しているのだ」と感じ入った次第です——おふたりの同志としての結びつきと友情にとっても心ひかれました。

同じ校正者仲間とお話出来たのも嬉しかったです。

感動し、触発され、豊かなひとときを過したせいか、知識と教養が一杯詰まって頭がふらつき、ヨロヨロと帰途につきました。



わいわいガヤガヤ

みんな中途半端

神奈川県藤沢市 望月

緑

二人の子供も四歳と二歳になった。出産のために退職してからの子育てで四年間、その間必死になって何かを求めてきた私。

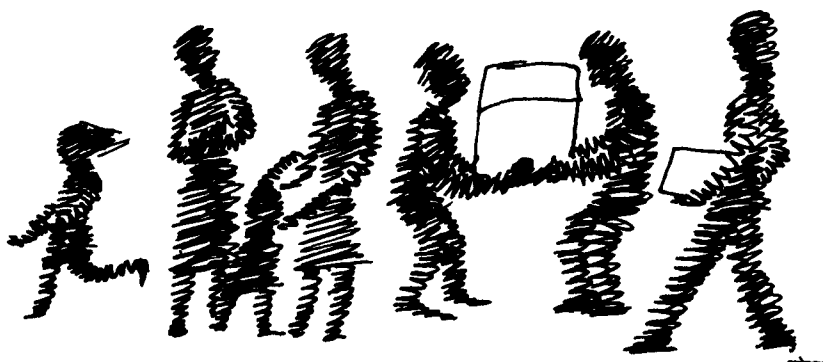
いくつかのモニターをやり、消費生活アドバイザーの資格を取り、月一回のホームパーティーを行ない、公民館に行き……。社会との結びつきを断ち切りたくない一心で動いてきた。そして、また、近所に友達の少ない子供のために公園通いに精を出してきた。

でも、これらすべてが中途半端で、かつ、

不安定なものに思われるのだ。これら、どれ一つの行動をとっても、たとえそれを止めても私自身の存在が致命的打撃を受けるということはない。つまり、公民館に行かなくとも公園通いをさばっても、私は今までと同じように生活していけるのである。

いったいどうしてこんなにあくせくと子育てで四年間を送ってきたのだろうか。ある時は、どうしたら子供をたくましく行動的な子にできるかを必死に悩んだ。ある時は、子供を預けて、働きに出たいと真剣に考え続けた。

でも、今、私は何か心の中にモヤモヤとしたものを残しながら、四歳の子の幼稚園の送迎をし、二歳の子を遊ばせ、兄弟げんかの仲裁をする日々を送っている。



・子供とともに自立したい、などと叫んでも、結局は一步も進んでいないような苛立ちを感じる毎日である。

高いですね、四千元！

千葉県松戸市 紺清田美子

四月十七日「わいふ」のパーティの会費四千元、高いと思いませんか。「わいふ」の会員の方と知り合える絶好のチャンスなので楽しみにしていたのに残念ではありません。

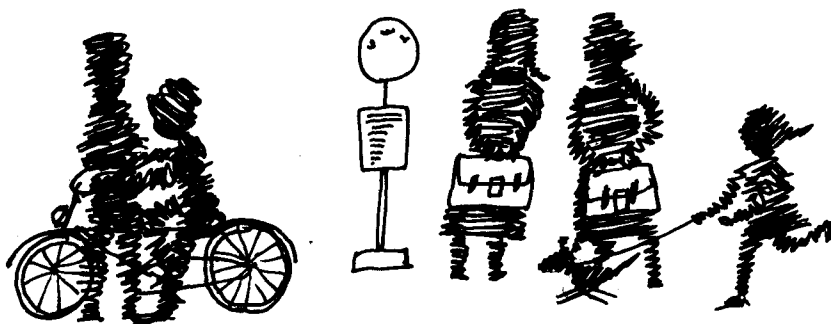
夫は「せっかくだから行けばいいのに」と申しますが、どうしても四千元も払う気になりません。一銭の収入もない主婦となって、ケチが根づいてしまったのかもしれないが、公共施設などを使ってお菓子とお茶だけでも、きっと中身のあるパーティになると思います。是非近いうちに、皆が参加できる排他的でないパーティを企画して下さい。

花の大学二年生

兵庫県神戸市 西脇 セツ

私は、全国で神戸市にしかないユニークな婦人大学の二年生です。芳紀まさに五十うん歳、木元教子さんの言葉を借りれば、五十代は蕾で、七十、八十で花を咲かせるのだそうです。昨年四月、出会いと刺激を求めて、入学試験も、入学金もいらない神戸婦人大学の一年生となり、一年間七〇％の出席率を無事こえて、今年は二年生に進級することができました。学部は地域福祉学部を選びました。

毎日単調な家事に明け暮れる主婦の頭のさびつきを落し、出会いと、刺激と、知るたのしみの週一回の授業は、たのしいものでした。カリキュラムはバラエティに富んでいて、オートメ化が現在問題になっているパソコンの体験学習や、須磨寺探訪での須磨一絃琴の鑑賞など、春の遠足、秋の運動会など、親睦行事もあって、一年生は広く浅い教養課程で、



あっという間に過ぎていきました。

二年生は専門的に勉強するので、私は地域福祉学部を選んだのですが、これがまた後で児童福祉と老人の二つに分かれるのです。高齢化社会時代に、自分にできることは、老人福祉を勉強することだと思ったのです。三年生はグループ活動で、活動の成果を卒論にして卒業するのですが、それまでがんばりたいと思っております。

「わいふ」と私とのかかわり合いは二十年近くにもなり、毎号たのしみにしておりますが、「わいふ」発祥地・宝塚の高木由利子さん時代、当時とも働き主婦だった私が、働く婦人のための保育所運動に関心をもち、高木さんの保育所運動の経過を「わいふ」で知ったことから、読者となったのです。編集が関西から東京に移り、セミプロ並みの投稿に圧倒され、気おくれがしてペンがもてませんでした。が、このたび思いきって投稿させていただきました。

「わいふ」の若い方達は婦人の自立を求めて、主婦専業からの脱出に懸命のようで、私も心

から応援をしたいのです。私は結婚前から働き続け、子供が生まれても、保育所にあずけて家事、育児、仕事と毎日が戦争のような日々を送っているうち、三十年勤続の頃、頸肩腕障害という職業病にかかって退職したのが三年前です。必死の治療の末、何とかなおったので、子供も成人したし、前記の婦人大学に入って、たのしみながらの勉強というわけです。

婦人の自立は、経済的な自立がなくては、あり得ないと思うので、若い「わいふ」のみなさん、がんばって自分の能力を生かして働いて下さい。また、男女同一賃金になるよう運動して下さい。「わいふ」一八七号のミニニュースにも載っていた、男女雇用平等法の集会記事は嬉しく読みました。女たちの熱気で、実効のあるものをかちとりましょう。拙い文ですが、私の現状と経験をかんたんに書きました。

一九八一年のポートピアからはや三年、来年一九八五年八月には神戸で学生のオリンピックのユニバーシアードが開催されます。世



界の各地から、来神されるお客様のために、現在、新神戸駅から一直線にゆける、地下鉄工事が急ピッチで建設されております。どうぞ、「わいふ」のみなさんも神戸へおいで下さいね。

夫婦で作ったマイホーム

神奈川県横浜市 酒井智恵子(54歳)

四月に入ると早々、今年度の固定資産税、都市計画税の納税通知書が来ました。一年分前納するとながしかの報奨金がつくので、一気に支払って銀行を出ると、せいせいした気分になり、今年もお金に苦労なく納められたことが嬉しくなりました。

現在こんな呑気なことをいっておりますが、私共が昭和三十一年に家を持った当座は、そのローンが主人の給料の四分の一ほどを占め、納税期になる度ゆううつな気分におそれました。しかし結婚した時から家を持つことは二人の夢でしたし、それ迄のアパート暮らしで

コンクリートの壁と対決し、二人の幼児の密室保育で少々ノイローゼ気味だった私は、その頃流行しだした分譲住宅に運良く当選した時は、小躍りし飛びついたものでした。もともと地価は今とは比べものにならないほど安価でしたから。

越して来た所は市の郊外にあり、近くに流れる小川には子供達の喜ぶ、どじょう、めだか、アメリカザリガニなどがいて、野には蝶蝶がひらひらと。春には山からうぐいすの訪れ。冬には稲の切り株の残るたんぼに白鷺が翼を広げて舞い下りて、日本画のふんい気をかもし出し、自然の恵みが豊かで、子供を育てるには最高と思いましたが、ちと気になったのは長雨や台風シーズンになるとたんぼが湖のようになることでした。

この不安が現実のものとなったのは、入居して二年後の昭和三十三年九月の狩野川台風の時でした。近くの鶴見川が溢れて、床上浸水の被害を受けたのです。それまで私は水の恐ろしさを知らず、その晩もお風呂につかっている、下水のふたがボコボコいうのでへ



んだとは思ったものの、ただ事ならぬ事態とは気付かず、嵐の中、水防団員から叩き起されるまでは、家中で寝ていました。見れば玄関はすでに水が入り、下駄はブカブカ浮上り外に出て見たものの、泥水で深みも分からず、その上三人目を身ごもって産月に入っていた私は、足がすくみましたが、せり出たお腹をかかえ、長男を背負い、主人は長女を連れ必死に逃げました。

水は引いた後が大変なですね。たっぶり水を吸いこんだ畳は、大の男三人でも持ち上げるのがやっと。タンスや家具の引出しはふやけて長いことあきません。水害騒ぎでびっくりしたのか、次女は早めにこの世に生まれ出ることとなり、暫くは保育器暮らしを余儀なくされました。

これは私達が自分の家を持って初めての試練でした。その後思わぬ主人の入院など、かん難苦難はありましたが、ローンも年毎に負担が少なくなり、十八年後に払い終えた時は、本当に嬉しくて主人と喜びの壺をかわしました。若かった私共も、今では白髪の冠をかぶり、

あの水の中背負って逃げた子供二人は、それぞれベターハーフを見つけ、巣立って行きました。今はあの時生まれた末娘と第二の職場で働いている主人との三人の生活です。振り返れば、苦しかったこともひどく他愛のないことのように思われて、楽しいことのみ多かりきの心境です。旧約聖書の詩篇百三に「人はそのよわいは草のごとくその栄えは野の花にひとしい。風がその上を過ぎるとうせて跡なし。その場所にきいても、もはやそれを知らない」とあるように人の一生は土から出、いつときの野の花のように咲き、やがて色あせてまた元の土に戻るはかないものなのでしょう。うか。そのあいだに、世は絶えまなく永遠から永遠に移り変わるものでしょう。

あばれものの鶴見川も治水対策が進み、かつてのたんぼはお城のようにそびえたつマンションの町となり、住み良い所となりました。我が家も今や名実共にマイホーム、税金だけ納めればよしとなりました。色々なことはありましたが、私達ももしマイホーム建設の苦労を知らずにいたのなら、二人の心の結びつ

きはこんなに固くなかったかも知れませんが、「若い時の苦労は買ってでもしろ」ということわざがありますが、二人で協力しあったからこそ、今日このささやかな幸せがあるのだと私はただただ感謝するのです。

にわとりが先？ 玉子が先？

東京都杉並区 清水 博子（53歳）

最近の世相から、こんなものができました。どなたか作曲していただけませんか。なまじ愛だの星だの涙だのと歌うより、はやるんではないかと思うんですが――。

『たまごにわとり、どっちががどっちも
買う人がいるから 売るとい
う人がいるから 買うとい
う人権問題の セックス産業
世界が笑う 買春旅行
買うのが悪いが 売るのが悪いが
たまごにわとり どっちがどっち

利権がついて回る 政治献金
献金すれば 利権でボロ儲け
税金引きの 庶民は関係ない
脱税裏金 領収証いらない
企業の儲けは かくし金
たまごとにわとり どっちがどっち

安賃金で 職場の花よ
差別されるから 会社は腰掛け
単身赴任の 仕事人間
定年後待つのは ゴミ扱い
もめてる雇用の 平等法
たまごとにわとり どっちがどっち

ソ連が作るからと アメリカも作る
アメリカが作るからと ソ連も作る
核ミサイルに 原子爆弾
どっちが使っても 地球は全滅
放射能汚染で おだぶつだ
たまごとにわとり どっちがどっち

熟年 ながら参加します

東京都新宿区 石川 桂

友だちに「わいふ」を紹介されてから二年、
気がかりな存在ながら、積極的に立ち向かう
気にならなかったのには、「わいふ」という
名称に少々こだわったといえそうである。戦
前、戦後を無我夢中に吹き漂^{なが}されている中で
夫を失っていたので、長い年月、子供が生活
の相棒であった。・女房・とか、妻・という
ニュアンスが私の生活実感の中から消えてし
まっていたのである。

子供たちが順々に独立して離れ去るにつれ、
コンピューターやワープロに手を出したり、
いくつかのグループ学習に参加したり、生れ
て初めての水泳もどうやらものにして続けて
いる。いつの間にか生活パターンがすり替わ
っていたのも、ワイフでなかった気儘さの自
然のなりゆきようであった。そこへ思いが
けぬ娘の縁談がきて、とうとう独りぼっちに

なってしまったが、肩の重荷が降りて、自己
をとり戻せる楽しみで私はむしろ華やいで朗
らかであった。

結婚して、遠いN県の田舎に行った娘に男
の子が生まれた。幸いにも婚家の舅姑ともうま
く納まっているらしい。娘はもうかの地の人
に成り切ってしまったのだ、と思った時に、
言い知れぬ安堵感と共に我が身の孤独が胸を
かすめた。そして、手すさびにふとひろい読
みをした「わいふ」である。

イメージが少し変わってきている。・女の言
いたい放題・というのが引かかった。その
意味での「わいふ」ならばと思った時、眼の
鱗がおちた気持ちになった。おしゃべりをす
るという軽いムードの語いだと思う。今や、
気軽な女のおしゃべりが意味をもつ時代にな
ったのである。男性の談論だけではなく、生
活に根ざした、女・のおしゃべりがないまぜ
られた社会の仕組みが人間には絶対必要なの
だ。一人の男を立て、男に尽す女ではなくて、
男性としての存在を受止めて、男性を生かす
性^{さが}というのが真実のMILFの本性であるかも
知れない。

主婦

福岡県三池郡 三吉野優子

あなたは他人の目ばかりを気にする小心な男ね あなたといるかぎりわたしは伸びない わたしの仕事なんか軽くみてるんだ うさを虫かごにとじこめようとする人なんだ

夕食の食器をあらあらしく

洗いながら

妻はことばの棒で夫を打つ

こんなときに限って

洗い物が山ほどあるんだ

けっこん前もそうだった 仕事なんか早くやめて帰ってこいとそれは強引だったじゃない ちゃんと区切りをつけたいからと何度たのんでも聞きいれようとしなかった

背後の食卓で

夫はだまって聞いている

だまってそこで手まぜをしながら

わたしが自分のことはぜんぶあとに回してあなたのためにセンタクとソウジとセックスさえ提供すればあなたは満足するんでしよう

キツとなって妻がふりむく

夫の顔はかなしくわらっている

「舌切り雀」のおじいさんの顔

無欲な山羊のような顔

おんなはやさしいもの おんなは真綿のように男をつつんでくれるもの 家で男を待っていてくれるもの そんなふうにあなたは思っていたんでしょう こどもを産んで育ててくれる……ちがう 真っ平御免

夫はだまって手まぜをしている

翌朝

折られたツマヨウジのかけらが

ちんまりと

食卓の上につもっていた

なにかを語るもののようでもあり
なにも語らぬもののようでもあり

野性のあさがおが露をうかべて
夏がおわろうとしている

洗え 洗え

ちからいっぱい洗え

せまい流しの上に

山と積まれた夕餉の食器

ひじきを炊いたナベ

豚汁のナベ

バターのこびりついたフライパン

炊飯器の内がま

洗え

きれいさっぱり洗え

きっかりと伏せこんでいけ

そしてあしたは

はっきりと芋でもふかしてやるか

ずるずるとすべり落ちていくこの感じは何だ

ぼろぼろととももろいじゃないか

やっと成形している石膏のように

うすよごれた砂岩のかけらのように

ほろりほろりと感性がくずれていく

留めようとしたって留まらない

実に健全な速度なのだ

そのあとにやってくるのはご多分にもれず

痴呆のような睡気と食欲

豊満な鈍重さと

分別のある低俗さと

同じ形のしぶとい日常

おまえもなるのかよ

そんなふうな主婦に

そして自分のことをばかですあほです

と言って危うい保身をして

公民館の文化祭かなにかで

人の活けた花や稚拙な絵や日本舞踊なんぞを

ほめたりするようになるのかよ

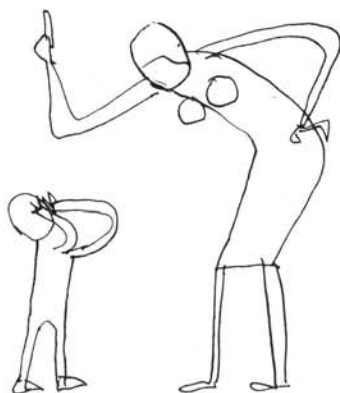
(元・松本をきえ)

投稿ホットライン——あちらを立てればこちらが立たず

対話のページ

絶対、おかしい？

東京都新宿区 田中喜美子



一八七号の「ハンバーグおじさん」の投稿を読んで、唸ってしまいました。

惜しかったなーと思います。お子さんに、「そんなことを言っではいけません！」ときびしく教える、とてもいい機会ではなかつ

たでしょうか。

例えばどんなに幼いときでも、子供が「お母さん！ あの人のお顔、おかしいよ！」なんて指さしたり、笑ったりしたとき、母親はきびしくそれをたしなめるべきではないでしょ

うか。それも、その人にきかれたらバツが悪く、いから困る、などというお体裁のためでなく、他人さまの外観をあげつらったり、笑ったりすることはよくないこと、下等なことだと母親は教えるべきだと思うのです。

でもそんなとき、何といってきかせたら、相手のおじさんを傷つけずにすむのでしょうか。どっちみちもう聞かえてしまっているのですから、「よその方のことをそんなふうにいってはいけません！」とはっきりいってきかせ、そのおじさんに目礼する、というのがどうかしら。でもとっさのことですから、度を失ってしまうのもホント、わかります！

周囲の人にきいてみました。三十三歳の若いお母さんは「ダメ、そんなこといわないの！」といいたま子供の手をギュッとつねり上げる、そして「どうして？」ときかれたら、「シッ、あとで説明するから！」というのだそうです。子供は六歳。たいへん逞しい、しかもしつけのよい、母親を信頼している女の子です。

いきなりひっぱたく、という激烈なお母さ

んもいました。

だけれどこの二人は少数派で、あとの母親は、黙って笑っている、とか、聞えないふりをするとか、小さな声で相槌を打つ、とかいう人ばかりだったのです。みな大学卒、教養ある、人柄のいい人ばかり。

それではっきりわかったのですが、どうやら日本の母親は、子供が他人さまの顔や見かけを何のかのと批評したり、笑ったりすることを、基本的に悪いことと思っていないのですよね。テレビを見て、出てくる人のことを茶の間であれこれ批評することも、この傾向に拍車をかけているのかもしれませんが。自分でも平気で他人の見てくれを子供の前で批評しているのかもしれませんが。

子供の「苛め」が問題になっています。マスコミでは、苛めが最近おこってきたようにいっています。でもよく考えてみると、「デブ」だとか、「ヤセッポ」だとか、相手の肉体的欠陥をあげつらって友だちを苛めるくせは、昔から日本人にあったのです。

今でも肥ってはいませんが、私は子供のとき、ものすごいヤセッポチで、両親の転勤で田舎の祖父母のもとに二年ほど預けられたとき、土地の男の子にすごく苛められたものです。「ヤセッポ」だとか「蚊の腰八本割り」(うまいこというもんですねー)とか、祖父は地主でその町の町長をしていたのにそんな有様でしたから、ふつうの子だったらもっとひどい目に会ったことでしょう。

田舎の人は純朴だと言いますが、この思い出があるので、私はどうも田舎の人の「純朴」さを信用する気になれません。父母の帰京で東京の小学校へ転校したとき、男の子が女の子をちっとも苛めないのです、心からホッとしたこととを今でも思い出します。

もしかすると私たちには、人間としての「礼儀」について、おそろしく鈍感な部分があるのではないのでしょうか。そしてそのことが、子供のしつけにも反映しているのではないのでしょうか。

このことを痛感するようになったのは、一八七号の「生きてます活字人間」で宮前和さんが紹介なさった鹿住釈子さんの「南フラン

ス中学校日記」を読んだからです。フランス人は、子供が言葉の暴力で他人を傷つけることを、ごく幼いときから許さないらしいのです。これにひきかえ、私たち日本の母親の甘さはどうでしょう。

言葉のしつけを含めて子供をきびしくしつける母親は、周囲の人から悪くさえいわれるのです。「のびのび育てない」といって。

でも「のびのび」育てられているはずの日本の子供が、どんな人間になってきているか、最近その結果がはっきり見えてきました。

五月三日の朝日新聞の日仏合同のアンケート結果を見て、私はまたまた唖ってしまいました。だって、あれほど子供にきびしいフランスで、「子供は、だれでも親の老後の世話をするのは当り前」と答えた人が、九二%もいるのですから！日本はいえ五四%！しかも子供の生活費の面倒を見るのは二二歳ぐらいまでという日本人は、フランス人より二五%も多いのです。

おかしい！絶対おかしい！みなさん、どこがおかしいのか、考えてみませんか？

(え・松本をきえ)

情報 コーナー

●映画

「アトミック・カフェ」を

上映しませんか

一九四〇、五〇年に作られたアメリカ政府の宣伝用(プロパガンダ)フィルムや、当時のニュースフィルムを若い製作者が編集

した反核映画「アトミック・カフェ」を貸出します。アメリカが、人類

がいかにアトミック(原爆)の恐ろしさに無知であったかを、改めて思い知らされるパロディックな作品で、マスコミをはじめ多くの方々の反響をいただきました。

この四〇年の核の歴史を振り返るために上映をお勧めします。

◆フィルムは一六ミリ・三五ミリの二種・日本語スロー付

◆貸出料金——六万円

◆資料請求、問合わせ先——〒102

東京都千代田区麹町三—二二—
麹町ドゥーム四〇四 Ⅷ〇三(二
六五) 二三八七 アトミック・カ
フェ事務局上映部

●全P研全国大会

のお知らせ!

◆日時

八月一八日PM一時~四時三〇分

全体会とシンポジウム

八月一九日AM一〇時~PM四時三〇分
分科会

◆場所

八月一八日大阪市ビロテイホール
八月一九日大阪市立労働会館

(いずれも国電環状線or地下鉄森の宮下車)

◆テーマ

大会「P・T・A——子供の未

来のために」

シンポジウム 「今、PとTに問
われるもの」

全体会記念講演 「今・教育の危
機ここまで」 青木一氏

●「ドイツ・青ざめた母」

ロードショー決定!



「わいふ」一八三号でも紹介しま
した「ドイツ・青ざめた母」を見
たい会」の一年の活動とハガキの山

情報 コーナー

がついに上映を実現させました。

これはナチス時代を生きぬいた一人の女性の半生を娘の眼をとおして描いた物語です。戦争を背景に男と女の問題を根元的に提示する

女から女へ継がれた魂

の記録ともいえます。

す。ぜひ見て

下さい。

◆ 場所

岩波ホ

ール

◆ 日時

六月九日土

より 平日12

・30、3・30、6・30

土・日 11:30、2:30、5:30

◆「見たい券」をお持ちの方は、

岩波ホール1Fチケット売場にて

前売券二〇〇〇円を一一〇〇円で

当日券一五〇〇円を一三〇〇円で

交換します。

なお、見て語る「連続シンポジウム」も企画しています。

◆連続シンポジウム

第一回六月九日／第六回七月一四

日まで毎週土曜日PM二時〜四時、

会費四〇〇円で岩波シネサロン(岩

波ビル9F)で開きます。

◆問合せ先 〒151東京都渋谷区代

々木四一八五 東都レジデン

ス四一〇号 Ⅷ〇三三七〇一六

〇〇七「ドイツ・青ざめた母」を

見たい会

●自然体で

性を語る本

「わいふ」がまだ、いまの半分の厚さのころ、スペキュラム(子宮鏡)で自分の子宮口をのぞく試みに挑戦したわいふ会員の宮淑子さんの、ダントツに面白かったレポート、おぼえていらっしゃる方あ

りますか?

あれから六年(かな?) いまや第一線のフリーライターに成長した彼女が、第二作「屈折した少女の性」「おんな 生きる・まなぶ」

に続いて「セクシュアリティ」(現代書館・一四〇〇円)を出しました。

「いま、性を見つめ、語るのは女

たちではないか、という気がしき

りとする。

つねに一方の性に抑圧され、支配

されてきた「暗黒の大陸」を持つ

女たちだからこそ、その呪縛を解

き、自らの主体を取りもどさなけ

ればならない存在なのだ」

彼女はこの言葉の通り、男たちの

都合のよいように作られてきた性

にまつわるタブーをこの作品の中

で一つ一つはぐしていつています。

もしかするとそのタブー観は、あ

なたの中にも潜んでいるかも?

この本を読んでみて下さい。

●おねがい

宮さんはいま、職場で上司に、性的な辱しめを受けた体験を持つ女性を探しています。辱しめといっても強姦されたなどというのではなく、露骨なさそいを受けて、ヒジ鉄をくらわせたならその後いやがらせをされた、とかいうのもいいのです。秘密はもちろん厳守しますので至急宮さんまでご連絡を。連絡先〇三二四八四一四一九一。

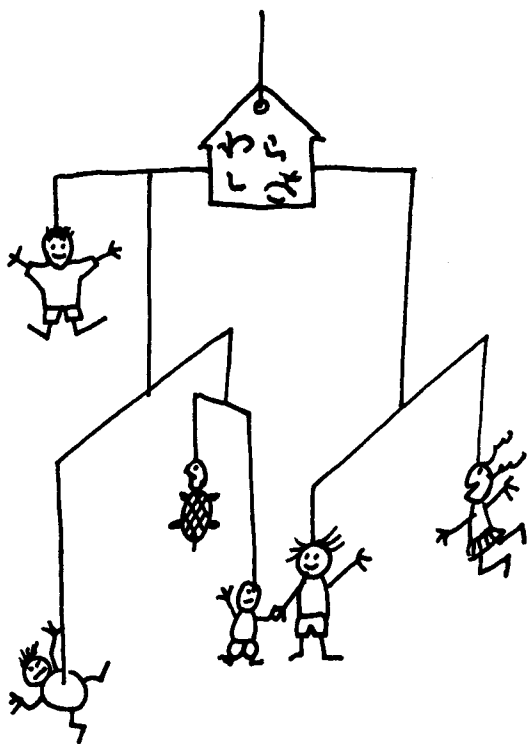
編集部



保育園初体験

わらしこ保育園での三カ月

東京都府中市 赤井久美子



ひよんなことから、突然三歳一カ月になる下の子を、保育園に預けなければならぬことになった。これまでも、子供達を預けて仕事をしたいとは、何度となく思っていたのだが、求職中ということでは、とても保育園にはいれっこないとはじめから諦めてもいたし、正直なところ、保育園に預けるということに對する抵抗感もあったのだと思う。

まず、福祉事務所へ行く。予想通り、認可保育所はどれも一杯で、スタンバイしている人も何十人ということだった。それで、無認可保育所のリストをもらってきて、近所うなところから、片端から電話してみた。

最初の三カ月ほど立て続けに断わられて、さすがにメゲそうになったが、気を取り直してまた電話する。次のところは、空きがあることはあると言う。しかし「ウチは高いヨ、四万だよ、それでよけりや連れて来なさい」という声がいかににも疲れたような、冷たい感じがして、どうにも気が進まなかった。

やっと五回目に電話したところが、優しいような明るい声で、空きがあるという返事だっ

た。「一時から三時までがお昼寝の時間ですから、その時ならゆっくりお話ができますから、一度いらしてみて下さい」ということで、細かい配慮が感じられた。早速その日の午後、子供を連れて行ってみた。

商店街と隣接した住宅街の、ごく普通の住宅を保育園にしたものだった。手書きのささやかな看板がなければ、全く普通の住宅で、保育園というイメージはなかった。家も古く、庭も狭く、陽当りもそれほど良くなく、無認可……” という言葉が胸に広がって、しばらく躊躇したが、先程の電話の優しいような声を頼みに入ってみた。お昼寝の時間というところで、ほとんどの子は寝ているらしかったが、赤ちゃんが二人、保母さんに抱かれてのどかに日なたぼっこをしていた。

「雨が降らない限り、毎日近くの小山や農場にお散歩に行きます。食事やオヤツはすべて手づくりでやっています……」ということと、私と同年輩の保母さん達の印象も良く、ここなら信頼できそうだ――と母親のカンも働き、入園させてもらうことに決めて、準備する物、

注意することなどのお話を聞いた。

常日頃、母親一人で子育てなんかをしてはロクなことはない、子供達の集団の中でこそ子供は健全に育つ、と言いまし、信じてもらいたはずなのに、いざ我が子を保育園に入れるとなると、みっともなく動揺し、余程心もとない感じを与えたのか、帰り際には「ではお母さん、がんばって」と保母さんから励まされたりした。

翌々日から通うことに決めて、翌日はお昼寝用の布団を友人に頼んで乗用車で運ぶことにした。洗濯したカバーを掛け、名前を書き、布団の用意をしていたら、フイに涙があふれてきた――まるで里子にでも出するような心境だった……。布団を運び入れて、乗用車で運んでくれた友人に励まされて、ホゾを固めた。とにかく明日からがんばろう。

通うことになった「わらしこ保育園」は、我が家から自転車で二十五分ほどの所にあり、六畳ほどのDKに十畳ほどの洋間、八畳の和室からなる家である。いわゆる保育園とか幼稚園とかいう建物ではなかったのが、かえって子供にとっては良かったようだった。

ダレソレちゃんちに遊びに行く、ということには慣れていたし、お友達もおばちゃんも沢山いるけれど、お昼のご飯もオヤツも台所でおばちゃんがつってくれるのを食べるのだし、子供達の好きなコソツと隠れることのできるスミッコや、押し入れもあって、ダレソレちゃんちに遊びに行く、というのとあまり変らない感じがするらしく、なじみやすかったようだ。

朝、泣かれるのは、覚悟をしていたものの、やはり辛く、こちらにも泣きたい思いであったが「姿が見えなくなれば、ケロツとして元気に遊び出しますヨ」という保母さんのお話を支えに、心を残すことを止め、気持ちを切り換えるように努力していたら、二週間ほどで、元気に「いってきまーす」「いってらっしゃーい」が言えるようになった。

そうするうちに、お迎えに行っても遊びに夢中で、なかなか帰ろうとしなくさえてきて、連絡帳に「陽ちゃんは(子供の名前は

陽介)もう「わらしこ」のボスのような存在で、たのもしいほです」と書かれるほどになり、すっかり「わらしこ」の「わらしこ子」になっていった。

家にいた時は、午前中の二時間ほどは、家事を片付ける都合上、いけない、いけないと思いがちでもテレビ漬けにし、お昼前の一時間あまり近くの公園に連れて行き、午後からはお友達の家に行ったり買物に行ったりをして、親の都合でお昼寝もしたりしなかったりという毎日だったのが、保育園に通うようになってからは、午前中近くの小山や農場で目いっぱい体を動かして、お腹がペコペコになったところでお昼ご飯をシッカリ食べ、お昼寝もグッスリということになり、お昼寝のあと、オヤツを食べてから、お庭の砂場などで充分遊ぶという毎日になって、目に見えて生き生きと子供らしく、たくましくなっていた。

年齢が上ると、認可保育所の受け入れワケが広がるということもあって、無認可保育所はどこでもそういう傾向にあるらしいのだが、

「わらしこ」でも園児の構成は0才児・一歳児が主体で、十五名ほどの園児のうち、三歳児は、うちの子ともう一人女の子がいるだけだった。同年輩の子が少ないということも、少し気になったのだが、小さい子と遊ぶということとは、末っ子のうちの子にとっては、とてもよい体験になっているようで、親が思ってもいなかった面が出て、驚かされた。連絡帳から、保母さんの記述を拾ってみると、

「陽介くんは、いつもやさしいお兄さんです。今日の朝は、小さい子がぐずり気味で、アチラコチラで泣き声——そうすると、陽介くんがとんで行って、オモチャを渡したり、名前を呼んであげたりしています」

「お散歩の帰り、ヨシくんが歩くのをイヤがって泣いて転んでいると、陽ちゃんが行って手をとって抱きおこしてあげ、手をつないで連れてきてくれました」

「陽介くんは、とってもゆみこちゃんのことをかわいがってくれています。遊んでいる時も、ゆみこ、おんぶしてあげるからおいで」と言ったり、ゆみこ、こっちへおいで」と言

ったりしてよく面倒をみてくれています」

保育園に通い始めて、まず気が付いたのは、送り迎えの時に顔を合やす母親達の表情が、上の子の幼稚園の時の母親達のそれとは違うなあ、ということだった。お日さまのように屈託がなく明るい人も、淋しげな人も、エネルギッシュな人も、いろいろいるけれど、皆とにかくリンとした厳しさを感じさせられるのだった。

当然、父親達の多くも、母親と五分五分で育児に関わっているようだ。背広の上にヒョイとオンブする手つきもなかなか堂に入ったもので、ママコートのケープをひるがえして自転車に乗って来る姿は、月光仮面のように頼もしく感じた。十二月初めに開かれたバザーでは、運搬、テント張りから、餅つき、ヤキソバづくり……と、父親達の活躍は目ざましく、上の子の幼稚園の行事で父親の協力を求めた時の申し出た人の少なさと対照的であった。

それでも「わらしこ」の場合、母親達の職



業は、自営、パートの他は、保母、教師、公務員に限られていて、まだまだ女性が働きつづけられる職場はごく一部なのだと思います。

保母さん達は七人で、三人は子供のいない若い人達だが、あとの四人は私と同年輩であり、就学前の子を他の保育園に預けて働いて

いる人達である。二人の子をそれぞれ違う保育園に送ってから勤務につく保母さんは「朝はもう地獄ですよ」と言いながらも、たくましい生命力にあふれていて、私にはまぶしかった。

保育園については全く無知であったので、無認可保育園という点、劣悪ベビーホテルのイメージと重なって、あまり良い印象を持ってはいなかったのだが『保育園——〇番』出版記念トークに参加してみて、それこそピンからキリまであり、ピンの方は、むしろ認可保育園に勝る保育をしているのだということも分かってきた。

厳しい労働条件にもかかわらず、むしろそれだからこそ、使命感に燃えて子供達に愛情を注ぎ込む保育をしているのだった。『わらしこ』でも、保育料三万八千円で、園児十五名に対し保母七名で、特例まで含めると午前八時から夕方六時までの保育をしている。いかに厳しい経営内容・労働条件が分かるとうとうものだ。それでも保母さん達の保育に対する熱意は素晴らしい。部屋の片隅に座って、

産休明けの赤ちゃんをしつかりと胸に抱き、じっとその目を見詰めながら授乳していた若い保母さんの姿は、保育の原点を見るように感動的であった。

今年の冬はとにかく雪が多かったが、初めて大雪が降った日、近くの認可保育園の園庭はまっさらで、園児達は外へ出してもらえなかったようだったが、『わらしこ』では帽子をかぶせて雪の中をお散歩に出かけた。都会っ子には珍しい雪の中で、子供達は元気にしゃぎまわったらしい。ところがうちの子は、今までの過保護ぶりを露呈して「……手が冷たくなったようで、もう半ベソです。雪合戦をはじめたとたんに『ワーン』と泣き出し、もう一步も動けない様子で泣き続けました」という有様であった。

雪が降ると自転車に乗れないのでバスを利用することになるが、バス停まで子供の足だと二十分近く歩かねばならない。初めて雪が降った日には、手が冷たいの足が痛いのとワンワン泣いてしまつて、どうにも歩かず、行

きはタクシー、帰りは、保母さん達のあきれ顔を気にしながらも、オンブした。それから、雪の日はタクシーやオンブでしのいだのだったが、五回目の大雪の日は、風邪から持病の腰痛がでて、どうにもオンブでできる状態ではなく、タクシーも拾えそうもなく、

とにかくなんとかとしても歩いてもらわねば——と、愚かにもご機嫌とりのキャラメルなどを用意してお迎えに行った。ところが、雪の降る時も、降った後も「わらしこ」ではお散歩に連れ出してくれたので、すっかり雪に慣れていて、吹雪の中、バス停までの五分ほど、バス停からの二十分ほどを元氣一杯歩き通してしまつたのだ。初めの大雪から一カ月ほどでのこの変りように、つくづく自分の育児態度を反省させられてしまった。

丁度そういう時期であつたのかもしれないが、保育園に慣れてからの発達ぶりは目ざましかった。着替え、ボタン掛け、ヒモ結びなどがとても上手になり、手先の器用さが増すとともに、すべての面でしっかりしてきた。

保育園の子は、しっかりしているが、表情

が乏しい——などと言う人達がいるが、少なくとも「わらしこ」の子供達には当てはまらないと思う。大きい子も小さい子も、コロコロと仔犬のようにじゃれあつて遊んでいる姿には、生命力が躍っている。

入園したのが十一月の半ばで、寒さにむかつており、お迎えの時は北にむかつて自転車で走るので、北風のきつい日などは泣きたい思ひだったが、保育園に着いて、充分に遊び込んでハレバレと満足しきつた子供の顔を見ると、疲れも寒さも吹き飛び、帰りは北風も背中を押してくれるようで心が弾んだ。

孤独の子育てから解放されて、本当に子育てを楽しむ余裕が出て来たようだ。そして、送り迎えの時に目にする赤ちゃん達が、もう可愛くて可愛くて、自分でも思いもよらなかつたことなのだが「ああ、もう一人産んでも良いな……もう一人欲しいな……」という気持ちすらわいてきたのだ。

「わらしこ」との出会いには、子供にとってばかりでなく、私にとってもとても意味深い。

私は久しぶりに、多くの人達に支えられて生きていく、という快い実感を得ている。今から思うと、現在常勤の仕事を持っていない限り、保育園には入れないものと、ハナから諦めていたのが悔まれる。保育園に対する根強い偏見に、やはりどこかでとらわれていたのも悔まれる。上の子にも、コロコロと仔犬のようにじゃれあうという体験をさせてやりたかつた。

もちろん保育園にもいろいろあるし、保育園そのものにもいろいろ問題があるだろう。しかし、家庭にもいろいろな家庭があり、家庭育児にもいろいろ問題があるのである。折から朝日新聞の『子供新時代』で、核家族で育つ乳幼児の人間関係の乏しき、テレビ漬け育児などについて取り上げている。

何も知らずに飛び込んで、無我夢中で過してきたこの三カ月余りの保育園体験記である。初体験に、緊張し、驚き、感心し、感動し……の三カ月の後は、一体どんなことが見えてくるのだろうか。

(え・岩本節子)

母親から見た山村留学の記録（その三） もう一度なぜ

文・こくぶんひろこ

智^{とも}よ、自然に学べ



初めての登山（標高二千メートルの小遠見山に）

三日坊主の八坂暮らし

とうとう夜が明けてしまった。頼まれていた原稿の締切りが来てしまい、昨夜十一時過ぎ、智が眠ってからやっと始めたのだ。しかもほとんど書き上げてから、ちょっとした考え違いに気づいたもので、結局書き直す羽目になってしまった。

大変！ 早くしないと智が起きてくる。ゆうべはあんなに遅かったのだし、疲れてもいたはずだから寝坊はするだろうけど……、と思ったら、背後で声が出た。「お母さん、また徹夜したの。寝ないからだに悪いよ」

六時十五分。八坂での起床とさして変わらない時間だ。しかも寝不足や疲れなどみじんも感じさせないさわやかな顔。しまった、と思ったがもう遅かった。彼が東京にいる間ぐらい、徹夜の青い顔など見せたくなかったのに……。

「お母さん、パンないの。ぼくが朝ごはん

をつくるから、少し寝たら……」

冷蔵庫をのぞきながら、智がいう。八坂に行く前から「日曜日の朝ごはん」という子どもの料理絵本を見て、なにかつくったりした子だったけれど、なんという嬉しい言葉。

もうパン屋のおじちゃんは起きているから……と自分でパンを買いに出かけ、やっと原稿を書き上げた私がうとうとしている間に、台所からいいにおいがしてきた。焦がしたのか、煙がもうもうとたちこめている。

「ベーコンもツナもきゅうりも入れたからね。熱いうち食べた方がうまいよ」

テーブルには、焦げた大きなオムレツを半分ずつのせた皿とトーストが並び、オレ인지ジュースまでコップに注いである。

オムレツはなかなかの味だった。智の好みで、バターを先につけてから焼くトーストもバターがよくしみこんでおいしい。

それにしても、たった四カ月なのに、なんという変わりよう。着がえたパジャマは一応たんだのであるし、食事が終われば、「いただきます」と頭を下げて、さっさと皿を流しに運ぶ。

「お手伝いの予定をつくらなくちゃいけないんだ」

と机に向かって、一週間の予定表を書き、「月曜日、玄関はき……智 猫のえさ……お母さん」など、こまごまと決めている。

しかも疲れを知らないのは驚くばかりだ。朝九時、兄弟のように仲良くしていた悠治くんがプールへ行ったと聞くと、どうしても行きたいという。神宮プールで三時間、五分と休まず泳ぎ続けた。そういえば八坂小学校からの通知表に、「クロールで二百五十メートル、平泳ぎで二百メートル泳ぎました」とあってびっくりしたのだが、事実、ものすごい馬力泳ぎを見せてくれた。麻布小学校では二十五メートルの級をもらっただけだったのに……。



六年生と中学生は木曾駒ヶ岳へ

午後、悠治くんの家から帰るとき、バスに乗りうとしたら智がいった。

「お母さん、このくらいは歩かなくちゃだめだよ。八坂じゃ毎日もっとあるくんだから」

千駄ヶ谷から麻布台。バスを二つ乗り換えて行く距離だ。荷物が重いから、としぶる私の手からバッグをもぎ取るようにして、

「こんなもの、軽い、軽い」といってさっさと歩き出す。以前は、いっしょに歩けば小さなバッグでさえ私に押しつけ、自分は手ぶらで勝手気ままに歩いていたものなのに……。

夕ごはんの後は、後片づけを手伝ってお皿を拭いてくれた。

「ぼくはお皿拭きがうまいんだ。母さんが、ぼくに頼むと安心だっていつもいつてる」

と得意そうな顔。

しかし、こんな生活もほんの数日だった。

パジャマや着がえも放り出すようになり、読んだ本は床に散らかしっぱなし。だらだらと寝転んでテレビを見、マンガに読みふけり、「お手伝いは……」といっても、「いまやる」「いまやる」というばかりで、なかなか腰をあげない。自分で決めた玄関はきも、なんども催促したあげく、たった一度やっただけ。荷物も私に押しつけるようになってしまったし、起床時間だけはさすがに習慣づいていたが、夜はいつまでたっても寝ようとはしない……。もとに戻るスピードもまた驚くばかりだった。

だが、考えてみれば、これも親のせいなのだろう。私自身、整理の下手ならしない母親だったし、ガミガミと口うるさくいつてはいても、結局自分で手を出してやってしまったりする。朝は智に起こされて、「もう少し、もう少し……」と寝こんでしまうのが常だし、夜は自分が遅いものだから、つい許してしまう。クーラーのない部屋の暑さを理由に外食

ばかりするようになり、私が会社に行っている間の昼食も、お弁当をつくってやったのはほんの数日。たいていは、五百円を渡してマクドナルドや近所のおソバやさんへ行かせ、おやつもほとんどは子どもまかせ。規則正しい生活とはほど遠い毎日だった。

「育てる会」からの通信にも、「くれぐれも八坂での生活を乱さないように」とあったのに、いまにして思えば、私は顔むけできない母親であった。

親たちの動播

十六日間の夏休みはアツという間に過ぎた。私がいけない日中は、児童館へ行き、友だちの家へ出かけ、日曜日はおじいちゃんの家、親戚の家……と忙しい。やつと取れた私の夏休みには、デイズニールンドへ、友人が貸してくれた山梨の別荘へ。

「十六日なんて、ほんとに短くて、ゆっくり話す間もないのよ」

と、二年目のあるお母さんがいていたが、まさに事実だった。こちらは八坂の話が聞きたくて、なにかにつけて水を向けるのだが、子どもは思ったより話したがらない。口にしたくないほどつらかったのか……と思えばそうではなく、「八坂は楽しい？」と聞けば、

「楽しい、なんてもんじゃないよウ」

と、生意気な返事。智にとっては、取りたていう必要もないほど当り前の暮らしになってしまっていたのだろうか。山本先生が

「六年までいて最長記録に挑戦してみろよ」

といったと聞き、子どもに聞いてみると、「ぼくはどっちでもいいよ。でも、二年はいる。ううん、やっぱり三年にしようかなあ」

そして八月十六日、新宿駅に集合した子どもたちは、みんなイソイソという感

じで帰っていった。口々に別れの言葉を呼びかける親たちを見ようとせず、「じゃあねえ」とあっさりしたものだ。

そのあと親たちは、近くの喫茶店に集まって、休み中のあれこれを語りあった。智のように三日坊主の子も多かったけれど、

「じっくり落ちついてきた」「こちらがいいさえすれば、一応やるようになった」

「我がままをいわなくなった」

など成果はいろいろ。山村留学の意義を大いに確かめたのだが、実際はそうばかりでもなかったらしい。

女の子の間には、ずいぶんとトラブルがあったという。女の子三人の組合わせともなれば、二人が仲よくすれば、ひとり仲間はずれにされる。自己顕示欲の強い子がいれば、自分に引きつけたくて、他の二人を仲よくさせない。私自身の経験からいっても姉たちやクラスメートの間にそういうことはあったのだから、八坂での姉妹関係では当然のことだろう。

「あの時、せりはなんにもいわなかったけど、女の子たちの間で壮絶な闘いがあったのよ。せりの洋服が畑に捨てられちゃったことだってあったんだから」

と三年目の斎藤さんがいつていたが、今年もそれに近いことはあったのかもしれない。ものがなくなる。大事なものがかくされる。それは学校にまで波及し、留学生が問題視されたこともあったそうだし、いっしょに暮らす子と合わなくて、泣いて、帰るのをいやがった子もいたという。

九月に八坂を訪ねたときは、人一倍たのしもうにしていた子なのだけれど。

もちろん女の子ばかりではない。我慢することの多い暮らしのハケ口で、いんさんな弱い者イジメをする子もいないではなかった。そういうことを子どもたちは、なぜか親にいわないそうだが、夏休み、八坂の生活を知りたくてたまらない親たちは、あれこれと問いただし、ぽろぽともれた一言に動転してしまう。

「ガケから突き落とされたりしないかし

ら。ケガでもさせられたら……」

そんな心配から、親同士、電話をかけた、情報飛び交い、パニックのようになったこともかつてはあったという。

「なんでもメンメンと手紙に書いてきて、わたしもいっしょに悩んじゃったわ。それでも返事には、あなたにもきつと悪いところがあるんだから、なんて書いて……。でもそれも子どもには可哀そうだったのよねえ。」

『そういうときは、なんでもそちらの母さんにいいなさい、っていつてあげるのよ』って、二年目の人がいつていたけれど、そうだったなあ、って思ったりして……」

ある女の子のお母さんがいつていた。

夏休みは親にとって、もう一度山村留学を考える時期でもあった。

私たちは 子を捨てたのだろうか

短い間とはいえ、いっしょに暮らして



木曾駒への道はけわしい

みると、いなくなった後の寂しさはたとえようもない。一人になってホッと気が抜けたこともないではないが、甘えてまつわりついてきたときの感触を思い出したりするとたまらない。三匹の猫たちがいなかったら、耐えられたかどうか……。そんなときふと、長いこと会わなかつ



山はソーカイだなあ

た大学時代の友人に電話をしてみる気になった。

しかし、久しぶりに聞いた友人の声は厳しい。

「まア、あんな小さい子を二年も、三年も離しておくの。それじゃあの戸塚ヨットスクールと同じじゃないの。ま、あな

たの場合は父親がいらないんだし、どうせあちこちに預けるんだからいいでしょうけど……」

山村留学を決めて以来、これと同じ言葉をとのくらしい聞かされたことだろう。それでもTBSレポートで子どもたちの生活を見た人たちや、夏休みに智に会った人から、

「よかったわねえ。あなた、あそこにやって正解だったわよ」「智ちゃんの顔が違ってきた……。あの子にはほんとにあつてたんだわ」などといわれ、意を強くしているところだったから、友人のこの言葉は、思いがけなく私を打ちのめした。この人は、一人息子を溺愛していたけれど、理に合わないことがあれば、他人の子でも叱りとばすほどリンとしたものを持つている。

「五年生、六年生ならまだわかるけど、そんな年の子を親が見てやらないなんて……。わたしはね、幼稚園のとき、先生から、子どもは家に帰ったとき、母親が

『おかえり』って迎えてやるのがいちばん幸せ、っていわれたのが身にしてみても、それだけは守ってきたわ。あなたはともかく、両親そろっている人が、だなんて考えられない」

留学生に片親の子は少ない。訪問日には両親揃って来る人が多く、人なみ以上の愛情が私には感じられる。

そんなに小さい子を……とは、かつて私を可愛がってくれた老人からいわれたことだ。不幸があつて十数年ぶりに電話をしたとき、この人は電話の向うで私を叱りとばした。

「なんという母親だ。自分で育てられないのなら、なぜひとりで子どももぞ生んだんだ」

そうじゃないの……と心の中ではないながらも、なんにもいえず電話を切つて、私はシュンとしてしまったものだ。

留学生の親たちは、だれもがこんなことを経験している。ことに可愛い孫を引き離された祖父母の反対はすさまじい。

「毎日毎日、可哀そうに、ああ、いま頃は……なんていわれて、もう針のムシロ。わたしの母にまで電話で責めるのよ」と、おしゅうとさんと同居するあるお母さんがいつていた。それでも、祖父母がいつしよに来る家族もかなりあつて、一度八坂に来るとむしろ熱心な支持者になつてしまうという。

私の場合、子どもを離すことに逡巡はなかった。けれど、いま考えれば、やはり勇気のいることだったと思う。なにが起るかわからない山村の暮らし、崖崩れ、落雷、危険な動物……。事実、この六月、まむしに噛まれた子もいた。十五センチほどの小さなまむしで、すぐに手当てしたからコトなきを得たけれど……（もっともその子は、まむし酒をつくらうと、自分でつかまえたまむしに噛まれたのだ）。

私たちは決して子を捨てたのではない。いつとき、八坂という大きな手にバトンタッチしただけなのだ。会の雑誌「育て

る」に、理事長の青木先生がこう書いている。

「こどもの環境を思い切つて変えてみることに、これが山村留学の基本的な考え方です。生まれてこのかた、ずっと続いている家族関係―親子・兄弟―そして友人学校関係、都市化社会環境、これらとのかきずなを、一時的に断ち切り、自然の中に子どもをそつとおいてやる。これが山村留学です。

親や教師やその他のすべてのものが、子どもに一方的に働きかけることをやめてみるのです。自然の中に、一人、ぽつんと置かれた子どもは、最初、戸惑い、時には悲しみます。しかし、一、二カ月のうちに、子どもの心は「自然」に働きかけ始めます。自分の考えで、自分の意志で行動を起こします。そしてこれを制止するものはありません。子どもは目の輝きが出て来ます」

一人になって、子どもたちのうちに湧き出てくる力を青木先生は「子供力」と呼

んでいる。

さて山村留学への反論はまだいろいろある。あつて当然だと思ふが、中でも、矢郷恵子さんの「この町に育て」という一文は、山村留学のことは全く書かれていなかったにもかかわらず、私の胸を突いた。

矢郷さんは、世田ヶ谷区でもう十年も自主保育や地域運動を続けてきた。「自然がなくても、私が生きていく町だから、この町で育ってほしい」との願いから、近くの公園を自分たちで少しずつ整備して子どもを育て、一本一本、木を植える運動もしているという。私はいまのアパートが好きだけれど、町に愛着はない。生活費を購うことに精いっぱい、地域活動をする時間もない。そのことも私は息子に託したいと思う。自然のほんとうの姿を知った彼が、いつか東京のどこかに住みつくことになるとしたら、そのときこそ、なにかを始めてほしいのだ。いま植える一本の木を、私は息子に植えて

いるのかもしれない。だから、智よ、いまはのびのびと大きな懷に抱かれていらつしやい！

山村留学の費用をめぐる

山村留学が話題になるとき、いちばん論議の的になるのは費用のことである。それはいい、うちの子もぜひやってみたい、と身を乗り出した男の人も、いざ費用の話を開くと、「それじゃ、とてもおれには無理だなあ」とため息をつく。「まア、大学生なみじゃないの。それだもの、よくて当り前だわ」という人もいた。

締め屋のはずの大家さんは、意外なことに「あら、あなた、高くはないわよ。うちの子が出た小学校なんか、今年、月謝が五万円ですって。それに塾へ行つて、何か習つたら、それくらい出ちゃうでしょ。食べて、寝て、教育までしてもらう

んだから、安いくらいよ」

山村留学の月謝は、五十八年度、八万円、五十九年度、八万三千元。入園時には、入園金、十五万円、施設費、十五万円（二年目からは五万円）、学校債、二十万円（退園後一年据え置き無利子）に月謝を加えて、計五十八万円を支払った。入園のお金は進学保険が満期になっていだから十分だったが、月八万円は正直、つらい。毎月、銀行に払い込むと、からだの力が抜けそうなほどホッとする。いちばんつらかったのは、私自身が八坂に行く費用や会と農家に預けておく諸雑費、父母会費などを全く考えずにいたことだ。八坂には、年に少なくとも五回は行かなくてはならないが、一日行つても二―三万はかかる。まして、数日にわたり、夫婦あるいは家族全員で行くとなれば大変だ。預け金は、病院にかかる費用、学用品や身のまわりのものの購入費、貸しスキーや登山など行事の費用なのだから仕方がないのだが、二万、三万と、なくな



センターでミーティングのひととき

るたびに送らなくてはならない。ことに中学生はこの費用が大変なのだそうだ。

親たちは、自営業や共働きの多いが、みんながみんな裕福なわけではないだろう。子どもをだすために働きだしたお母さんもあるしどの家庭でもそれぞれに苦労して捻出しているに違いはない。

「月謝は私の方から出すことにして、んで、給料からボンと十六万円出てっちゃうのよ。二年間、洋服一枚買えないわ」と、二人の男の子を出しているひとがいていた。

私の場合も、女一人、なんとかやって

いるけれど、夜中までせつせと会社以外

の仕事をして、貯金は一銭もない。まわりの人たちは、「病気になるたらどうするの」「大学へ行く費用だって大変よ」

というが、病気にはならない、なったらそのときのこと、大学は行きたければ自力でやらせるわ、と楽天的に考えているだけなのだ。もし、いまの仕事がなくなったら、食住が保証されるお手伝いさんに住みこんでも、続けさせたいと思っている。要は人それぞれの考え方ではないのだろうか。

ところで払う側にとっては高いのだが、払われる側にとってはどうなのだろう。

月謝のうち四万円は農家に支払われるという。会に残りのお金で二十四時間勤務の先生を雇い、一週間の子どもたちの食事を賄い、様々な行事を行なうのだから、とても儲かっているとはいえない。

青木先生は、

「かかるから、それだけいただくのですよ」といつていたが、事実、会の運営は、

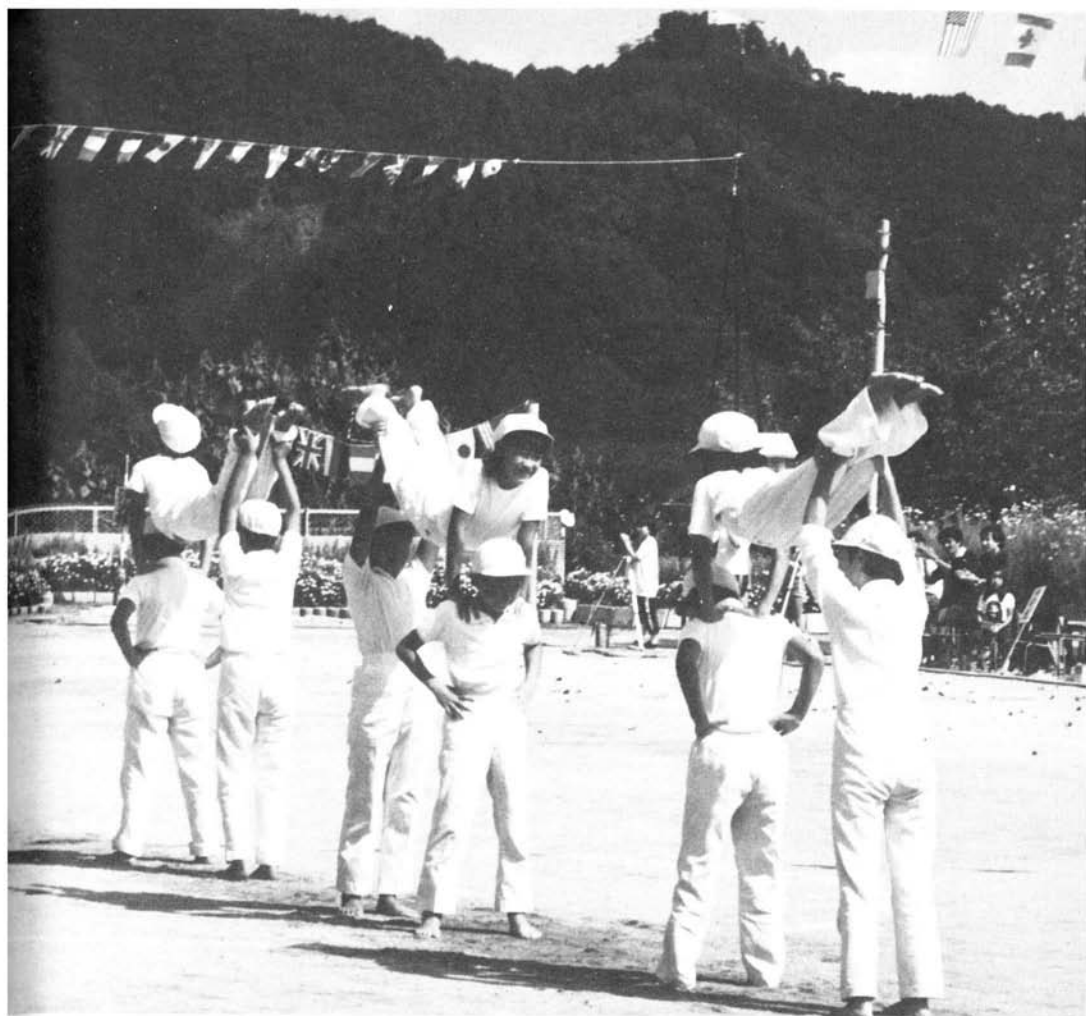
ボランティアや助成金に支えられている。センターを建てたための借金が、まだまだあるとも聞いた。

長野県出身の青木先生は、十六年前、勤めていた両国小学校をやめ、独自の教育をめざして、任意団体としての「育てる会」をつくった。最初は雑誌「育てる会」を発行することからスタートし、その費用を作るために、週末は長野から東京まで中古車を運搬し、露店でもおちゃを売ったこともあったそう。山村留学を足させるまでに七年の準備期間がかかったというが、村を説得し、この組織をつくり上げる苦労は並たいていではなかったであろう。

「その間、女房に食べさせてもらったよ、うなものですよ」

と笑っておられたが、財団法人の理事長になり、教育者として名を知られる今も、失礼ながら、大変質素なように見受けられる。

私たち父母が、山村留学にこれほど熱



意を寄せるのも、この青木先生に負うところが多い。ひとりひとりの子どもたちの特性を見つめる目の優しさ。子どもたちや父母が引き起こす問題を、ひとつひとつみごとに教育テーマに転換してしまふのには、敬服せざるを得ない。少々頑固ではあるけれど、子どもたちに語りかける言葉を聞いていると、あのおだやささ、温かさはどこから出てくるのだろうかと思ってしまう。八坂での青木先生は三十九人の家族を守る父親だ。いつも誰かがひざにのり、まつわりついて甘えている。

戸籍上の父はなくとも、この大きな父親を得た智は幸せだと思う。

はだしの運動会

八坂小学校の校庭に万国旗が翻っていた。白線が引かれ、テントが張られ、可

愛い入退場門が設けられている。

九月十八日。雨続きのこれまでを思えば、まさに神の恵みともいいうべき晴天だった。八月に新宿駅で見送って以来、一カ月ぶりで子どもたちとの再会だ。

赤帽子でならんだ子どもたちの中に智がいた。また背が伸びた。褐色につやつやと日焼けして、顔もまた細くなったような気がする。

村人たちの一団の中に農家の母さんたちがいた。親たちは、子どもより先にそれぞれの里親のもとに駆け寄る。智の母さんである大さんが、いつものように目がなくなるほどの笑顔で迎えてくれた。「子どもたち、毎日、一生けんめい練習したでねえ、よく見てやってくださいねえ」

四月に來たときと違い、自分の子だけでなく、どの子も懐かしい。

「おばちゃん、わたしねえ……」とやわらかな大阪なまりを響かせてすり寄ってくる敬子ちゃん。「あら、おばちゃん、

若づくりしちゃって」と、稲葉さんをかからうおシャマな祐子ちゃん。智の兄弟である伸之介くんの照れた笑顔。

運動会が始まった。整列した子どもたちののはだしの足がまぶしい。小石ひとつなくきれいにならされた土が気持ちよさそうで、私たちまで靴を脱ぎたくなくなってしまふ。

はだしの足が走る、踊る。みごとな鼓笛行進が校庭を彩る。村の子も都会の子もなかった。全校でわずか六十五人だから、どの種目も二―三学年合同。リレーは全員。全員の種目が六つもあり、その間に午前と午後、紅白対抗の応援合戦があって、子どもたちは席にいるひまもない。東京の学校だったら、ほんの数種目出るだけで、せっかく出ても、親には子どもの姿が見えないこともあるだろうに……。

一年生のときには、気管支炎で休んでしまったから、私たち親子にとっては初めての運動会である。村の消防団のはっぴ

を来て走る競争で、智が一等をとった。

声が枯れるほど応援しながら、不覚にも涙が出た。長いこと夢見ていた山村留学が実現して、いま私はこの八坂で子ども

の運動会を見ているのだ。

「東京だったら、うちの子なんか、あんなことさせてもらえないのにねえ」
白組の応援団長をつとめた六年生、正樹くんのお母さんがしみじみといっていた。

「あら、うちの子、あんなかっこいいことしてる！」

と、頓狂な声をあげたのは、全員種目の棒体操で、壇上で指揮をつとめた宮川友くんのお母さんだ。その昔、福島田舎に疎開したときは、都会からきた子どもなんにできても長はやらせてもらえないと、兄がくやし泣きしていたけれど……。

そして私たち父母にとっても、忙しい運動会だった。PTA種目の大玉引きリレー、子どももいっしょの玉入れ、綱引



高瀬川で水あそび

き……と、足腰が痛むほど走り、力を使った。まさに全員が心をひとつにして楽しんだ運動会だったと思う。

ただひとつ残念だったのは、農家やセンターの心づくしの豪華な御馳走を（センターでは先生たちが三時間もかけてお弁当をつくり、届けてくれたのだ）、子どもたちといっしょに食べられなかった

こと。この山の学校でも、子どもたちは文部省の決まり通り、教室に入ってお昼をとるのである。

翌月曜日、学校が休みの子どもたちが朝早くから迎えにきた。今日は村祭り。

夜には芝居もかかり、子どもたちも初めてお小づかいがもらえると喜んでいる。

「夜までいてよ、お願い、お願い」

と、智がすがりついてきたけれど、明日早く仕事のある私は、午後にはかえらなければならぬ。

智の案内で神社に行くと、母さんたちが祭りの準備をしていた。子どもたちがつくったキャベツをぜひ持っていくように、というので、農家に行く。

智たちの家には、二学期から、ただひとりの中学三年生、芳樹くんが入っていた。黙々と働き、小さい子の面倒を見、留学生の模範を示してくれる素晴らしいリーダーだ。

「みんなで芳樹兄をたのんでただけど、はんとうにきたの」

と、六年生の由貴ちゃんがうれしそうにいつていた。うるさい二人の男の子と口を聞かない洋子ちゃんを相手に頑張ってきた彼女も、ほっと肩の荷を下したのだろう。

秋の八坂は素晴らしい。きのこ、山菜、木の実……。稲刈りがある。収穫祭がある。子どもたちはこれから、どんな風に豊穣の時を過ごすのだろうか。

◆八坂村・短期山村留学のお知らせ

- ・幼児と母親の自然体験 7/21～30
 - ・幼児・低学年の山村活動 7/27～31
 - ・山村生活 一期8/1～5 二期8/6～16 三期8/1～5 四期8/15～21 五期8/19～25
 - ・長期山村生活 前期7/21～8/15 後期8/9～25
- 他に座禅体験班、北海道酪農生活班など。
費用その他詳細は「育てる会」本部
TEL 〇四二二一四六八五二二へ

テーマ原稿募集

●189号の特集テーマは「知的・内職総まくり」にきまりました。

四月十七日の「わいふパーティ」でも痛感したのですが、外国人に日本語を教えている方、算数の塾をお母さまと二人で経営している方、イタリ語のほん訳をやっている方、フリーライターをしている方、と、何とまあみなさん、いろいろなことをやっていらっしゃることか。

まさに百花繚乱の現実に、目を見はってしまつたものです。専業主婦から兼業主婦の時代へ——このことが言葉だけでなく、実際に着々とすすみつつある、という現実を痛感しました。

そこで189号には、みなさんがやっていらっしゃる「知的・内職を、ぜひレポートしていただきたいのです。あっと驚くような意外なものから、誰でもやっていそうなものまで、千差万別の種類が出てくれば嬉しいのです。

どうしてそのお仕事を選んだのか、やっていて面白い点、ご苦労な点はどこか、実際に収入は何時間働いてどれくらいになるのか、これからもずっと続けるつもりか、家族の協力はどうかだったかなど、どうか十分具体的に書きこんで下さい。

枚数十五枚から二十枚まで

締切は六月二十日です。

お友達に(わいふ)を おすすめ下さい

●新しい読者をご紹介下さった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

定期購読者をお一人ご紹介下さるごとに、誌代プラス送料とも一回延長。

(六人ご紹介下されば、翌年の誌代・送料とも無料になります)

わいふバックナンバー

- 174号 主婦の再就職四五〇円以下同じ
- 175号 子どもたちの心がこわれてゆく
- 176号 わたしの恋愛体験
- 177号 肉親の老いを見つめる
- 178号 女・からだの履歴書
- 179号 成功したしつけ・失敗したしつけ
- 180号 父親はほんとうに必要か
- 181号 PTA・その苦しみと楽しみ
- 182号 家においてできる仕事
- 183号 女の言いたい放題
- 184号 私の災害体験
- 185号 私の親ばなれ闘争記
- 186号 お医者さんを診断する
- 187号 10年前のわたし

送料は一冊二〇〇円、二冊〜三冊二五〇円、四冊〜六冊三〇〇円、七冊〜九冊まで三五〇円です。十冊以上は編集部で負担致します。ご注文は編集部へどうぞ。

(〇三)二六〇一四七七

わいふ・投稿規定

書くもヨシ
書かぬもヨシヨシ

ドンドン書いてノドシドシ送ってノグイグイ載せますノ!

●定期購読者になればどなたでも投稿できます。誌上匿名は可。ただし原稿には住所氏名を明記すること。(無記名ものは受付けません)

●次のコラムへご投稿をどうぞノ

- うちのワルガキ 子どもとその周辺の話題について、どんなことでも。
- オットどっこい 夫について、ノロケ、珍談、不満、ケンカ、何でも。
- ナウい熟年 今どきの若い者へ、一言いい方のためのシルバークーシュー。若い方がそれを読んで、文句言いたい場合もどうぞ。
- ファミリー・イン・ブルー 家庭内、親戚づきあいなどのトラブル、よそ

では言えないホンネのはけ口に。

●マン・ウォッチング 家庭で、職場で、PTAで、その他どこでも、あなたの観察したヒト科男属の生態を。

●職場は多面体 あなたの職場レポート。フルタイムはもとより、パートでも内職でも、切実な体験や悩みなど、ぜひ寄せて下さい。

●親のホンネ 親、ことに母親ほどつらいものはない。子育ての全責任者、何でも母親のせいだと言われ……でもこっちにも言いたいことありますよ。母親だってニンゲンだ。言いたいこと言おう。

●男性専科 敵に塩を送る心意気、男

のいいたい放題のページです。

●マスコミむしる 新聞、雑誌、テレビ。ずいぶんどうかと思うこと、腹の立つこと、被害を受けたこと……いろいろなあるんじゃないですか。遠慮ない告発をノ強いマスコミに弱いミニコミからなぐり込みかけよう。

●マジの発言 まじめは「わいふ」の本領なんですわね。あなたの主張や切実な体験を。

●対話のページ 本誌の投稿や記事についての感想、反論など。

●女の道楽 あなたがやってるホビーについて。

●観たり聴いたり 映画、演劇、音楽

会、展覧会などの感想を。

●生きてます活字人間 読んだものについて。

●遊びましょ こんなところ行ってみた、こんな遊びしてみたなど、楽しかった話を。費用も忘れずにね。

●わいわいガヤガヤ どこにも当てはまらないものを押しこむスペース。

●エッセイスト・クラブ ずいひつによさをたっぷり味わわせてくれるよい文章を。この欄だけ千六百字まで。

●以上いづれも八百字まで。オーバーしても内容がよければ掲載いたします。締切り偶数月二十五日。

×

●持ちこみ原稿 詩、小説、評論、旅行記、ルポルタージュ、どんなジャンルのものでも。二十枚―三十枚程度。長篇なら連載も可。

掲載分には薄謝を贈呈します。締切りはとくにもうけません。

●短い投稿はハガキでもけっこうです。

友だちとおしゃべりする気分で気楽に投稿して下さい。

●絵・カット・イラスト・写真などの投稿も歓迎します。作品を送ってみて下さい。

×

●投稿は原則として一応編集部で選択しますが、投稿規定以内の枚数のものについては、ほとんど掲載されます。

●「わいふ」の特色は、完全な言論の自由を守ることにあります。思想信条を問わず、すべての女たちに自分の考えを発表する場を確保することが、「わいふ」の望みです。どうかこの場をフルに利用して下さい。

●投稿は多少添削することがありますのでご了承下さい。

●「わいふ」からこれまで数人のライターが巣立っています。文章を書くことをしごとにしたいと思っていらっしゃる方に、「わいふ」は絶好の

トレーニングの場となります。あなたもぜひ、利用して下さい。

●あなたの周囲に、誌上でご紹介できるようなすばらしい仕事をしている方、特殊な体験をお持ちの方、ユニークな生活をしている方――はありますか？ そういう方をご存じでしたら、ぜひ編集部までご一報下さい。

また自分自身、書きたいテーマをあたたためていらっしゃる方は、編集部へ声をかけて下さいませんか。有効なアドバイスをして差上げられると思います。

●編集部・編集長へのたよりで掲載ご希望でないものは必ず「私信」とお書きそえ下さい。

●ご自分の投稿に、イラストや写真が用意できる方は、ぜひそれも合わせてお送り下さい。

編集だより

●四月十七日の「わいふパーティ」、主催した編集部でびっくりするほど大勢の方がいらして下さいました。全部で四十二人。日頃からお名前だけ知っていた方のお顔を拝見できたのは本当に嬉しいことでした。

お一人一分ずつを自己紹介にして、あとはフリーに話していただくと思っていたのが、十二時から二時間以上、自己紹介の時間にかかってしまい、フリートークキングの時間が余りにも少なかったのが残念です。

●会費の四千元は高すぎる!というお声がお二人の方から寄せられました。この点も含めて、次回をもっとゆっくり、長い間お話できる席を確保したいと思います。じつはお花見を兼ね都立公園の茶席を借り、お弁当を取って、と計画したのですが、やはり安上りのところは希望者多数で、抽選に落ちました。

●ご投稿を寄せられる方、どうか横書きにし

ないで下さい。原稿整理に大変な苦労をしています。それから、書き出し、改行のときは必ず一マス分下げて書きはじめること。句読点は一マス分とり、その下は空けないこと。よろしくお願い致します。

●「わいふ」は皆さまのお力で支えられていることを日々痛感しておりますが、年間講読料の切れたときに必ず七〇八〇の方はおやめになります。これは当然のことなのですが、その分たえず読者を増やしていけないと、読者が自然に減って、「わいふ」がやっていけないことになってしまいます。どうか「わいふ」の存続のために、お一人でも、お二人でも、新しい読者をふやして下さい。本号はこれに、小さいお子さんを持っていらっしゃる方へのプレゼントとしても最適です。どうかよろしくお願い致します。

●「生きてます活字人間」にご投稿下さる方、本の値だも書いて下さい。

●一八七号の二十九ページ、フレッシュアップはブラッシュアップのミスプリでした。訂正しておわびいたします。

口購読申込は

ハガキか電話でどうぞ。
すぐ本に振替用紙をそえてお送りしますので、折返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。二冊以上とまりますと送料が半額以下になります。

(隔月刊) 188号
1984年7月1日発行
印刷 浩文社印刷
定価 450円
(年間講読料送料共3600円)
編集 発行 わいふ編集部
東京都新宿区加賀町2-4 ☎ 162
TEL (03) 260-4771
郵便振替 東京5-110430
銀行口座 三菱銀行神楽坂支店
普通預金 052-4348909
振込先 (株)グループわいふ

口購読中止は……

かならずお申出ください。送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れても引き続き送本しています。お申出がないとお送りしてしまうので、ぜひハガキか電話を。

さりげなくヨーロッパが香る 三井ホーム「モンブラン」



●モンブランは、完全洋風タイプと和室付きタイプ。「基本は洋風でも和室が欲しい」という方のご希望にもお応えしています。7つのバリエーションあり。それぞれ敷地の広さにあわせてお選びいただけます。

●モンブランはツーバイフォー工法。その独特の壁構造から生まれるのは、まず耐震性。一般木造に求められる基準の約2.3倍の強度。そして大幅に冷暖房費を節約する省エネルギー性。●優れた耐火性が高く評価され、木造でありながら公庫は「簡易耐

火構造」扱いとなり「木造」「不燃構造」より融資額もアップ。最長30年返済なので月々の返済もラク。また火災保険料も約20%割安になります。●また、「アティック」と呼ばれる小屋裏スペースがつけられるほか、話題の「3階建」も可能です。

三井ホーム八重洲営業所

〒104 東京都中央区八重洲2-1-4

八重洲GMビル3F(電)03-281-3131

すてきな生活ワールドJCG

IT'S YOUR TURN.

お元気ですか?

家にとじこもっていませんか?

家事のあいまの時間、

ぼんやりテレビを見ている時間

そんな時間を有効に使ってみませ

んか?

1週間に1日……

1日に数時間……

余暇を利用してみませんか?

そんな気持で始めた私が、

今では社長になりました。

夢みているだけの日々から、

豊かな生活が現実のものになっ
たのです。

私からあなたに、夢を伝えたい。

It's Your Turn…あなたの番
です。

アイキャンは、女性の
社会参加を求める会社です

(有)アイキャン

〒102 東京都千代田区九段北1-4-3 渡辺工業ビル3~5F JCG ☎03(265)0161(代表)

職種・条件等については、電話でお問い合わせ下さい。(11:00AM~3:00PM)